
真・恋姫†無双 -暁伝-

三点リーダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 一曉伝一

【Nコード】

N71150

【作者名】

三点リーダー

【あらすじ】

これは神のミスで死んでしまった少年と友人が異世界に飛ばされてしまうお話。

駄文ですがご容赦下さい。

この作品には主人公最強、ハーレム、原作ブレイク、キャラ崩壊があります。苦手な方はお引き返し下さい。

尚作者はガラスのハートの持ち主なので辛口コメントはご遠慮下さい。

初めに…

これは神のミスで死んでしまった少年が変態友人と共に異世界に旅立つ物語。

NARUTOの様々な術を駆使し、少年と友人は世界を救う事ができるのか!?

って感じの小説です。処女作なので生暖かい目で見守って頂けると幸いです。

この作品はチート、原作ブレイク、キャラ崩壊、ハーレムが含まれております。

苦手な方は引き返して下さい。

作者はガラスのハートの持ち主なので辛口コメントはお控え下さい。

あと早速ですが近い内にアンケートを取りたいのでご協力お願いします。

第零幕 死後の世界…！（前書き）

超駄文…やっちゃまった…

第零幕 死後の世界…!

俺の名前は神谷千。かみやせん

現在高校1年生の15歳。

少し癖の付いてはねた黒い短髪で友人曰くイケメンらしい。

千「で、お前は何でついて来る？」

??? 「ウキキッ！お前がいた方がナンパが成功しやすいんだよ！頼むから一緒に来てくれよ！」

このサルみたいな奴は猿飛猿太。

茶髪に逆立った髪とサル顔のせいであるっきりサルに見える。

つーかどっちかって言う人よりサルに見える。

親友というか悪友というか…まあ悪い奴じゃ無い。

変態猿だが。

猿太「なあ頼むって！ウキッ！」

千「断る。1人で行けよ」

猿太「なあ頼むって！」

後ろから飛び掛られて前によろめく。

そのせいで俺は曲がり角を飛び出した様な形になり…

ドオン！

トラックに…撥ねられた…

千「んあ…？ここは…」

少しだるい体を起こして辺りを見渡す。

一面白い世界。隣には気持ち悪い笑みを浮かべて猿太が倒れていた。

千「おい猿太、大丈夫か？」

確か俺たちはトラックに撥ねられて…。

千「にしてもここは何処なんだ？」

「…？」「ん、簡単に言えばここは死後の世界じゃよ」

背後からいきなり声をかけられ、慌てて振り返るとそこには白髪で長い白髭を蓄えた老人が立っていた。

千「アンタは？」

老人「神じゃ」

神？ふざけているのか？

千「ここは何処だ？俺たちはトラックに撥ねられた筈だ」

神「だからここは死後の世界じゃて、お主等は死んでここに来たのじゃ」

…マジか？

猿太「で、俺たちはどうしてここに？ウキッ」

！？猿太何時の間に！

神「ふむ、実は本来お主等は死ぬはずではなかったのじゃが…」

千「どういうことだ？」

神「神は複数人いての、それぞれ管理している命があるのじゃ。だ
がお主…神谷千の管理書類を間違えての…殺してしまった」

つまり本来俺は死ぬはずではなかったと？

猿太「え？じゃあ何で俺死んでるの？」

神「巻き込まれた形じゃな。お主は運が悪かったの」

猿太「運が悪いで死ぬってどういう事オおお!？」

…ドンマイ。

千「結局、俺たちはどうなるんだ？このまま死ぬのか？戻れるのか？」

神「ふむ、実は異世界に行くチャンスを与えようと思っての、なんなら特別な能力もつけてやるぞ？」

猿太「能力!？ハイハイ!俺はモテモテになる能力が欲しい!ウキッ!」

神「あ、お主には無いぞ？異世界に行かせる事位はできるがお主は自身の運が悪かったからのう」

猿太「…orz」

黒いオーラが駄々漏れだがまあ今はそっとしておいてやろう。

千「じゃあ俺はNARUTOの能力だな。体術はガイ以上、チャクラは尾獣以上、目は永遠の万華鏡写輪眼、瞳力はイタチ以上で…全ての性質変化と血継限界をくれ」

神「人、それをチートと呼ぶ」

千「黙れ。後俺が考えた術も発動できるようにしろ。後…」

神「なんじゃ？結構注文が多い奴じゃのう?」

千「この空間で俺の3年間修行をつけろ」

俺がそう言っていると神はキョトンとした。

神「何故じゃ？」

千「いくら強力な力を持ってもそれを使うのは俺だ。偉大な力でもそれを制御できなければ意味がないからな」

神「ふむ、若いのに中々考えとるの」

千「まあな。で、受けてくれるのか？」

神「まあワシが悪いのじゃし、いいじやろう。あっちの猿少年はどうするのじゃ？」

未だに倒れている猿太を指差す神。つーかそろそろ起きろよ猿太。

千「まあ足手纏いにならない程度には鍛えてやってくれ」

神「うむ、では早速始めるか」

こうして、死後の世界でチート能力を身につけ、異界へ渡るための修行が始まった。

第零幕 死後の世界…！（後書き）

こんな感じです。

誤字脱字があればご指摘願います。

第一幕 異界へ…！（前書き）

戦闘描写って難しい！

第一幕 異界へ…!

さて、俺が死後の世界で修行を始めて早3年。

え？時間飛びすぎ？あまり気にするな。ハゲるぞ？

現在、師匠である神と手合わせ中。

指で印を結んで大きく息を吸う。

千「火遁・豪火球の術！」

口から特大の火球を吐き出すが、あっさりと回避される。

神「どうしたどうした？あたっとらんぞ？」

千「千鳥」

今度は右手に雷を纏わせると、後ろ右腰に挿していた草薙の剣
サ
ス
ケ
v
e
r
を抜く。

黒い柄と鞘に白銀の片刃剣。

その刃に電撃での超振動が加わり、切れ味を大幅に強化する。

千「ハアッ！」

その刀を振りかぶり、神に斬りかかる。

神「おっと」

しかし神の手に突然現れた光の剣により、それは防がれた。

千「チィ！」

この千鳥刀でも切断できない強力な剣だ。

再び印を結んで距離を取る。

千「風遁・真空波！」

フーッと息を吐くと同時に顔を左から右へ動かすと空間が歪み、神に向かって飛んでいく。

神「おっと、こりゃヤバイの」

そんな事を言っているが、余裕綽々でかわす。千「くそ…ならこいつでどうだ！」

多重影分身！

印を結ぶと辺り一面に俺の分身が現れる。

その数は100。

千「喰らえ！螺旋多連丸！」

分身達の手の平にチャクラ…まあ身体エネルギーと精神エネルギーを混ぜ合わせたものを乱回転さる。

そのまま神に突っ込み、100人の俺が連撃を浴びせていく。

神「また面倒じゃなあ…カアッ！」

神が一言叫ぶと、ただならぬ威圧感が辺りに飛び、それだけで俺の分身達は次々に煙となって消えてしまった。

神「さーて、本体は…いない？」

ここだ！

俺は地面から飛び出ると後ろ左腰のポーチにあったクナイを取り出し、刺しかかった。

神「そう来たか！」

だがクナイを持った右手首を掴み、俺が突っ込む勢いを利用して投げ捨てた。

千「うあっ!？」

神「はっはっは、まだまだじゃの」

千「嘗めんなよ…影分身！」

分身を作り出し、その分身を踏み台にし、再び神の方へ向かって跳ぶ。

髪「んなっ!？」

千「螺旋丸！」

チャクラを乱回転させた玉を手の平に、それを神の腹に叩き込む。

神「ぐほっ！」

そのまま神は吹き飛んでいった。

千「ははは…やっと一撃当てれたな…」

□□□□□

千「やっとだな…」

俺と猿太が死んで3年。

この空間で修行という修行を積んだ。

何度も死ぬかと思ったし神が召喚した怪物と戦ったりもした。

そのお陰で俺は大分と強くなった。

千「なあ、俺ってどれぐらい強くなった？」

神「痛ててて…まあ五影クラスじゃろうな。相当強くなったし、これから行く異世界なら無敵かものう」

千「そっか…ところで猿太は？」

神「アイツは中忍クラスじゃろうなあ…週2位でしか修行に参加しなかったからの。まあ異世界ではそこそこじゃろうて」

アイツいっつも修行さばってネットゲやってたからな…自業自得だな。

千「そうか…よし、じゃあ約束の期限だし、そろそろ異世界って所に行くか」

神「猿太も忘れずにの。役に立つ時もあるじゃろうからの」

無い事を祈っている。

アイツお調子者だからすぐに失敗しそうだし。

猿太「おーす、準備おっけー」

向こう側から猿太が歩いてくる。異世界に行く準備が整ったのだらう。

神「では行って来い」

そう言うと光の鏡が現れる。

神「それを潜れ。そうすれば異世界に行ける」

猿太「そっかー！ウキキツ！」

千「世話になった。また会おう」

それぞれ別れの言葉を残し、光の鏡を潜った。

神「はてさて…あの2人はあの世界をどう変えてくれるのかのう…」

神の弦きは、俺たちには聞こえなかった。

第一幕 異界へ…！（後書き）

とりあえず恋姫の世界に來ました。

次回はキャラ紹介とアンケートをしたいと思います。

人物ファイル1&アンケート(前書き)

タイトル通りです。

アンケートは感想の所に書いて下さい。

人物ファイル1&アンケート

名前・神谷千

年齢・18

性別・男

装備・草薙の剣サスケver 首切り包丁 鮫肌 起爆粘土 クナイ
手裏剣

性質変化・火遁 風遁 雷遁 土遁 水遁

血継限界・木遁 迅遁 熔遁 氷遁 鍊遁 他

眼・写輪眼 永遠の万華鏡写輪眼

詳細・神のミスで死んだが異界へ渡るチャンスを手に入れた男。

神からの謝罪でNARUTOのあらゆる術を扱えるようになった。

様々な装備を巻物に収めており、状況に合わせて様々な行動をする事ができ、尚且つ冷静で状況判断にも優れた人物。

だが恋愛事に関しては鈍感で女性が苦手。

後甘いもの好きで辛いものは苦手。

キレると激高等はせずに逆に更に静かになる。

容姿・黒い癖の付いた短髪に整った顔立ち。

服装は黒い袖なしの上着に黒い長ズボン。その上に黒い衣に赤の雲模様の入った暁の装束を着ている。

後ろ右腰には草薙の剣、後ろ左腰にはクナイや手裏剣、巻物が入ったポーチがある。

そして両腰には起爆粘土の入ったポーチもある。

両手の指全てに暁のメンバーの証拠である指輪がはめられているが、指輪の詳しい事は本編で。

イケメンで天然タラシ。

名前・猿飛猿太

年齢・18

性別・男

装備・クナイ 手裏剣

性質変化・火遁

血継限界・無し

詳細・千の死に巻き込まれた不運な男。

将来の夢は自分だけのハーレムを作る事だが猿顔のせいで絶望的にモチない。

オマケに修行もサボリ気味であまり強くなれなかった根性無し。
しかし千とはそれなりの付き合いでお互いの事をそれなりに理解している。

やる時はやる男…多分。

容姿・茶髪の逆立った髪の手。猿顔。

服装は左胸にバナナのワンポイントの付いたシャツに半ズボン。その上に千同様、暁の装束を纏っている。

えー、早速なのですがアンケート取りたいと思います。

何のアンケートかと言うと原作主人公の一刀君の処遇です。

√は蜀にする予定なのですがそこから先は決め悩んでいて…。

えーまずは次の質問にお答え下さい。

Q1 アンチ物にするかダブルヒーロー物にするか。

一刀君アンチにするかそれともダブルヒーローにするか悩みどころです。

次。

Q2 一刀君の強さをどうするか。

原作通りで戦場に出る程の力はないのか、それとも武将クラスに格上げするかのどちらかですね。

以上2つの質問にお答えいただけると幸いです。

一刀君が出るのにはもう少し時間がかかるので結果はもう暫くお待ち下さい。

第二幕 活動開始！（前書き）

思ったより書くのに時間がかかった…。

第二幕 活動開始!

光を潜り抜けるとそこは森の中。

青い空が見える森の少し空けた場所だった。

優しい小鳥の囀りさえずりも聞こえる。

猿太「ウキ、いきなり森の中だけどどうする?」

千「そうだな……神はここが異世界だと言った、だからまずはここがどんな世界なのか調べる必要がある」

猿太「例えば?」

千「文明レベルや常識とか、どんな支配制度がとられているのかだ。ともかくここから……」

続きを言おうとするが、口が止まる。近くの草陰がガサリと揺れたからだ。

いつの間にか小鳥の囀りさえずりも聞こえなくなってしまうっている。

千「気配は…1、2、3…21か」

猿太「じゃあ俺は左側やるわ」

千「俺は右側か、人を殺すのはこれで4度目だな」

あの死後の世界で神が召喚した中にゾンビがいて人間を殺すのは初めてではない。

まあ、あの時は吐きそうになったが。

猿太「そんじゃ…ウキキツ！」

俺は草薙の剣を抜き、猿太はポーチからクナイを2本出して両手で逆手に持つ。

千 猿太「始めるか！」

そう言った次の瞬間、草陰からは黄色い布を巻いて武装した男達が飛び出してきた。

それに反応して俺と猿太も武器を振りかぶった。

□□□□□

これは、とある占い師が出した占い。

流星と共に降り立った天の遣いが動乱の世を太平へと導くと…

もう1人、黒地に赤い雲模様の入った装束を纏った男。

彼は闇が支配する夜のような世に暁の光を届ける者になるであろうと…。

□□□□

辺りには先ほど俺と猿太を襲おうと飛び掛ってきた黄色い布を身につけた男達の死体が転がっている。

血の臭いと死の気配が辺りを支配する。

やはりこの臭いは幾ら経験しても慣れる臭いではないな。

千「臭っ…猿太…」

猿太「俺!？」

千「冗談だ」

さてと、丁度いいからこいつ等から情報を聞き出すか。少し手荒になる可能性もあるが生きてる奴ももうすぐ死ぬだろう。

猿太「大したこと無かったな。ウキ」

猿太が呟くと同時に俺と猿太は武器を収めた。

と言うか返り血がついて暁の装束が汚れちゃった…。

千「錬遁・練成！」

印を結んで自分の服に触れる。

これは俺が考えた血継限界で、要は皆さんご存知の鋼の方が使う錬

金術である。

これで服を仕立て直す。

猿太にも同様に服を直してやる。

猿太「便利だなーその血継限界。俺も欲しいわ」

千「お前は火遁しか使えないだろう」

猿太「まあそうだけどさあ…その内新しい性質変化教えてくれよ？
ウキキ」

千「分かったよ」

適当に約束をして倒れている男達に目を移す。

千「さて…」

尋問開始だ。

男「ぐう…！」

まだ生きて這いつくばっている1人に歩み寄って髪の毛を掴んで顔を向けさせる。

千「何故俺達を襲った？お前達は何者だ？」

男「へ、へへへ…教えるわけねえだろ…」

千「そうか…写輪眼！」

俺は目にチャクラを込めると俺の目は赤くなり勾玉模様が浮かび上がる。

この眼は写輪眼と呼ばれ、体術、忍術、幻術を見抜く事ができ、さらにこの眼を使って相手に幻術をかける事が出来る優れたものだ。

俺は男と目を合わせると幻術をかける。

千「もう1度聞く。お前達は何者だ？なぜ俺たちを襲った？」

そう聞くと、男は幻術の効果で口を開く。

男「お、俺たちは黄巾党…賊だ…お前達を襲ったのは…珍しい紋様の服だったから…売れば金…になる…と、思ってた…」

息も絶え絶えだが、今聞き捨てならない単語があった。

千「今黄巾党と…！？おい、今の王朝の名は何だ？」

男「漢…王朝だ…」

その言葉を最後に、男は息絶えた。

千「ハァ…」

猿太「どーした？」

千「この国の王朝は漢王朝…聞いたこと無いか？」

猿太「…無いな、ウキッ」

そーいやコイツ世界史の成績は赤点だったな…。

千「スマン、お前に聞いた俺が悪かった」

猿太「どういう意味だ！？ウキヤアアアア！？」

黙れ。

俺が睨みを利かせると一瞬で大人しくなった。

千「簡単に言えばここは三国志の時代なんだよ」

猿太「え？タイムスリップって事？」

千「いや、神は異世界へ渡らせると言っていた。だから実際の歴史とは異なる事があるパラレルワールドだと思うのが自然だ」

猿太「…スマン分からん」

死ね。

千「ともかく、ここから移動するぞ」

そう言うと、俺の手の平に小さな口が開く。

それを両腰にあるポーチの中に突っ込み、中にある起爆粘土と呼ばれる粘土を食わせる。

暫くモグモグしているとウエツと吐き出して鳥の形を成す。

千「C2鳳」おおとり

それを2つ作り、投げると煙を上げて大きくなる。

体長2m程の2羽の真っ白な鳥が並ぶ。

猿太「相変わらず便利だねー、その能力」

これは起爆粘土を手の平の口で食わせて生み出す爆発物。様々な形に変化させ動かす事も出来る。

千「乗れ」

俺は片方の鳥の背に乗ると猿太ももう片方の鳥の背に飛び乗る。

千「羽ばたけ」

すると鳥は翼を動かし空に飛び立つ。

猿太「結局これからどうすんの？」

千「とにかく町か村を見つける。そこで情報を整理しよう」

当面の目的を教えて視線を前に向ける。

千「それにしても…三国志か…面倒にならないければいいが…」

俺の呟きは風切る音にかき消された。

□□□□□

とある街。

短い蒼髪に着物のような服を着た女性が飯屋で多量のメンマの入ったラーメンを食べている。

??? 「うむ、やはりメンマは美味い…」

満足げに頷きながらメンマを食べていく女性の頬を風が擦る。
くすくす

??? 「…? 気のせいかな?」

何かを感じたような反応を取るが、気のせいだと判断し、再びラーメンを食す。

彼女の名は、趙雲 子龍。

自分が仕えるべき主を探す旅の途中なのだ。

この後、昇り龍は暁の光と出会う。

それが何を意味するのか、今はまだ、誰にも分からない…。

第二幕 活動開始！（後書き）

次回は星と出会います。フラグ立てます。無双します。

第三幕 暁の目的…！（前書き）

今回は千と猿太の目的を決めます。

第三幕 暁の目的…!

俺と猿太は空を飛んでいると下に少し大きめの町を見つけたので近くで鳥から降りてそのまま町に入った。

千「やっぱり町の感じは古代中国って感じだな」

建物や服装などを見ると、それがよく分かった。

千「とにかく宿を取ろう。そこで1度話し合おう」

猿太「了解！ウキッ！」

そのまま俺達は宿に向かった。

□□□□

さて、場所は変わって宿屋の一室。

え、金？錬遁で練成した。

千「先ず、ここは三国志の時代で、パラレルワールドの可能性が高い」

猿太「うんうん。そういやさっき襲ってきた黄色い奴らって何なの？」

千「あいつ等は黄巾党。まあ賊だ。民の反乱とでも言った方がいい

か？この時期の漢王朝は腐敗しててこれを抑える力はないんだ。だから各地の諸侯が討伐している筈だ」

猿太「…5割分かった！」

千「全部分かれ」

このド阿呆。

猿太「で、結局俺等はなにをするんだ？こんなご時世にさ？」

千「…」

何をするか、か…。

戦争が起こる動乱の時代。沢山の人々がここで死ぬ。

死は辛い。戦争は地獄だ。

なら、どうすればいい？

千「俺達は戦争を無くす。原作では暁は犯罪者集団だが…この世界で俺達暁は…平和の為の戦闘組織になろう」

猿太「平和を求めるのに戦うのか？」

千「残念ながら全てを救う事は出来ない。俺は万能じゃないからな。だが、三国志の勢力である魏、蜀、呉が同盟を組めば世を平和にする事ができるかもしれない…俺達の目標は魏、蜀、呉を連合国にする事だ」

猿太「流石、考えてるね。ウキキッ！でも具体的に何すんの？」

千「先ずは三国志で有名な将に会う事だな。それで繋がりを作る。俺の計画：そうだな、統一計画とでも名づけるか：第一段階はそれだ」

猿太「了解！」

千「先ずは地図を手に入れる。それから詳しい情報は…」

俺は印を結んで親指をかじって少量の血を出すと、それを地面につけた。

千「口寄せの術」

ボンッ！と音を立て、煙と共に現れたのは体の右半分が黒、左半分が白の、ゼツと呼ばれる口寄せ獣。

人間の肉体に2つの意識を持っており、戦闘能力は低いが情報収集能力はかなり高い。

白ゼツ「ハァ…何か用？」

コイツ等とはあの死後の世界で契約した。他にも様々な口寄せ獣と契約している。

黒ゼツ「呼び出シタトイウ事ハ情報収集力？」

千「ああ、三国志の人物を探して欲しい。情報がはいり次第、俺達

に報告してくれ」

黒ゼツ「了解シタ」

千「あとこれを着ていけ」

俺は地面を練成して暁の装束を作り出した。

それを着るとゼツは地面に潜るように消えていった。

猿太「アイツにやらせんのか？」

千「ああ、俺達も俺達で探してみよう。この町で情報収集だ」

そんな訳で、俺たちは町に繰り出した。

□□□□

現在、猿太とは離れて行動中だ。

町の人間に聞き込み、情報を仕入れる。

現時点で有名なのは、曹操か、孫策か、袁紹か、董卓位なので、それぞれ情報を仕入れている。

だが…

千「大した収穫は無し…どうするか…」

俺は大通りの隅で建物にもたれかかっている。

さて、どうするか…。

「賊だー！黄巾党が出たぞー！」

その声を皮切りに、皆家の中から荷物を持ってワラワラと逃げている。

千「行くか」

そんな中、離れた場所に待たせておいたさっきの2羽の鳥を呼び寄せると、片方の背に乗り、空に羽ばたく。

上空から見ると、黄巾党の数はおよそ3000といった所だろうか。だが、そんな中、前線で人が吹き飛ぶといった奇怪な現象が起きている。

千「女？」

目を凝らして見ると、そこには蒼い髪を靡かせ、白い着物のような服を着て朱い槍を振るう1人の女性の姿があった。

千「…かなりのやり手だな。だがこのままじゃ数に飲み込まれる」

そうだ。今は奮戦しているが徐々に取り囲まれつつある。体力が切れれば、直ぐに殺されるだろう。

千「やるか…！」

俺は鳥を女性の方へ向けて飛ばすと戦闘の準備をした。

□□□□□

視点・趙雲

旅の途中で町に滞在していたら黄巾党が攻め込んでくるとは予想外だった。

だが所詮賊。群れて襲い掛かってくる事しか能の無い者達だ。

しかしこの数は脅威だ。

目測で3000前後。

他にも仲間がいれば何とかなるが生憎と私は1人。何とかこの場を乗り切らなくてはならない。

趙雲「ハッ！」

我が得物、龍牙で賊を斬り伏せていく。

既に200は倒したのではないか？そう思った直後、足元にあった黄巾党の死体を踏んでしまい転んでしまう。

流石の賊も、その隙は見逃さなかった。

黄巾党1「死ねええええええっ！」

くっ…ここまでか…

??? 「喝！」

急に大声が聞こえたと思ったら

ドゴォン！

近くで爆発が起こった。一体なんだ？

??? 「大丈夫か？」

爆煙の中から現れたのは…黒い撥ねた髪に整った顔立ち、黒地に赤い雲模様の入った衣を纏った男だった。

見惚れてしまった。

意図せず、呼吸をするのも忘れて。

爆炎を背にするあまりのその男の美^{ひと}しさに

思わず、見とれてしまった。

□□□□□

視点・千

俺は鳳を敵の最中へ突っ込ませ、飛び退くと喝！と合図をすると同時に起爆粘土で出来た鳳は大きな爆発を起こして消えた。

今ので50は倒せた。

とにかく、蒼髪の女性に近づいて声をかける。

千「大丈夫か？」

しかし反応は無い。目だった外傷も無いがどうしたんだ？

千「…おい、しっかりしろ」

屈んで肩を掴んで揺さぶるとようやくハッとなって我を取り戻した。

女性「き、貴殿は？」

千「その話は後にしよう、戦えるか？」

そう聞いて立ち上がると女性も槍を持ち直して立ち上がる。

女性「当然だ。まだまだいけますぞ」

千「そうか、行くぞ！」

俺は草薙の剣を引き抜き、黄巾党の1人を斬った。

反対側ではさっきの女性が槍で黄巾党を斬っているのが分かる。

俺は素早い動きで一気に6人の黄巾党を切り裂き、絶命させた。

続いて印を結んで息を吸い込む。

千「火遁・豪火球の術！」

俺が大きな火球を吐き出すと黄巾党は20人ほど飲み込まれていた。

黄巾党2「な、なんだコイツ！？火を吹きやがったぞ！？」

黄巾党3「よ、妖術使いか！？」

色々言われているが一度バックステップで下がると、女性も下がってきて背中合わせの状態になる。

女性「貴殿は妖術を使うのか？」

千「それも後だ。ま、俺とアンタならそう長くならないさ、直ぐに終わらせよう」

女性「フッフ、そうですね」

そう言葉を交わし、俺達は再び敵に突っ込んだ。

第三幕 暁の目的…！（後書き）

次回こそ無双してやるぜ！

つーかあれでフラグ立ったのかな？もう一押しする必要がありますなあ。

第四幕 暁&昇り龍VS黄巾党（前書き）

んー、フラグ立て難いぜ。

第四幕 暁&昇り龍VS黄巾党

再び草薙の剣で黄巾党達を斬り倒す。

俺とあの女の合計で既に500人は倒した。

残りのチャクラ量は9割程度。まだまだ余裕だ。

千「一向に減った様に見えないな」

次から次へと現れる黄巾党は怯えてはいるものの次々と襲い掛かってくる。

千「雷遁・偽暗！」

口から眩い閃光と共に雷が撃ち出される。

黄巾党達「ぎゃあああああああ！？」

今の一撃でまた30は倒した。

女性「今度は雷ですか…一体幾つの術を…」

千「雷遁・雷獣走りの術！」

腕に溜めた千鳥を狼の形に形態変化させて稲妻のように素早くジグザグに走らせるとその通り道にいた奴らは全て感電死した。

これでまた30人倒した。

千「土遁・土陵団子」

今度は地面を巨大な球体に切り取って持ち上げる。

黄巾党「う、うわあああああああっ!?!」

それを見て逃げ惑う黄巾党達だが俺はそこまで甘くない。容赦なく巨大な土球を投げつける。

黄巾党達「あああああああああっ!?!」

巨大な土球は黄巾党を押しつぶして絶命させる。

黄巾党1「に、逃げろー!」

黄巾党2「ば、化け物だああー!」

全く、町を襲おうとしたのに逃げる時はこれか…。

千「逃しはしない…木遁・大樹林の術」

俺の左腕から大きな木が生え、黄巾党を突き刺していく。さらにそこから枝分かれするので串刺し状態だ。

黄巾党3「ぐはっ…!」

黄巾党4「ガッ…!」

次々に枝が生えてゆき、最終的には腕から木を分離する。

女性「フフ、私も負けていけないな！ハイハイハイハイハイハイッ！」

女性も手に持つ槍で次々に黄巾党を突き刺し、切り裂いていく。

男「おいお前等！逃げるんじゃない！」

大分倒し、そろそろ1000を超えるのではないかといった所で、指示を出している男を見つける。

千「貴様が指揮官か？」

男「そうだが：お前が妖術師って奴か？残念ながら快進撃はここま
でだぜ：俺と一騎打ちしな！」

ほう、自分から挑んでくるとは：こちらから言う手間が省けた。

千「受けて立とう」

草薙の剣を握り直し、前に出ると、指揮官の男も前に出てくる。

千「行くぞ」

先に動いたのは俺。

ガキィ！

草薙の剣を横薙ぎに振って斬りかかる。だが男の手にあった剣に防
がれる。

不快な金属音が出るのは仕方が無いだろう。

この男の実力はギリギリ武将クラスといった所か。

一度離れると今度は男の方から近づいてきた。

男「だりゃあっ！」

ギイン！

草薙の剣で受け止めると金属音が辺りに響く。

千「千鳥流し！」

全身から蒼い雷光を発して千鳥を流す。それは勿論傍にいた男にも感電する。

男「ぐああああっ!?!」

千「フン、隙ありだ」

痺れて怯んだ隙に、がら空きの横っ腹に蹴りを入れると、男は吹き飛んでしまった。その距離は実に10m程。

男「ぐほっ…」

それを見ていた回りの黄巾党と女性は眼を見開いて驚いていた。

それもそうだろう、蹴りで人が吹き飛んだのだから。

男「くそっ…もう許さねえぞ！矢を放て！剣も投げつけちまえ！」

そう言われてハッとしたように黄巾党達は武器を構える。

女性「何だと！？これは一騎打ちだろう！」

男「うるせえっ！こうなったら何でもいいから殺しちまえ！」

女性「止めろー！」

俺に向かって、矢が放たれ、剣や槍が投擲される。

そしてそれは、容赦なく俺の体を突き刺した。

女性「そ…んな…」

男「ははははは！俺達を怒らせた罰だあ！」

下品に笑い続ける男と黄巾党。だが…

バサバサバサ…

俺の体は鳥に分裂して虚空へと消え去った。

男「は？」

今のは鳥分身だ。さっき蹴りで吹き飛ばした時、皆の視線が外れた時に分身しておいた。

本物はここだ。

千「土遁・土中斬首の術」

地面の中から腕だけ出して足を掴み、そのまま地面の中に引きずり込んだ。

その姿は地面から首だけ出ている状態。あまりに滑稽な姿。

そして俺は土中から飛び出る。

男「う、動けねえ!？」

千「終わりだ」

右手にある草薙の剣をギュツと握り、突き刺す姿勢になる。

男「ま、待ってくれ!さっきの事は謝るよ!だから命だけは…」

みすみす死ねとは言わないが、俺は、こういう所で命乞いをする奴が大嫌いだ。

俺はこれ以上無い程冷たい目で男を見下ろした。

千「お前は今まで何度その言葉を無視してきた?」

男「あ…」

凶星だったのか、生気の抜けた声で出した声だった。

千「憎しみに抱かれて死ね」

俺は…男の頭を躊躇せず突き刺した。

黄巾党5「…か、頭がやられたぞー！」

黄巾党6「もう逃げるしかねえよー！」

暫く固まっていた黄巾党に動揺が広がりとうとう逃げ出す始末。

怖気づいた黄巾党は身を翻して逃げていく。

だが追わない。これ以上戦意の無い賊を追ってもただの虐殺にしかならない。

それは俺の望む所では無い。

草薙の剣を収めて町の方を向くと、暁の装束を着た男が走ってくる。

猿太だ。

猿太「千ー！」

千「猿太…」

こちらに走ってくる猿太。俺はそれ快く迎える…訳が無い。

思い切り力を込めて顔面を殴り飛ばし、猿太は清々しい程空を舞った。

千「もう少し早く来い。もう終わっちゃったぞ」

ゆっくりとだが起き上がり殴られた部分を押さえる猿太。

猿太「悪い！ウキキ」

あれだけ飛んだのにもう復活する生命力は見習いたいものだ。

そうして言葉を交わしていると：

女性「失礼：先ほどは助けて頂いて感謝する」

千「別にいいさ。怪我が無くて何よりだ。俺は神谷千」

猿太「俺は千の相棒の猿飛猿太！」

女性「私は性を趙、名を雲、字を子龍と申す。お礼をしたいので町まで戻りませぬか？」

ありがたい申し出だがそれよりも気になる事がある。

猿太「え？も、もう一度名前聞いていい？」

趙雲「む？趙雲子龍だが？」

ポンポンポンと木魚を叩くような音が響き、女性が何を言ったか判断すると

千「なん…だと…？」

出たのはこの言葉だった。

第四幕 暁&昇り龍VS黄巾党（後書き）

次話は宴会ムード。フラグ立てます今度こそ！

第五幕 宴会と恋…（前書き）

やっとフラグ立てれました…燃え尽きたぜ…。

第五幕 宴会と恋：

夜、空には満月と星が輝き、目の前では組み木を燃やしてキャンプファイアーをしている。

さて、動揺していたが何とか持ち直した。

何に動揺していたのかといえば目の前にいる蒼髪の女性のせいだ。

趙雲「どうしました？千殿？」

酒を飲みながら俺に尋ねてくる。

彼女の名は趙雲。皆知っている三国志の英雄が一人。

千「何でもない。気にせず飲めよ」

目を閉じて質問を否定する。まさかあの趙雲が女になっているとは思わなかった。

と言うか、完全に予想外だった。

今は、町に戻ってきて、町民達と黄巾党を追い払った宴会を開いている。猿太はさっき酔いつぶれた。酒なんて初めて飲むのにあんなにがぶ飲みするからだ。

ざまあ見ろ。

趙雲「それにしても賑やかですな」

千「賊の脅威が去ったんだ…バカ騒ぎもしたくなるさ」

趙雲「千殿は猿太殿のように混ざらないのですか？」

千「ガラじゃないんでな…」

俺も酒を飲む。…ん、いい味だがあまり沢山は飲めないな。

千「にしても、もしあの時俺が助けに入らなかったらどうする気だったんだ？あのままじゃ死んでたぞ？」

趙雲「そうですね…だが私には黄巾党に襲われる町を見捨てる事など出来ませんからな」

成る程、人間としては美德だが死にたがりでもある。

千「弱い民を守る正義感もいいが自分の力量を把握しておけよ」

もう一度酒を飲む。

趙雲「ですがやはり民を見捨てる事は私には出来ません」

千「なら死にたいのか？死の先には何も待っていない。ただ永遠の無だ。死ねばそこで過去も未来も全て、一瞬で奪われる」

趙雲「…」

千「お前が生きていればまだ救われる命もあるだろう。だから無理はするな。生きろ、生きてそのか弱き民を救い続けてみせろ」

暫くの沈黙…だが向こうでは町民の騒ぐ声と猿太のいびきが聞こえた。

趙雲「フフ、まさかそんな事を言われるとは思ってもいませんでした。是非貴方に我が真名を預けたい」

千「真名？」

趙雲「真名を知らないのですか？」

千「初耳だ」

趙雲「真名というのは親しい者にしか教えてはならない真の名です。許可無く真名を呼ぶと殺されても文句は言えないという神聖なものです」

流石は異世界。様々な文化がある。

千「そうか、なら俺の真名というのは千の部分に当たるな」

趙雲「なっ！？じゃあ私は今まで真名を許可無く…！？」

千「いや、別にいい。真名のようなものであって真名ではないからな。好きなように呼んでいい」

趙雲「そうですか…では私の事は星と呼んでください。それが私の真名です」

千「星…受け取っておこう…」

俺は趙雲、星の真名を受け取った。

女性の名前を呼ぶなんて初めてかもしれないな。

千「そういえば…さっきの話の続きだが…」

星「？」

千「お前の力が足りないなら、俺がお前を守ってやる。お前が死んでしまいそうになった時は、俺が助けてやる…」

星「…／／／」

顔が赤い…？何故だ？

星「いやはやこの趙子龍、殿方にそんな事を言われたのは初めてですな…／／／」

千「そうか…だがこれは俺の嘘偽り無い、本音だ。俺は家族、友人、知人…そういった絆を大切にしたいからな」

あの時みたいな事は…もうしたくないから。

更に酒を飲むが、だんだんと意識が朦朧としてきた。

星「そうですか…／／／」

千「…ああ」

そう言ったのを最後に、俺は心地よい眠りに付いた。

□□□□□

視点・星

何なんだ？さっきから胸の鼓動が大きくなっている…。

千殿の言葉を聞いた時からずっとだ…。

ふと、寝てしまった千殿の寝顔を見る。

星「フッフ、思ったより可愛い寝顔だ／＼／」

顔が熱くなる。鼓動が早まる。千殿を見ていると落ち着かない。

…そうか、これが…

□□□□□

翌朝。

どうやら俺は酒に弱いらしくあまり飲んでいないのに頭が痛い。

町の出口に立って、荷物を整える。

千「C2鳳」

起爆粘土で生み出した2羽の白い鳥の内片方に二日酔いでダウンしている猿太を放り投げて乗せる。

町の人間や星と挨拶があるため、俺は振り返った。

千「じゃあな星。またどこかで会おう」

星「はい、お元気で…と、その前に少しいいですかな？」

千「何だ？」

星「あれを見てください」

右側を指差されてそちらを向くと、頬に軟らかい感触。

千「…？」

星「そ、それではまた会う日まで！／／／」

顔をまた少し赤くしながらどこかへ行ってしまった。一体何がしたかったんだ？

千「まあいいか」

俺はもう片方の鳥に乗って羽ばたくと空に舞い上がった。

□□□□

猿太「ウエッキー…つ、次の目的地はどこだツキヤ？」

吐きながら聞くな。

千「洛陽に向かう」

そこにいる暴君董卓の正体を暴く。

歴史では悪政を敷いて悪の限りを尽くした暴君らしいがこの町での情報では悪政などしていないらしい。

その真偽を確かめるために洛陽に向かうのだ。

□□□□

洛陽にある飲食店。

そこには一心不乱に空になった皿を積み上げる赤い触角のようなアホ毛が付いた赤髪の少女がいた。

??? 「モグモグ…」

そんな彼女の髪を一陣の風が揺らす。

??? 「…? 気のせい…?」

彼女の名は呂不 奉先。

洛陽の董卓に仕える天下の飛將軍。

飛將軍は、暁と対峙した時、一体どうするのか。

会合の時は近い…。

第五幕 宴会と恋…（後書き）

よっしゃー！恋ちゃん来たぜ！

ついでと言っでは何ですが次回、董卓軍と顔合わせもしてしまうので。

第六幕 洛陽の暴君（前書き）

はい、董卓軍と会います。

ですがある程度したら再び旅に出るので、は安定しません。

第六幕 洛陽の暴君

さて、町を出発して数日。

朝起きて朝食を取り、鳳で空を飛んで夜になったら下りて野宿という動作を繰り返し、洛陽に到着した。

中々の賑わいを見せ、とても悪政を敷いているとは思えない。

千「猿太、情報収集をする。二手に分かれて董卓についての情報を集める。終わり次第この入り口に集合だ」

猿太「了解！」

そう言う猿太はNARUTOの忍者のようにシュバッと飛び上がって何処かに行ってしまった。

千「俺も行くか」

俺も大通りに向けて足を動かした。

□□□□□

千「町民の情報では悪政を敷くなんて考えられない心優しき君主か…実際の歴史とは随分違う…」

ある程度情報を集めた所で情報を整理する。

だが黄巾の乱は起こっているから反董卓連合が組まれるのもそう遠くないだろう。

となると…悪政の話はガセなのか？まあ直接会ってみない事には何とも言えんが。

ぎゅるるるるうゝ…

…因みに今のは俺の腹では無い。だが近くで鳴ったのは間違いない。右を見てみると2つの触覚のようなアホ毛の生えた赤いショートカットで体に刺青を入れた女性がいた。

視線の先は…肉饅屋。

ぐぎゅるるるるるるゝ！

何とも自己主張の激しい腹だ。無視するのも何なので肉饅を5つ買ってそいつの前に差し出した。

千「いるか？」

赤髪の女性「（コクコク！）」

激しく首を縦に振り、肉饅を頬張っていく。その姿はさながらハムスターの様だ。

和むな…。

自然にそう思ってしまった、頭を撫でてしまう。

そうしている内に女性は肉饅を食べ終わった。

赤髪の女性「ありがとう…」

千「気にするな、ただの気まぐれだ」

赤髪の女性「恋…」

千「？」

赤髪の女性「真名…恋…」

千「いいのか？」

コクリと頷いた後、俺を指差して

赤髪の女性「良い人」

千「そうか…俺は神谷千。千と呼んでくれ、恋」

恋「うん…」

ドドドドド…

ん？砂埃が舞いながら向こうから誰かが走ってくる？

小さな女の子か？

??? 「恋殿に近づくなー! ちんきゅーキーク!」

千「おっと」

??? 「なっ!?? ってギャー!??」

ひょいと体を傾けてその小さな女の子の繰り出した飛び蹴りを避けると、女の子は俺の後ろにあった荷物の上に突っ込んでしまった。

千「しまった…かわすんじゃなくて受け止めるべきだったか?」

のん気にそんな事を呟くが、女の子が起き上がってくる気配は無い。

恋「ねね…大丈夫?」

そういえば今この女の子陳宮って言ったよな? この子供がか? 確か呂布の元で働いていたって…まさか…

千「恋。お前、呂布奉先か?」

俺の質問にコクリと一度だけ頷く。

まさか呂布と陳宮まで女だとは…まさかこの世界の将は全員女なのか?

作者「正解!」

…今妙な電波が混線した事を深くお詫びする。

千「まさか恋が天下の飛將軍だとはな…少々驚いた」

だが、これは好都合かもな。

するとやっと起き上がった陳宮が俺にビシッと指を指してきた。何だ一体？

陳宮「今恋殿の真名を言いやがったですな！この陳宮が成敗してくれるのです！」

恋「いい…恋が教えたから…」

陳宮「むう…！なら仕方が無いからねねの真名も教えてやるのです！ねねは音々音と言うのです！ねねと呼ぶがいいのです！」

千「そうか、俺は神谷千。恋、実は頼みがあるんだが聞いてくれな
いか？」

恋「何？」

千「董卓に会ってみたいんだ。橋渡しをしてくれないか？」

恋「…いい」

ねね「恋殿！？こんな男を連れて行くのですか！？」

恋「いい…千、良い人」

千「恩に着るよ」

俺は恋とねねに案内され、城へと向かう。これでかの暴君と出会えるのか…。

ん？何か忘れているような…？

□□□□□

一方ここは町の入り口。

猿太「んー、千の奴遅いなー暇だなー」

こんな感じで猿顔の男が誰かを待っていたそう。

□□□□□

本当にこの世界には驚かされる。

俺の目の前にいるのは白い髪をした小柄な女の子。だがこの女の子こそがあの暴君董卓だそう。

隣にいる緑髪の眼鏡は賈馱らしい。

俺の横には恋、その横にはねねが並んでいる。

一応影武者の可能性も考えたが紹介された時にチャクラの流れを見て嘘を付いているかどうか確かめたが嘘を付いてはいないらしい。

董卓「始めまして千さん。私は董卓です。今日はどんな御用ですか？」

妙に礼儀正しいしとても暴君とは思えない。

やはり性別が違っただけで考え方も変わるものか…。まあ良い方向に傾いてくれて良かったな。

千「いや…1度アンタを見ておきたかった」

董卓「何故ですか…？」

千「まあとある理由で…各地の諸侯に会って行こうとしてな…アンタが1人目だ」

董卓「そうなんですか…？　そういえば千さんは暁…ではありませんか？」

何…？　確かに組織名は暁にして行動しているが自ら名乗ってはいないぞ？

恋「この辺りの町で…黒地に赤い雲模様の入った衣を纏う男性が妖術を使って賊を倒す…一緒にいる猿が暁って言ってる…」

…俺の事だな。つか猿太、勝手に広めるな。

千「ああ、多分それは俺だ」

董卓「…お願いします…私達に力を貸して下さい」

そう言って俺に頭を下げる。ここには数人の兵と俺と恋、ねねと賈馱と董卓しかないが、君主が頭を下げるのは下の者に示しがつかない。

賈馱「なっ!?!月!頭を下げる事なんて無いわよ!」

董卓「いいの、詠ちゃん。お願いします、千さん」

千「…何故だ?」

ねね「最近黄巾党があちこちに出てきて兵の疲労が溜まって士気が落ちてきているのです。だから少しでも優秀な武官が欲しいということなのです」

董卓に変わってねねが説明してくれる。

千「そうか…だが残念ながらそれは出来ない」

賈馱「何でよ!月が頭を下げているのに!」

千「さっきも言った筈だ、俺は各地の諸侯に会って回っているとここに留まる事は出来ない」

董卓「…そうですか」

少し暗い表情になって俯くが、しょうがないだろう。

統一計画を達成するためには、各諸侯と繋がりを持っておかなくてはならない。

まあ董卓も例外ではないが…。

ねね「なら客将になるのはどうなのですか？」

賈馱「そ、そう！それよ！客将にならない！？」

千「客将ね…」

繋がりを持つと言っても…ただ会うだけじゃ駄目か…なら少しの間だけ付き合ってやるかな。

千「その話に乗ろう。俺を客将にしてくれ」

そう言う董卓はパアアと笑顔になる。

董卓「はい！よろしくお願いします！私の真名を受け取って下さい！月と言います！」

千「ああ、受け取っておこう」

賈馱「月が預けるなら僕も預ける事にするよ…僕の真名は詠。…勘違いしないでよ！月が預けるから仕方なくだからね！」

千「分かってるよ…フフフ…」

言い訳している詠が微笑ましく、思わず少し笑ってしまう。

月「へう…／＼／＼」

詠「なっ…／＼／＼」

恋「∴／／／」

ねね「んなっ∴／／／」

？皆揃って顔を赤くしてどうした？まあいいか。

こうして、俺は客将となり、董卓の元で働く事にした。

それにしても何か忘れている気がする…。

□
□
□
□
□

再びここは町の入り口。

猿太「ううゝ∴千ゝ！まだかよー！遅せえよゝ！」

そう叫んでいる猿顔の男に回りは少し引き気味だったらしい。↑後

日談

第六幕 洛陽の暴君（後書き）

次は霞ちゃんと我らが華雄姐さんと出会います。

手合わせします。

無双します。

フラグ立てます。

**第七幕 フラグ乱立…！
(前書き)**

タイトル通りです。

第七幕 フラグ乱立…!

千「知らない天井だ」

スマン、一回言ってみたかったんだ。許してくれ。

あの後、俺は忘れていた猿太を拾って月に副官扱いにして貰った。

そしてここは俺に割り当てられた部屋だ。

千「…玉座に来るように言われていたな…」

そう、詠には起きたら玉座に来るように言われている。何でもまだ会っていない将と顔合わせをするとか。

猿太も起こしていかないとな。

俺と猿太の部屋は隣同士なのですぐに着く。

扉を開けると猿太は涎をたらしてニヤケ顔で寝ていた。

無性にムカついた。

千「水遁・水乱波^{みずらっぱ}」

口から勢い良く水を吐くと猿太の顔面に直撃する。

猿太「あばばば!?! ブハッ!?! ウギャアアア!?!」

朝一番。猿の水混じりの悲鳴が城に響いた。

□□□□□

所変わって玉座。

昨日会った月、詠、恋、ねねともう2人。

紫の髪をポニーテールにしてサラシを胸に巻いて羽織りを羽織っている女性と白いショートカットの髪に黒い少し大胆な服を着た女性がいる。

詠「じゃあ紹介するけど…あっちのサラシを巻いているのが張遼よ」

張遼「アンタが暁か？ウチは張遼や。よろしゅうな」

ヒラヒラと手を振って挨拶してくる。フレンドリーな性格だ。

詠「で、そっちの白髪が華雄よ」

華雄「…」

何故か睨んでくる…。

千「俺は神谷千。こっちの猿顔が猿飛猿太だ。よろしく頼む」

軽く挨拶するが華雄がズイツと前に出てくる。

華雄「千だったな…私と勝負しろ！」

…ハア？

千「何故だ？」

華雄「私とて暁の噂は聞いた事がある。しかしお前がどれほどの武
を持っていてるか、私が直々に確かめてやる！」

成る程、一理ある。噂には尾ひれが付くと言うし、直接実力を見せ
た方が確実か。

千「いいだろう。受けて立つ」

張遼「ほなウチもやるわ！」

何故か張遼も参加する事に。

恋「…恋も」

流石に3人はキツイな…しかも1人は天下の飛將軍だぞ…。

千「おい待て、流石に…」

猿太「ウキヤキヤ！その程度で千に勝つつもりか？千勝ちたかった
ら後1000人は連れて来いやああ！千だけに！ってウキヤー！
？」

俺が言う前に猿が何か言ってしまったのでとりあえず腹に蹴りを入
れておいた。

吹き飛んでいったが。その後動かなくなった所を見ると気絶したようだ。

華雄「言ってくれるな…後悔するなよ…」

張遼「ウチも今のはカチンと来たわー…手加減せえへんで？」

恋「頑張る…」

猿のせいで面倒な事になった。

千「待て待て、俺は何も言っ…」

華雄「さあ来い！中庭で手合わせしろ！」

首根っこ掴まれて引きずられていく。

視界の端で呆れている詠と恋を応援するねねと苦笑いしている月が見えた。

そうだ…折角だからあの技を使ってみよう。

そう思って両腕に包帯を巻いておいた。

□□□□

中庭は結構な広さがあり、それなりに暴れられそうだった。

観客は月、ねねで審判は詠だ。

詠「勝敗は先に一撃でも攻撃を決めた方が勝ちよ。ただし怪我をしない程度にね」

3人の武将はそれぞれの得物を持って、3人の武将が並んでいた。

華雄「さあ！先ずは私とやれ！」

張遼「えー、それはずるいで華雄。ウチも千と戦いたいわー」

恋「恋も…」

順番くらい決めておけ。

千「ハア…」

思わず溜息を吐く。

華雄「では私から行くぞ！」

張遼「ウチにも取っというてや〜」

恋「…」

どうやら華雄に決まったらしく、華雄は武器である戦斧を構える。
俺も腕を構えて何時でも動けるようにしておく。

そして最初に動いたのは…

華雄「ハアアアアッ！」

華雄だ。

俺は腰のポーチから巻物を取り出して勢い良く開ける。

巻物の表面にボンッと煙が上がり、次の瞬間、俺の手には巨大な大刀が握られていた。

この大刀の名は首切り包丁。ギミックで柄が取り外しが可能になっている。

先端側の刀身の真ん中に大きな穴が開いていて。柄側で半円の状態に刃が反っている。

形状が分かり辛い時は悪いがNARUTO本編を見てくれ。

華雄「何だ！？そうか…それが妖術とやらか…だがその程度、叩き潰してくれる！」

振り下ろされる戦斧を首切り包丁で受け止める。思ったよりずっと軽い。

華雄「止めただと…！？」

千「この程度か…！」

そして受け止めていた首切り包丁に力を込めて押し返す。

華雄「くっ！」

弾かれたように後ろに下がった。

だが俺は攻撃の手を緩めず一気に距離を詰め、首切り包丁を振りかぶる。

千「でやあっ！」

華雄「っ!?!」

咄嗟に戦斧を掲げて防いだが…

ガギイイイイン!

と、かなり重い金属音が響き、華雄の武器である戦斧が折れてしまふ。

華雄「ば、馬鹿な！」

俺は直ぐに身を回転させると同時に身を屈め、足を伸ばす。まあ足払いだ。

華雄「うっ!?!」

そのまま華雄は尻餅を付く形で倒れる。

俺はそんな華雄に右手を伸ばす。

やられると思ったのか、そのまま目を瞑ってしまった。

だが俺の右手はデコピンをする形になり…

パチッ

そのまま華雄の頭を弾いた。

華雄「痛っ!？」

言っておくがただのデコピンだ。指先にチャクラを集めてインパクトの瞬間に開放する事でとてもない怪力を発動する事もできるが今回はしていない。

あれやったら大怪我するからな。

華雄「何のつもりだ…？」

俺のした事が気に入らないのか、ふて腐れた顔で華雄が睨んでくる。

千「確かに一撃入れさせてもらった」

ニコリと笑って答える。あれはあれで一撃だ。

華雄「あ…／／／」

何故か顔を赤くする。どこか痛めたのか？

千「どうした？顔が赤いが…どこか怪我をしたか？」

華雄「い、いや！何でもにゃい!／／／」

ろれつが回らず顔が真っ赤だが気にしないでおこう。

そのまま華雄は隅に言ってゴニョゴニョと何か呟いていた。

□□□□□

視点・華雄

最近噂になっている妖術師の暁の1人である千とやらに戦いを挑んだ。

確かに整った顔立ちをしているが強さが無ければ足手纏い……ここで実力を見極めてくれる！

そう思い、霞や恋より先に戦う事になった。

だが、対峙したにも関わらず武器を構えない……私も嘗められたものだ……

華雄「ハアアアアッ！」

我が戦斧、金剛爆斧を振り上げ、千に向かって振り下ろす。

だがその前に奴は腰の入れ物から巻物を取り出し、開くと煙を上げる。

一体何だ？そう思っていると煙が晴れると奴は巨大な大刀を構えていた。

華雄「何だ！？そうか……それが妖術とやらか……だがその程度、叩き

潰してくれる！」

そう思い、そのまま金剛爆斧を振り下ろすが、それは呆気なく大刀によって防がれた。

華雄「止めただと…！？」

馬鹿な…！一撃で決めるつもりだったから手加減は一切していない
と言うのに…！？

千「この程度か…！」

そう言うと、止められていた大刀に力が入り後ろに弾き飛ばされる。

華雄「くっ！」

弾かれた…！そう思ったときは既に千は目の前にいて大刀を振り上げていた。

千「でやあっ！」

その大刀を何とか受け止めるが、強い衝撃が腕を奔る。

次の瞬間、甲高い金属音がなると私の金剛爆斧が折れてしまった。
た。

華雄「ば、馬鹿な…！」

そのまま奴は身を回転させながら私に足払いをかけ、そのせいで私は尻餅を付く形で倒れてしまった。

華雄「うっ！」

次の瞬間、奴の手が私に伸びてきたのが見えた。

やられる！　そう思い目を瞑る。

少しすると額がパチンと弾かれた。

華雄「痛っ！？」

何をするんだ…？　目を開けると満足そうな顔の千がいた。

華雄「何のつもりだ…？」

千「確かに一撃入れさせてもらった…」

華雄「あ…／／／」

そう言いながら笑顔になる。

胸が高鳴る。どうしたんだ？　顔が熱い…！

千「どうした？　顔が赤いが…どこか怪我でもしたか？」

華雄「い、いや！　何でもにゃい！／／／」

ろれつが回らない！　顔が熱すぎる…！

その場にいられなくなり、隅に来て落ち着く事にした…。

□□□□□

視点・千

千「先ずは俺の勝ちだ」

詠「まさか本当に勝つとはね…勝者、千！」

月「千さん…凄い…」

ねね「むう…中々やるのですな…」

首切り包丁を地面に突き刺す。次の戦い…試したい技の時に邪魔になるからな。

千「で、次の相手は？」

次の相手を聞く。

張遼「はいはい！ウチが行くわ！」

薙刀を持ってこちらに来る張遼。

千「よし…準備はいいぞ」

張遼「ありゃ？あのでっかい剣は使わんのかい？」

千「ああ、これから使う技の時に邪魔になる」

張遼「そうか…でも手加減せえへんでな！」

それを皮切りに張遼の薙刀が俺に襲い掛かってきた。

速い！

懷にしまっておいたクナイで辛うじて防御する。

張遼「そんなチンケな剣で防げるほどウチの攻撃は甘くないで！」

一撃一撃に力は無いがかなりの速度だ。

5回も防いだ所で、俺のクナイは折れてしまった。

千「流石は神速…その名に違^{たが}わない」

そう言いながら大きく距離を取る。

張遼「そんなに褒めんといてな！照れてまうやろ」

ニシシと笑顔になる。

千「だが…」

張遼「…？」

千「俺はもっと速い」

さつき巻いた包帯の先端部分を解く。

千「八門遁甲…第一 開門…開！」

ゴォッ！と体からチャクラが溢れ出る。

張遼「ッ！？な、何や！？」

八門遁甲…それは体内に存在するチャクラの密集部位。

これらは名の通り8つあり、これらを開く事で爆発的に戦闘能力を高める事ができる。

だが肉体への反動は大きく、あまり多用は出来ない。

まあ第一開門程度なら胴丈夫だろう。

千「行くぞ！」

一瞬で張遼の懐に近づき、下から足を突き出し顎を蹴り上げる。

張遼「ガッ…！？」

空中に蹴り上げられ、身動きが取れない状態だ。そこへ影舞葉と呼ばれる体術で空中を飛んでいる相手の背後を取る。

張遼「は、速…」

先ほど緩めておいた腕に巻いておいた包帯で相手をグルグル巻きにして動きを封じる。

張遼「受身が取れへん…！」

更に回転を加えて頭から高速で地面に叩きつける！

千「表蓮華！」

ドン！！！！

猛烈な砂埃を舞い上げて辺りが包まれる。

詠「ちょ、ちょっと！こんなの食らったら…！」

ねね「お、大怪我所ではないのです！」

何か言っているのが聞こえるが張遼は無事だ。本気でやるわけがないだろう。

徐々に砂埃が晴れていくと、俺と張遼の姿が露になっていく。

張遼「あ…／＼／＼」

俺は地面に叩きつける直前に包帯を解いてお姫様抱っこの要領で受け止めていた。

千「スマンな…あの技を試してみたかったんだが…怪我は無いな？」

張遼「あ、ああ…お陰様でな…／＼／＼」

ん？華雄と一緒に顔が赤い？一体何なんだ？

張遼「それはそうと…降ろしてくれへんか？ 恥ずかしゅうて…／＼」

千「ん、スマン」

お姫様抱っここから降ろしてもまだ顔は赤かったが、華雄同様、隅に行って何か言っていた。

□□□□□

視点・張遼

華雄が負けてもうた。

華雄は猪やけど決して弱くない。

今度はウチの番や！

でもさっき使った大刀を地面に突き刺して離れた。

どうも使う技の邪魔になるみたいやな。

張遼「手加減せえへんで！」

ウチは先手必勝！ 飛龍偃月刀を振るうけど袖から急に出てきた小さな剣で防がれてもうた。

でも…！

張遼「そんなチンケな剣で防げるほどウチの攻撃は甘くないで！」

何度も攻撃して、それを小さな剣で受け止めるけど、5回位打ち合ったら折れてもうた。

やっぱり強度はそこまで高くないみたいや。

すると千はすごい脚力で一気に距離を取った。凄いな。

千「流石は神速。その名に違わない」

何や褒められてもうたで。

張遼「そんなに褒めんといてな！照れてまうやろ」

自然と顔が笑顔になる。

千「だが…」

張遼「…？」

千「俺はもっと速い」

へえ…言うやないか。

するとさっき両腕に巻いとった包帯を少し解き始めた。

何や？

千「八門遁甲…第一 開門…開！」

そう言った次の瞬間、千の体から気迫を感じた。

何やこれ…！？凄い覇氣や…！

千「行くぞ！」

そう言われた瞬間やった。懐に入り込まれて下から顎を蹴り上げられてもうた。

張遼「ガッ…！？」

そのせいで大きく宙に浮き上がる。

そして自分が宙に浮かんでいると認識した時には、千はウチの後ろに折った。

空中なのに何でピッタリ後ろにつけるんや？

にしても…

張遼「は、速…」

言葉を言い切る前にさっき解いとした包帯で体を巻かれてもうた。

張遼「受身が取れへん…！」

そのまま回転しながら地面が迫ってくる。

千「表蓮華！」

ウチは思った。

あ、これ死んだ。

でも砂埃が舞い上がるのと同時に体が自由になる。

何や？どうなっとるんや？

張遼「あ…／／／」

砂埃が晴れてやっと気が付いた…ウチ…抱かれてるやん…。

決していやらしい意味やないで。

でもこんな近くに良い顔があると…恥ずかしいな…／／／

千「スマンな…あの技を試してみたかったんだが…怪我は無いな？」

張遼「あ、ああ…お陰様でな…／／／」

そ、それよりも…／／／

張遼「それはそうと…降ろしてくれへんか？恥ずかしゅうて…／／／

／

千「ん、スマン」

降ろされたけど…なんで少し寂しいんや…？

でも顔が熱いのは直らんし…さっきからドキドキする…これっても
しかして…／／／

とにかく自分の気持ちを整理するために華雄みたく隅に行く事にした。

□□□□

視点・千

やっと2人。後は恋だけだ。

詠「凄いわね今の技…」

千「まあ、禁術の1つだったんだが…試してみるいい機会だったかな」

詠「まあいいわ。勝者千！」

千「よし…じゃあ恋。やるか？」

恋「ん」

コクリと一度だけ頷いて戟を構える。

千「恋が相手なら…少々本気で戦う。構わないな？」

恋「ん」

再びコクリと頷く。

千「行くぞ」

俺は草薙の剣を抜いて斬りかかる。

だが恋は落ち着いて対処し、受け止める。

今度は恋から突いて来るが、草薙の剣で受け流す。

そんな打ち合いを超高速で10秒程続ける。

辺りには連続で金属音が響き、最早何が起こっているか見えないだろう。

視界の隅見えた月達は口をぽかんと開けていた。

華雄と張遼も俺達を見て驚いている。

そして打ち合いを終えると俺と恋はお互い距離を取る。

恋の攻撃…神の攻撃の次ぐらいに重いな…かなりの力。それに戟の速度も速すぎる。

恋「千、強い」

千「恋も強いぞ…」

お互いに言葉を発すると、再び近づいて打ち合う。

今度は5秒程だが俺は打ち合いの中で影分身の印を結んでおいた。

影分身の実力は本隊の10分の1程度なので打ち合いで隙を付かれて切り裂かれる。

だが勿論影分身なので鳥になって飛び去る。

恋「？」

千「こっちだ」

背後に回りこんで斬りかかる。

だが恋は素早く反応して戟の柄で受け止めるが、今度のはかなりの力を込めておいたので恋が後ずさりした。

恋「…っ！」

千「流石」

キーンと刃と刃の擦れる音を立てて俺は距離を取る。

恋みたいに本当に強い相手は下手に本人狙うより武器を破壊する方が手っ取り早い。

俺は千鳥の印を結ぶ。

千「千鳥」

バチチチチチと俺の右腕に電撃が溜まる。

詠「な、何あれ…」

月「綺麗…」

そのまま草薙の剣を握って刃に千鳥を流し込む。

千「千鳥刀」

俺は一気に決着をつけるために突っ込んだ。

恋「…！」

恋も戟を握り直し迎え撃つように構える。

そして俺は草薙の剣を振り、恋は戟でそれを受け止める…

事は無かった。

俺の千鳥刀は恋の戟をそのまま切り裂き、真っ二つにした。

恋「!?!」

そのまま柄頭で恋の肩を殴ると恋は2m程吹き飛んでしまった。

恋「うぐっ…！」

ドサッと大の字に倒れてしまった。

勝った…。

あの三国最強の呂布に勝ったぞ…！

恋「恋の…負け」

千「その割には嬉しそうだな…？」

倒れている恋に近づいて顔を覗き込むと何故か笑っていた。

恋「…恋より強い人に…会えた」

千「そうか…」

何となく恋に勝った事に感傷に浸っていると

ねね「よくも恋殿を殴ったですな〜！ちんきゅーキーック！」

千「おっと…グッ!？」

背後から来た気配…台詞からしてねねであろうが、飛び蹴りが来るのを予想して体をそらそうとしたが、今頃になって八門遁甲の反動が来て体が痛んだ。

そのせいでかわし損ね、背中にモロに受ける。

千「ぐっ!」

下には恋がいたのでのしかからないように何とか手を付くが…

千「くっ…」

恋「…／／／」

目の前数cmに恋の顔があった。

だが俺は結構な痛みのせいでそんな事を言っている場合じゃなかった。

張遼「なっ…!」

華雄「何…!？」

月「へう…／／／」

詠「なななっ!？」

何とか立ち上がって恋を引き起こす。

千「すまない恋…大丈夫だったか？」

恋「…うん／／／」

顔を赤らめているのはこの時の俺には分からなかった。

取り合えず休もうと振り向いた次の瞬間

ねね「恋殿に何をするですか…!!!!ちんきゅゅゅゅーキーーーーー
ック…!!」

顔面にねねの蹴りが直撃し、俺の意識は刈り取られた。

第七幕 フラグ乱立…！（後書き）

長くなった…戦闘描写が…難しい。

第八幕 洛陽の民（前書き）

日常編。

あの3人組が出ます。

第八幕 洛陽の民

さて、あの手合わせから幾日か経った。

俺は朝、目を覚ます。

千「やっぱり今日もか…」

俺の左側には恋が俺の腕にしがみつくように寝ている

あの手合わせの日からちよくちよく起きると俺の体のどこかにしがみ付いている。

何でいるんだ？と聞いたが答えてくれなかった。

それと上に乗られている時は流石に焦った。

千「恋、起きろ」

腕にしがみ付いて離さないの、仕方なく体を揺すって起こす。

恋「んう…」

片手で目を擦りながら起き上がるが、何故かもう片手はガッチリ俺の腕を掴んでいる。

千「おはよう」

恋「おはよう…／＼／＼」

千「なあ恋、何でちよくちよく俺の寝台で寝てるんだ？」

やっぱり気になって聞いてみる事にした。

恋「：／／／」

顔が赤くなって黙り込んでしまった：まあいいか。

千「まあいい：着替えるからまた後でな」

恋「うん：」

部屋から恋が出て行くと、俺は着替えを始め、いつもの暁の装束に着替える。

そして長いベルトに取り付けられた首切り包丁を手に取り、背負う。これは、わざわざ巻物に戻すのもどうかと思ったので、背負っておく事にしたのだ。

そして呼ばれていた玉座へ向かった。

□□□□□

千「警邏？俺がか？」

玉座に来て最初に言われたのは、警邏をやって欲しいとの事だった。

詠「そうよ、千と猿太が仕事ができるのはこの数日で分かったから

兵からの信用は何かなくなったけど民がまだアナタ達の事を信用しきっていないの」

成る程、それで警邏で親交を深めろといった所か？

千「猿太はいいのか？」

詠「いいのよ。アンタがいない間に書類をやってもらうから」

哀れなり猿太。

千「引き受けよう。でも俺一人でか？」

詠「今日は霞も警邏に出てるわ」

霞とは張遼の真名で手合わせが終わった後教えて貰った。

因みに華雄の真名は神流かんなというらしい。

千「了解だ。じゃあ行ってくる」

そんな訳で、俺は警邏に出るのだった。

□
□
□
□

千「そうは言ったものの…」

俺は大通りの隅に佇んでいた。

千「基本的に平和だからな…警邏と言ってもやる事が無い…」

そう、洛陽は平和なので特に目立った事件も頻繁には起きない。

俺は唯単に街を見回っているだけだ。

霞「あ！千！」

後ろから声がかけられたので振り返ると、そこには張遼こと霞がいた。

千「霞か」

霞「どうしたん？こないな所で？」

千「民と親睦を深めろという事で警邏の任に就いたんだ。だが正直何をしたらいいのか分からないんだ」

苦笑して言う。正直な所、この世界に来てまだ日が浅い。まだまだ分からない事も多いのだ。

霞「ならウチが案内したるわ。付いてきい！」

千「助かるよ」

霞「フフフ…！こないな所で千と逢い引きできるなんて…めっちゃええわあ／＼／＼」

何か言っているがよく聞こえない。まあ気にする必要もないだろう。

千「じゃあ頼む」

霞「任しとき！」

□□□□□

千「…で？」

霞「ちょっと小腹が減っただけやから少し位ええやん！」

あの後、暫く街を案内されていたが霞が直ぐに腹が減ったとの事で飯屋に入っていた。

千「詠にばれたら怒られるな…」

霞「ばれへんければええやん」

確かにそうだが…まあ何も言うまい。

千「お、来たな」

机の上へと運ばれる料理。俺は桃饅を頼んでおいた。

やって来た食べ物を次々と食べていく霞。

それに対して俺は桃饅をゆっくり口に運んで食べる。

霞「モグモグ…！」

千「そんなに急いで食べる必要は無いと思うが…というか喉に詰まるぞ？」

霞「だいひょうぶひゃって！」

多分、「大丈夫やって」と言ったのだろう。

霞「ムグムグ…っ！？ゴホッ！ゴホッ！」

やっぱり詰まらせた。言わんこっちゃ無い。

千「ほら水だ」

俺が飲んでいた水を渡すと、それを一気に飲んでしまった。

霞「プハーツ！助かったわ…」

千「やれやれだ…それにしてもそんなに美味しいのか？」

霞が食べていた料理を見る。

霞「もちろんや！この店、実はお気に入りなんや！何なら食べてみる？」

千「そうか？なら少し貰おうかな」

しかし、新しい箸は無く、霞は俺に箸を渡そうとはしない。

千「霞？」

すると箸で掴んだ料理を俺の方へ向けてくる。

霞「ほら、あーんや／＼／」

どうやら食べさせてくれるらしい。

千「それじゃ…」

霞がこちらに伸ばす箸でつかまれている料理をパクリと食べる。

霞「うひゃ／＼／やってもうたで…／＼／」

ふむ…

霞「どや？ 美味しいやろ？」

舌に来るピリリとした感触…どんどん舌が熱く、痛くなってくる…
こ、これは…！

千「辛あああああああ！！！！」

俺の悲鳴に似た叫びが飯屋に木霊した。

□□□□

千「ハア…ハア…ハア…」

大量の水で舌を冷やしてどうにか落ち着いた。

霞「いや意外な弱点やなあ」

ケラケラと笑っているが正直笑い事ではない。俺は辛い物が致命的に駄目なのだ。

酒にも弱いし。

いかんまだ舌がヒリヒリする…。

千「辛いなら先に言ってくれ……」

少し涙が滲^{にじ}んでしまう。

霞「うっ！／＼／＼／＼／＼／＼／＼／（可愛過ぎやろ！）」

千「まあいい…大分と落ち着いてきたし…」

さっきの叫びの騒ぎも何とか落ち着いてきた。

しかし:

男「オラァ！店主呼べやコラァ！」

急に怒声が響く。

霞「何や？」

そこには3人の男の姿があつた。

男2「アニキの言うとおりにしな！」

男3「ち、チビの言うとおりなんだな！」

すると奥から店主らしき中年の男が出てくる。

アニキ「チビ、デク、お前らは下がってな…」

アニキと呼ばれた男が一步前に出る。

千「…」

俺はそれを静観している。

アニキ「何だこの料理！メチャメチャ不味いじゃねえか！こんなモンに金なんて払えねえぞ！」

店主「す、すいません！すぐに代わりの物を…！」

アニキ「そんなモンより金目の物寄越せよ…そうすりゃ勘弁してやるよ…」

千「少し懲らしめてやるか…」

そう言って立ち上がろうとするが、霞に腕で制される。

千「霞？」

霞「こりゃいいで…あのオッサンがピンチになったら千が飛び出してやつつけるんや…！もうちょい待ったとき」

何故か霞によって作戦が組み上げられていた。

店主「そ、そんな…」

アニキ「いいからさっさと持って来いやあ！」

男の拳が店主の顔面を捉える。

店主「ぐっ！」

霞「今やで！」

：まあ親睦を深める機会には丁度いいので俺は立ち上がってアニキとやらを蹴り飛ばした。

チビ「なっ！？アニ…」

小さい男の腹にローキックを入れて気絶させる。

デク「な、何なんだなお前！」

質問には答えずに背の首切り包丁を抜刀し、刀身の穴にデクという男の首に通すと、引きずるように引っ張りアニキとやらに走り寄る。

そして半円状になっている部分を壁に寄りかかっているアニキの首に押し付ける。

デクとやらは俺が引っ張った影響で首を強打して気絶している。

アニキ「な、何だお前…」

千「俺は董卓軍の客将、神谷千だ。これ以上騒ぎを大きくする気なら然るべき処置を取るつもりだが…どうする？」

そう言って更に首切り包丁を押し付ける。

アニキ「ヒイツ!？」

千「分かったらさっさと行け」

アニキ「は、はいいいっ!」

俺が首切り包丁を離すと気絶しているチビとデクを抱えて走り去っていった。

千「やれやれ…小物が…」

ぼやきながら首切り包丁を背に収めた。

霞「流石千やな!」

千「別に大した事はしてない」

店主「あ、あの…」

千「ん？」

店主「あ、ありがとうございます! 貴方のおかげで助かりました!」

店主は必死な様子で頭を下げてくれた。

千「気にするな。どうせ警邏の途中だったからな」

店主「それでも、ありがとうございます！」

今までこんなに感謝された事なんてないから何だがこそばゆいな…。

こういうの…悪くないな。

そう思って俺の警邏は終わった。

□
□
□
□
□

詠「ほら！まだ次の書類はあるんだからね！」

猿太「ヒィィィィ！だ、誰か助けてエエエエエエエ！」

城には猿男の悲痛な叫びが響いたそうな…。

第八幕 洛陽の民（後書き）

オチ担当になってきた猿太…あまりにも不憫なので次回辺りで実力発揮です。

第九幕 猿太の実力! (前書き)

賊討伐です。オリ技出ます。無双します。

第九幕 猿太の実力！

さて、俺たちは今戦闘の真っ最中だ。

こうなった経緯を回想で伝えよう。

□□□□

今日もまた玉座に呼び出された。

何でも俺達曉に用があるらしい。

猿太「用ってなんだツキヤ？」

月「実は…この辺りに黄巾党が現れたらしいのです…」

黄巾党が？暫く大人しくしていると…

千「それで俺達に？」

詠「そうよ。敵の数は斥候によると5000。一応兵士はつけるけど…アンタ達なら大丈夫でしょう？」

千「ああ、問題無い」

俺と猿太なら7、8万までならどうにか出来る。

神流「待て！私も行けど！」

霞「え〜！ウチも千と一緒に行きたいわ〜！」

恋「恋も…」

オイオイ、流石に全員洛陽を離れるのは良くないんじゃないか？

猿太「こういう時はくじ引きだ！俺が予め用意しておいたこのくじを引け！印付きが当たりだ！」

何時の間に…

霞「これや！」

神流「私はこれだ！」

恋「ん…」

それぞれ掴んでくじを一気に引き抜く！

印があるのは…！

□□□□□

千「じゃあ行ってくる」

恋「（うるうる…）」

千「恋、今度埋め合わせするからそんな目で俺を見るな」

霞「神流、千の事頼むで」

まあ結果から言うとな神流に決定した。

そして俺達は2000の兵を引き連れて洛陽の出発する所だ。

神流「任せておけ！賊を打ち払って戻ってみせる！」

猿太「ほいじゃ行こう！」

そして俺達は洛陽を出発した。

□□□□□

そして賊を発見すると、神流がいきなり敵に突っ込み、戦闘開始だ。

猪にも程があるだろ。

そう思いながらも放っておく訳にも行かず、とにかく助けに向かっている。

まあこんな所だ。回想を終わる。

□□□□□

千「水遁・水乱波^{みずらっぱ}」

口から水を噴出すと目の前の4人の黄巾党が吹き飛んでいく。

猿太「火遁・灰積焼！」

フツと猿太が息を吐くとチャクラが練りこまれた可燃性の灰が散らばる。

千「拙い…！」

猿太は齒の奥でカチツと音を立てると灰が爆発する。

その爆発で40人は賊が吹っ飛んだ。

危うく巻き込まれそうになったが土遁で地面に身を隠して難を逃れた。

千「お前…あれ使うなら先に言えよ」

地面から出ながら文句を言うがヘラヘラしてて反省はしていなさそうだ。

あの火遁・灰積焼は、チャクラが込められている可燃性の灰を吐き出し齒に仕込んである火打石を使って爆発させる術だ。

だが攻撃範囲が広く、使いどころを誤ると自分や味方も巻き込みかねない。

俺も今土遁で地面に潜ってなければ吹っ飛んでいた。

千「ったく…」

地面から出ると、クナイを構えて黄巾党を切り裂いていく。

猿太「まあまあ！無事だったからいいじゃない？」

反省の色は無し。帰ったらしばく。

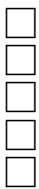
千「神流は見えるか？」

猿太「んー…お！いたぜ！もうちょい先！」

少し先で黄巾党の兵が宙を舞っている。神流はあそこか。

千「急いで合流するぞ」

俺達は敵に囲まれている神流の部隊を救出するために走り出した。



視点・神流

くそっ…たかが賊と甘く見ていたか…。

黄巾党を見つけた時は、私の武で一掃してやろうと考えていたが、数が多く、囲まれて私の部隊は孤立。

四方八方から次々と黄巾党が襲い掛かってくる。

そのせいで疲弊した兵達からやられていく。

黄巾党「オラアッ！」

槍を持った黄巾党の攻撃を防ぎ、逆に切り裂いてやる。

神流「くっ！キリが無い！」

どうすればこの状況を突破できる…！

そう考えたのが命取りだった。

考え事をした時に生じた隙に、偶然だろうが黄巾党の兵が1人斬りかかって来た。

いかん！やられる！

あんなに大口を叩いて…勝手に突出して勝手に討ち死にとは…情けない…！

そう思った直後、何かが私の視界を遮って黄巾党の剣を受け止める。

黒地に赤い雲模様…暁の衣！千か！？

千が私の危機を救ってくれた…流星は私の王子s:r y。

慌てて顔を上げる。助けてくれたのは嬉しいが情けない姿を見せるのは嫌だ。

猿太「大丈夫だったか？ウキキッ！」

そこにいたのは猿顔の男だった。

……………。

神流「何故千ではなくお前なんだー！ー！！！」

戦の最中なのも忘れて猿太の顔面を思い切り殴った。

猿太「ブホォー！ー！？」

クルクルと回転して華麗に空を舞っていた。↑とある兵の感想

そしてその姿はかなり不憫だった。↑後日、千の感想

猿太「な、何で殴るの…？」

神流「もういい…千は？」

猿太「もうちょい向こうで兵を助けてる…痛てて…」

流石に勢いだけで顔面を殴ってしまった事は、正直反省している。
だが後悔はしていない。

何となくスツとした。

猿太「ほいじゃさっさと千と合流するよ。付いてこれるか？ウキキッ！」

神流「馬鹿にするな。千ならともかく、お前などに遅れはとらん」

猿太「言ってくれるねー！最高に頼もしい！行くぜ！」

その一言を合図に、私と猿太は黄巾党を薙ぎ払った。

□□□□□

視点・千

良し、神流と猿太は合流できたみたいだな。

千「さっさと決めるか。水遁・水鮫弾すいこうだんの術！」

突如水の鮫が現れて突進し、黄巾党を30人は巻き込み、着弾した瞬間、水圧で地面を砕く。

黄巾党1「な、何だあ！？」

黄巾党2「妖術師だー！」

今のは水で生み出した鮫を高速で打ち出す術だ。

水遁系の術は、普通水辺で使うのだが、技量の高い忍になると自分のチャクラで水を生み出して放つ事ができる。

猿太「火遁・頭刻苦！」

猿太がこっちに来て、口から広範囲に広がる炎を吐き出す。

俺はバツと空中に飛び上がってそれを回避すると同時に後ろに下がる。

そして今の猿太の術で黄巾党は大幅に減った。

黄巾党3「ふ、2人目だあー！」

猿太が現れて更に敵は混乱する。

千「猿太！」

猿太「おう！」

俺は影分身で2人になり、猿太と3人で同じ印を結ぶ。

千 猿太「火遁連携術・迦琉羅！」

分身を含めた3人の炎が混ざり合い巨大な炎となって黄巾党に襲い掛かる。

黄巾党4「ぎゃああああっ!？」

黄巾党5「あああああああ!？」

悲鳴を上げて巨大な炎に飲み込まれていく黄巾党達になすすべはは

無い。

そしてそのまま黄巾党達は逃げていってしまった。

千「あの残ったのはどうする？」

神流「追って討ち取ってくれる！」

猿太「いんや、俺がやるよ」

そして猿太は少し長めの印を結んでいく。

猿太「火遁・猿炎咆哮えんえんほうこうの術！」

これは猿太オリジナルの術。

大量のチャクラを使い、両手を合わせて一気に前に突き出す事で猿の顔をした炎が放たれ、離れた場所で大爆発を起こす術だ。

手の先から巨大な猿顔の炎が放たれ、黄巾党の中心で爆発を起こす。

その威力は、大地を揺るがし、音は天に響く。

それで残党の半分は倒せた。

神流や兵士はその威力に啞然としている。

千「後は俺がやろう」

そう言って数歩前に出る。

千「万華鏡写輪眼！」

俺の目は、写輪眼の強化版である万華鏡写輪眼に変化し、形状は三枚刃の手裏剣のようになってる。

千「神威^{かむい}！」

俺の見た地点から空間が歪み、押しつぶすように消えた。

その一撃で、黄巾党は完全に全滅した。

今のは見た地点を別の空間へ転送する術である神威と呼ばれる瞳術。見るものによっては物体を引き千切って転送する事もある。

今回の転送先は地中500m。こうして説明している間に既に死んでいつているに違いない。

ふう…これ結構疲れる。

神流、それに兵達もその開いた口を閉じたらどうだ？

千「で、猿太？何か言う事は？」

猿太「…スマン、後は頼みます…ウキヤ…」

そう言う猿太は倒れて眠ってしまった。

あの術は猿太のチャクラの殆どを持って行くので疲労もかなりのも

になってしまふ。今のはチャクラの使いすぎで眠っただけだ。

千「もうちょい鍛えれば何とかなるんだけどな…」

思った事を口にして猿太の体を担ぐ。

こうして俺達の黄巾党討伐は終わった。

神流達は5分後にやっと復活した事をここに追記しておく。

第九幕 猿太の実力！（後書き）

どうですかね？猿太にも戦う力があるって所を見せたかったです。

そろそろ董卓軍編も終わりに近づいて来ました。

第十幕 埋め合わせと陰り（前書き）

ちよいと短いです。

恋ちゃん寄りの日常編。

第十幕 埋め合わせと陰り

さて、賊討伐から数日、俺は今終えた仕事の書類を詠に提出するために詠の部屋に向かっている。

千「詠、入るぞ」

そうやって詠の部屋の扉を開ける。だがそこには詠だけではなくもう1人男もいた。

男「…邪魔が入った様なので賈馱様、今回はここまでにさせて頂きます」

そう言い残して部屋から男は出て行った。

詠「千…どうしたの？」

千「ああ、書類をな…それより今のは？」

詠「今のは徐栄。黄巾党を殲滅するために町や近隣の村の住民を囚にする案を前々から私に提案してくるのよ」

民を囚に…腐ってるな…。

詠「まあ月はそういう策は絶対に嫌がるだろうから採用はしないけどね」

千「それには俺も賛成だ」

詠「ありがとう。書類はそこに置いておいて。今日はもう仕事はないから休んでてもいいよ」

そう言われた後、俺は部屋を出た。

まだ昼前だが…どうするかね…。

すると廊下の向こうからこっちに来るのは…恋だった。

千「恋か」

恋「千…どうしたの？」

千「いや、仕事が終わってやる事が無くてな…何をしようか迷っていたんだ」

苦笑してみせる。もうここでは心を許せるようになり自然な表情をみせるようになった。

恋「っ！／／／」

だが笑顔になると何故か皆赤くなる。

恋「じゃあ…恋と一緒に出かける…／／／」

千「出かける？」

恋「前の埋め合わせ…／／／」

埋め合わせ…？ああ、黄巾党討伐に行く時に約束したな…。

千「そうか、じゃあ町に行こう」

恋「うん／＼／」

まだほんのりと赤い顔のまま、恋は俺について来た。

□□□□

恋「千…次はあっち…」

あっちへこっちへ、様々な出店を回って食べ物を食べている。まあ俺はそんなに食べていないのだが。

前で俺を先導する恋は食べ物で頬を膨らませながら歩いている。

千「なあ恋、まだ食べるのか？」

後ろからそう声をかけると、振り向きこそしないがコクリと頷いた。

千「やれやれ…ん？」

視界の端に写るのは、汚れて倒れている1匹の子犬。

千「恋、ちょっと待ってくれ」

前いる恋に声をかけて倒れている子犬に近寄る。

どうやらかなり衰弱しているようだ。

恋「…大丈夫？」

千「直ぐに命に別状は無いが…このままじゃ危ないな」

恋「連れて帰る…」

千「ああ、その前に…コイツ怪我してるから…」

俺は手の平にチャクラを集めて子犬に当てると怪我をしていた部分
がみるみる治っていく。

恋「…！？何をしたの…？」

千「医療忍術と呼ばれる術だ。名の通り傷を癒したり病を治したり
する事ができる。さあ、速く連れて帰ろう」

治療を終え、俺が子犬を抱えると、恋もコクリと頷いて城へ戻った。

□□□□□

千「大分安定してきたな…もう大丈夫だ」

城に戻って更に子犬の治療を続けて回復させた。

千「で…コイツどうしようか…」

恋「恋が引き取る…新しい家族…」

そういえば恋は他にも沢山動物を飼っていたな…あそこなら大丈夫だろう。

千「そうか、じゃあ頼む」

恋「ん」

つーかこの犬…もしかしてウエルシュコーギーか？

千「なあ、名前どうするんだ？」

恋「…………セキト」

セキト…ね、それって愛馬ならぬ愛犬か。まあ丁度いいかもしれんが。

千「すまん、恋」

恋「？」

千「いや、埋め合わせって言っていたのにこんな事になって」

しかし恋はフルフルと顔を横に振った。

恋「いい…家族増えた…それにあれだけでも楽しかったから…」

普段は無表情だが、今は僅かだが笑顔を浮かべた恋の頭を優しく撫でてやった。

□□□□

??? 「全く…董卓や賈馼は消極的過ぎる…こうなったらやむを得ない…行動を起こすか…」

薄暗い部屋で、とある人間が計画を実行しようとしていた…。

第十幕 埋め合わせと陰り（後書き）

はい、セキトはこのタイミングで登場です。

反省はしている。後悔もしている。

第十一幕 汚れ役…！（前書き）

董卓軍編最終幕です。

ちよいとシリアス？な雰囲気。

第十一幕 汚れ役…!

さて、いきなりだがここに長居し過ぎた、そろそろ旅に出るかね…。

千「と言うわけでそろそろ客将を辞めたい」

詠「と言う訳って所を僕達にも分かるように言って欲しいんだけど…」

まあ急だった事は否めないが何時までもここには統一計画に支障をきたす。

霞「ちよちよ！な、何で急に出てくなんて言い出すん!？」

ねね「理由を言うのですっ!」

千「理由って言っても…元々俺は各諸侯を回って旅をする予定だった…遅かれ速かれ旅に出る予定なんだよ」

その言葉に俺の傍に来た恋の目は潤んでいた。

恋「千…行っちゃうの…?」

その目に罪悪感が浮かんでくるが何とか踏みとどまる。

千「ああ…流石にこれは変えられないからな…」

さつき揺らぎかけたのは秘密だ。

神流「どうしても…なのか…？」

月「千さん…」

千「悪い…明日には出発する」

それだけ言い残して、俺は自分の部屋に戻った。

□□□□□

千「今夜は満月か…」

夜。淡い光を放つ満月を見上げて思わず呟く。

明日でここともお別れだ。まあ反董卓連合の時にはどっちに付くかはともかくこの洛陽に来るだろうが。

千「…これは？」

妙な気配を感じ、俺は気配を感じた方向を見る。

僅かだが殺気が含まれている。

千「…」

俺は立ち上がって夜の闇に消えた。

□□□□□

視点・月

月「ねえ詠ちゃん…やっぱり千さん行っちゃうのかな…？」

私は寢室の寢台に腰掛けながら詠ちゃんに尋ねた。

千さんは少し無口で無表情だけれど仕事もしてくれてるし皆の負担を凄く軽くしてくれている。

そんな千さんがいなくなるのは、心細い、そんな気がする。

詠「何とか説得できるといいけど…難しいかもね…」

月「そうだよね…」

思わず俯いて暗くなってしまう…。

詠「だ、大丈夫よ月！僕が何とかするから！」

月「ううん…いいの、千さんの目的を私達が邪魔しちゃいけないから…」

精一杯の笑顔を詠ちゃんに向けると、何とか笑顔になってくれた。

詠「月…」

次の瞬間、窓が砕けて何かが部屋の中に入ってきた。

月「へうっ!？」

詠「何!？」

その正体は、全身真っ黒な服を着て、手には短剣を持った大柄な男の人だった。

男「…」

その短剣を振り上げて切っ先を私に…

詠「月!」

横から詠ちゃんが私を抱きかかえて飛んでくれたおかげで短剣が私に刺さる事は無かった。

詠「月! 怪我は無い!？」

月「う、うん…」

男「シッ!」

男の人は、詠ちゃんの後ろに突然現れると短剣を振り上げた。

月「詠ちゃん!」

詠「っ!？」

振り返るけど、間に合わない…! 詠ちゃん!

だけれど、突然男の人の手から短剣が弾かれた。

弾かれた時に、金属がぶつかる音がした。そして横の壁には、十字型の鉄でできた投擲物があった。

千「間に合ってよかった：」

壊れた窓には、月光を背に、クナイと呼ばれる武器を手に持った千さんが立っていた。

□□□□

視点・千

気配を追って来ると、そこは月の部屋だった。

窓が壊れていて、中を除いてみると全身黒い服を着た男が短剣で月と詠に襲い掛かろうとしていた。

急いで、だがあくまで冷静に手裏剣を投げると、男が持っていた短剣に当たって弾き飛ばした。

千「間に合ってよかった：」

思わず口からこぼれる。

殺気交じりの気配を感じた時から、暗殺者の類だとは思っていたが：まさか本当に来ているとは：。

千「お前、何者だ？」

男に向き直り、言葉をかけるが反応は無い。

千「なら吐かせるまでだ…！」

手に持っていたクナイを投げつけると同時に走り出す。

男は懷から新たな短剣を抜いてクナイを弾き、俺に迫る。

俺も新たなクナイを取り出し短剣を受け止める。

だが俺は接近する間に鳥分身の印を結んでおいた。前にいる短剣を受け止めているのは分身だ。

俺は勢いをつけて体を高速回転させると同時に地面を蹴った。

千「通牙！」

その回転した体当たりは、俺の分身ごと突き飛ばす。

分身は鳥になって飛び散り、暗殺者は吹き飛んでいった。

男「グッ！」

そのまま壁に激突して埃を舞い上げる…そして埃が消えた時にはもう既にいなかった。

千「逃げたか…」

詠「千…！今のって…！？」

千「暗殺者だな。安心しろ、何とかしておく」

そう言った俺の体は鳥になった。

この体も鳥分身だ。

本体は…

□□□□□

洛陽から少し離れた森の中…ここに先ほど月を襲った暗殺者が辿り着いていた。

男「逃げ切ったか…」

千「残念だったな」

ホッと一息ついていた所悪いが俺は最初からここにいた。

今ここにるのが本体だ。

男「何故ここが…!?!」

千「お前が月を狙っているのは気配を感じた時から分かっている。そして予め逃走路を予測して待ち伏せておいた」

男「馬鹿な…」

千「さあ、お喋りはここまでだ。お前には雇われ主の事を喋って貰

う」

目にチャクラを込めて写輪眼を発動させて幻術をかける。

さて、誰だ？俺の仲間を狙ったのは…？生かしては置かない…！

□
□
□
□
□

…？「クッ…失敗か…！睨め！邪魔をして…！」

洛陽の城…そのとある部屋の1つでとある男が机を思い切り叩く。

…？「…まあいい、あの男達も明日には出発する…少し焦りすぎたな。時間をかけてじっくりと行動するか」

千「その必要は無い」

背後から俺は声をかける。その男…徐栄に。

徐栄「なっ！？」

慌ててこちらに振り返る徐栄。俺の右手には、既に草薙の剣が握られている。

千「残念だったな、お前の策は失敗だ」

徐栄「何の事だ…？」

惚けているが、その顔にはじっとりと汗が浮かんでいる。

千「惚けても無駄だ。アンタの事はあの暗殺者が全て吐いた」

徐栄「な、何だと！？一流の暗殺者で…口を割るなどあり得ないぞ！」

千「俺は相手に幻術をかける事により、情報を聞き出す事が出来る」

グツ、と言葉を詰まらせて後ずさりする。その後ろの壁には…剣。

徐栄「死ねええええ！」

その壁に掛けてあった剣を手にとって俺に向けて振りかぶる。

だがその動きは突然ピタリと止まる。

徐栄「な、何だ…体が…！動かないだと…！？」

千「今お前に金縛りの幻術をかけた、逃げられはしない…」

右手に持つ草薙の剣を振り上げる。

徐栄「ま、待て！待ってくれ！」

千「お前は…俺の仲間に手を出した…最早後悔させる時間も惜しい…」

そして窓から漏れる月の光を受けて輝く刃を振り下ろす。

千「憎しみに抱かれて死ね」

□
□
□
□
□

徐栄を殺し、俺は今庭に来ている。

すると向こう側から猿太が近づいてくる。

猿太「…殺したのか？」

千「ああ」

猿太「そっか。俺は何も言わないけど…何かあったら俺を頼れよ。
相棒なんだからさ。ウキッ」

千「ああ…」

そう言ってくれる猿太に今だけ感謝した。

今だけだ。大事な事だから2回言ったぞ。

猿太「別に今だけじゃなくていいだろ!？」

地の文へのツツコミはご遠慮願う。

千「もう行こう。直ぐに騒ぎになる」

猿太「了解」

両手の口を開いて遼腰のポーチに入れて起爆粘土を食わせ、鳳を作って巨大化させる。

月「待って下さい」

気配が近づいてきたのは知っていた。だから速く行きたかったのにな…。

千「何だ?皆?」

振り向いたその先には、月、詠、恋、ねね、霞、神流がいる。

月「もう…行くんですね…」

千「ああ、やらなきゃならない事がある」

月「そうですか…」

少し沈んでしまった声に、振り返って近づいていく。

そして、屈んで月と視線を合わせる。

月「千さん…？」

千「…でも、どんな形になってもここには戻ってくる。危ない時は助けに駆けつける…だから…大丈夫だ」

今まで、生きてきた中で一番いい笑顔を浮かべる。

月「…へう／＼／」

ん？顔が真っ赤？ああ、至近距離だからか？

立ち上がって皆にも同じ笑顔を見せる。

千「皆、月を頼むよ」

詠「っ！／＼／当たり前よ！どんな事をしても月は僕が守るんだから！」

恋「…うん／＼／」

ねね「や、約束破ったら承知しないのです！／＼／」

霞「任しとき！でも…ちゃんと戻ってきてな？／＼／」

神流「戻ってこなかったらこちらから探しに行って無理矢理連れて来るからな！／＼／」

それぞれと言葉を交わし、俺は鳳の背に乗る。

猿太もう1羽に乗り、大きく翼を羽ばたかせ、夜空に舞い上がった。

千「また会おう！」

そう言い残し、俺と猿太は新たなたびに出た。

□□□□

視点・月

千さん…行っちゃったな…。

千さん…／＼ど、どうしよう…さっきの間近で見た笑顔が忘れられない…！

ドキドキする…！ど、どうしてだろう…？

もしかして…これが恋？

へう…／＼／

ど、どうしよう…これじゃあ千さんと顔が合わせれないよ…！

で、でも、また会いたい…！千さんも最後にまた会おうって言ってたし…つ、次会った時に…！

第十一幕 汚れ役…！（後書き）

はい、董卓軍編終了です。

最後にフラグ立てて行きました。

ここまでで感想等ありましたら是非書いてって下さい。

第十二幕 黄巾党の村…（前書き）

読者の辛口コメントこうげき！

三点リーダーにあたった！

きゅうしよにあたった！

こうかはばつぐんだ！

三点リーダーはちからつきた！

まあそんなテンションで書いた十二幕です。

第十二幕 黄巾党の村…

ふう…洛陽を出て暫く。

俺と猿太は現在曹操のいる陳留に向かって鳳で空を飛んでいる。

いずれ覇道を唱えて霸王なる人物で魏の主。絶対に会って置かなければならない相手だ。

俺の統一計画完遂の為にもな。

猿太「なあ千、まだ陳留には着かないのか？」

千「ああ、まだまだかかる…そろそろ近くの村でも探すか」

鳳の高度を落として村か町を探す。

猿太「はっけ〜ん！あっちに村があるぜ！ウキキツ！」

千「よし、今日はそこで休もう」

村の外れで鳳から下りて徒歩で村へ近づいていく。

村人1「おや、こんな村にお客さんかい？」

入り口には、農具を持った中年の男がいて、俺達に気が付くと興味深そうに見ており、近くまで来ると俺達に声をかけてきた。

千「ああ、一晩泊めてほしいんだが…金ならある」

村人1「そうかい…じゃあ村長の家に行くといい。村の丁度真ん中さ」

千「そうか、恩に着る」

とりあえず、村長の家に向かう事した。

村を歩いていると、畑はそこそこ育っていて、家の数もかなり多い。だが大人の男は見かけるのに、女や子供が殆どいない。

向こうの方には大きな倉庫まで見える。よく黄巾党に襲われないな。

猿太「なあ、千」

千「ああ、お前も気づいたか？」

猿太「ああ…この村…むさいおっさんばかりだ！可愛い女の子がいないぞ！」

千「…」

俺の予想を斜め上に行く読みだ。

猿太「そもそも村に女の子がいらないと言うのは危機的状況である！勿論いるなら若い方がいいがボンキュッボンなお姉さんでも良し！後…」

何故か急に語り出した。こういう時は置いていくに限る。

猿太「あ、後小さい女の子も可愛いよなあ、ウキキツ！まあ俺が何を言いたいかと言うと…って千！？待ってくれ！置いてかないでくれー！」

□□□□

さて、猿太の妄想談義をスルーして村長の家で村長とご対面した。

波平さんへアーの爺さんだった。

で、泊まっていいかと聞いたら

村長「どうぞごゆっくり」

と言われて即決だった。

そんなこんなで俺と猿太は宛がわれた家を借りている。

猿太「いやー良い人達だなあ」

千「お前、本気でそう思っているのか？」

猿太「へ？どういう意味？」

千「耳貸せ」

俺は猿太の耳に顔を近づけ囁く。

千「この村、畑や村の規模自体は大きいのに女子供が殆どいない。村として不自然だ。それにこんなに裕福なのに黄巾党に襲われてないってのも不自然だ。こんな村があったら格好の餌食だ」

猿太「何が言いたいんだ？」

気づけよ。

千「つまり、ここは黄巾党の拠点の確率が高いんだよ」

猿太「じゃあ俺達はどうなんの？」

千「恐らく寝込みを襲って殺すつもりだろうな」

常套手段って奴だな。

千「先ずは倉庫を調べる。奴らが本当に黄巾党なら倉庫に略奪品を隠している確率が高い。お前は猫にでも変化しろ」

猿太「お前は？」

千「姿を消す。忍法・迷彩隠れの術」

チャクラの働きにより、自分の回りの光を操作して、姿を消して見せる。

猿太「うひゃあ…全く見えねえ…」

千「これは瞳術が無いと見破れないからな。ほら行くぞ」

猿太「おっけー。変化！」

変化の術で猿太は茶毛の猫に姿を変えた。

猿太「じゃあ別行動だな。千の姿見えねーし…倉庫で会おうぜ」

千「ああ」

扉を開けて、俺と猿太は別々に外に出た。

□□□□□

千「迷彩隠れ・解」

倉庫の入り口付近で見張りを気絶させて術を解く。

そして後ろから猫に化けていた猿太が来る。

猿太「速いね」

千「お前が遅いんだよ、猿太」

ボンッと煙を上げて猫が消えて猿太へと姿を変える。

猿太「じゃ、行きますか」

倉庫の入り口を開けて中に入っていく。だが中はただの荷物置きになっている。

だがそれはパツと見だ。

猿太「…ただの倉庫だぞ？」

千「お前は何か隠す時に荷物置きにそのまま置いておくか？」

そう言うのと、成る程と言った顔になる。少しは頭使えよ。

千「今から人間のチャクラを感知する……1番奥に隠し扉がある、そこだ」

猿太「ほいほいっと」

素早く移動し、1番奥の隠し扉を見つける。

猿太「回転式ね…ドロン！」

バカな事を言いながら回転式隠し扉を回って向こう側に行った。俺も直ぐに後を追う。

するとそこには手足を縛られて倒れている十数人の女性がいた。

千「猿太！容体は？」

猿太「ん、気絶してるだけだ。多分最近連れてこられたんだと思う」

千「これで決まったな。そっちの隅にあるのは略奪品か…」

この隠し部屋の隅には、袋や箱が置いてあり、恐らく今言ったとおり略奪品だろう。

猿太「これからどうするよ？」

千「夜、ここを脱出する。この女達を逃がす係りと敵を引き付ける係りだ」

猿太「じゃあ俺が皆を逃がす！」

千「そうか。なら変化で荷物に化けている。外が騒がしくなったら後は任せる」

猿太「了解！」

こうして、俺達の黄巾党の村脱出の作戦が始まった。

□□□□

村から数里離れた場所。

ここに2000の兵を引き連れている少女の姿があった。

金髪でそれを左右でクルクルと巻いた少女。

彼女こそ、曹操 孟徳である。

彼女は今、この近くにある黄巾党が潜む村を目指して行軍している最中なのだ。

曹操「秋蘭！目的地の村まではあとどれくらい？」

そして呼び声に答えて傍へ駆けつけた藍色の髪の女性は夏侯淵である。

夏侯淵「はっ、この様子ですと夜には到着するかと」

曹操「そう…ではこのまま行軍を続けるわ」

夏侯淵「はっ！」

そうして曹操軍は歩を進める。

霸王と暁は、次第に近づきつつある。

魏の霸王と暁が出会いし時、一体暁はどうするのか…。

第十二幕 黄巾党の村…（後書き）

ふー…やっと華林出せたよ…でもこっからどうしよ？

ヤバイネタ切れかも…！？

第十三幕 暁と覇王（前書き）

まだ原作開始前なので魏編は短くなると思います。

第十三幕 暁と霸王

夜、決行の時。

俺は部屋に戻って右手に首切り包丁を持っている。

外には複数の気配。そろそろ俺達を襲う気だろう。

千「始めるか…」

首切り包丁を振りかぶり扉へ走り出す！

そのまま首切り包丁を扉に叩きつけると、扉は真っ二つになって吹き飛んだ。

その扉にぶつかり、外で待機していた黄巾党の男が巻き込まれて吹っ飛んだ。

今1人吹っ飛ばしたけど残りの数は15人か。

黄巾党1「な、何だ!？」

千「お前達の事はもう知っている。下手な芝居は止めるんだな」

黄巾党2「チッ!こうなったらやつちまえ!」

芝居がばれたて開き直ったな…一気に襲い掛かってきやがった。

首切り包丁を大きく横に振りかぶって思い切り振りぬくと斬撃の余

波で15人全員大きく吹き飛んでいった。

黄巾党3「うあああああああっ!？」

黄巾党4「ぎゃああ！」

千「さて、今ので集まってくるな…ここからが本番だな」

肩に首切り包丁を担いで足を進めると、家から武装した黄巾党がぞろぞろと現れた。

千「火遁・火龍弾！」

印を結んで1軒の家に向かって口から炎を吐き出す。豪火球程の威力は無いが家1つを焼く事くらいは出来る。

家は燃え上がり、崩れていく。

黄巾党5「どうなってんだ!？」

黄巾党6「妖術師だ！」

やれやれ、また妖術師か。忍なんだがな。

千「火遁・火龍炎弾！」

再び印を結んで口からさつきとは比較にならない程の炎を吹き出す。この炎はチャクラで操っているため自在に動かせる。

その炎で出てきた黄巾党を焼き払う。

黄巾党7「ぐあああああああー!?!」

黄巾党8「ほ、炎の龍だ!」

黄巾党9「た、大変だ! 倉庫に閉じ込めておいた女達がいねえ!」

黄巾党10「何だと!?!」

さて、猿太も上手くやったみたいだし、大技で決めるか。…ん? 入り口の辺りが騒がしいな。

旗? 旗印は…曹だと!?! 曹操軍か!?!

こりゃあ運がいいな。巻き込まないように大技は控えるか。

千「C1雀」

起爆粘土で小型の雀を10個生み出し、それを黄巾党に向かって飛ばす。

そして顔に張り付いた所を…

千「喝!」

小さな爆発を起こして黄巾党の顔を吹き飛ばす。C1はC2と違って爆発は小さいが練りこむチャクラも少なくて済む。

千「残りは約200か」

目測で敵の数を見極めて首切り包丁を握り直して俺は黄巾党の群れに突っ込んだ。

□□□□□

千「コイツで最後か」

地に伏している黄巾党に首切り包丁を振り下ろして止めを刺す。

首切り包丁を振って血を振り払い、背に収める。早く曹操と会わないとな。

???? 「少しよろしいか？」

すると後ろから藍色の髪をした女性が現れる。手には弓を持っている。

千「何だ？」

???? 「我が主が貴方と話をしたいそうなのでご同行願えるか？」

千「お前は？」

???? 「私は夏侯淵 妙才です」

頭痛がしてきた。

やっぱり女かよ……！別段男がいいとかそんな事は無いがやっぱり戸惑う。

嫌な予感もしてきた。

千「そうか…俺は神谷千…同行しよう」

とにかく、曹操に会う事が重要だ。猿太とは後で合流すればいいだろう。

俺は夏侯淵に付いていった。

□
□
□
□
□

誰か頭痛薬を持っていないか？

夏侯淵に連れられて曹操の陣営まで案内されたら目の前にいる金髪をクルクルにした少女が曹操らしい。

月の時と同じくらい驚いた。

彼の覇王がこんな少女だったら誰でも驚くだろう？

因みにその横にはさっき案内してもらった夏侯淵と長い黒髪の女。多分夏侯惇だろう。まだ隻眼じゃないんだな。

曹操「貴方は？」

千「…神谷千」

曹操「その衣…暁に間違いないわね？」

どうやら予想以上に俺達暁の噂は広まっているらしい。

多少名が売れる分には構わないが有名になりすぎると動きが取りにくくなるから今は隠密が吉…のはずなんだが…また勝手に広めてきたな猿太の奴。

千「ああ」

曹操「噂ではもう1人猿顔の男がいると聞いたのだけれど？」

千「今は別行をしている…捕まっていた女達を逃がしてどこかに隠れている筈だ」

曹操「そう…その男をいま呼べるかしら？」

俺は指先を少し噛み切って印を結んで血をつけた手を地面に置く。

千「口寄せの術」

煙と共に猿太が現れる。人間の口寄せの術だ。

猿太「どーした千？ここ何処？」

千「まあ、な…女達は？」

猿太「近くの村まで連れてったよ」

よし、猿太の方も成功してたか。

千「ここは曹操の陣営だ。あの小さいのが曹操」

まあ急に呼び出したので状況だけ説明してやる。

猿太「えゝマジ？」

まあ驚くよな。

夏侯惇「貴様！今華琳様を小さいと言ったな！叩き切ってくれる！」

おいおい、夏侯惇短気だな。得物を抜いて俺に向けて構える。

曹操「止めなさい春蘭。話が進まないわ」

夏侯惇「グッ…分かりました…」

流石は君主か、夏侯惇を宥めると夏侯惇は渋々だが剣を引いた。

曹操「さて…単刀直入に言うわ。貴方達、私の物になりなさい」

…まあ、勧誘されたのか？ストレートな奴だな。

夏侯惇「か、華林様！？この様な男達を…！？」

華林「遠目からだったけど、この男の術はかなりの物よ…仲間に加われば私の覇道の助けになるわ」

成る程…まあ繋がりを持つためには少し触れ合う必要があるな。

千「正式な将にはなれないが…客将ならやってもいい」

曹操「…何故客将に？」

千「俺には目的がある。その為にはずっと一箇所に留まっている訳にはいかない」

曹操「そう…なら今はそれでいいわ。今は…ね」

その顔に妖しい笑みを浮かべて俺を見つめてきたが、悪いが乗るわけにはいかないな。

猿太、鼻の下伸びてるぞ。

曹操「陳留に帰還するわよ」

踵を返し、部下に命じるその姿は君主の物であった。

もし統一計画の事が無ければ、この曹操に仕えていたかもしれないな。

これが、俺と霸王の異名を取る少女との出会いだった。

第十三幕 暁と霸王（後書き）

はー…やっと華林と会えたよ…ってかこの頃の魏ってまだ曹操と夏侯惇と夏侯淵しかいないのか？

ネタ少ない…早くフラグ立てるか。

第十四幕 響鳴穿！（前書き）

ま、手合わせ的な展開です。

第十四幕 響鳴穿！

千「やっと到着か…」

俺と猿太は、曹操が治める陳留にやって来た。

曹操「じゃあまずは城に来なさい。早速だけれどやって貰いたい事があるの」

猿太「やって貰いたいって…何を？」

曹操「それは秘密よ。まあ城に着けば分かるわ」

まあ直ぐに分かるし深くは聞かないで置こう。猿太も同じ考えに至ったのかも聞くことはしていない。

□□□□□

千「…で？」

曹操「だから、春蘭と秋蘭…夏侯惇と夏侯淵と2人1組で手合わせしろって事よ」

俺達は兵の調練場で夏侯姉妹と向かい合っていた。

回りには兵士と曹操。どうやら観戦するみたいだ。

夏侯惇「さあ構えろ！」

夏侯淵「悪いが手加減はしない」

猿太「えー…どうしてもやんなきゃ駄目？」

ガクリと両肩を落として項垂れている猿太。乗り気じゃないみたいだがここで実力を示しておかないとな。

千「やる気が無いなら猿太は下がってろ、俺がやる」

数歩前に出ると夏侯惇の顔が歪む。

夏侯惇「貴様…1人でやる気か？私達を嘗めているのか？」

千「別段お前達を馬鹿にするつもりは無いが…まあやる気が無いのに猿太を参加させると猿太が怪我するからな。俺がやると言っただけだ」

夏侯淵「…私は構わないが…まずは姉者から…」

千「いや、1人づつは面倒だ。まとめてかかって来てくれ」

そう言って背の首切り包丁を抜いて方に担ぐ。

夏侯惇「ほう…ここまで嘗められたのは久し振りだ…！」

おいおい、額に血管浮き上がってるぞ？曹操もニヤリと笑っていないで宥めてくれ。

ギインと鈍い音が辺りに響き渡る。

これはいきなり斬りかかってきた夏侯惇の大剣を俺が首切り包丁で受け止めた音だ。

今は剣と剣の押し合い：つまり鏖競り合いのようになっている。

夏侯惇「くっ！受け止めただと：！」

千「自分の腕力に自身を持つのはいいが慢心は己の足元を崩すぞ」

更に力を込めて振り切ると夏侯惇は弾かれたように後ろに飛んだ。

曹操「春蘭に力で勝つなんて：妖術だけでは無い様ね：」

千「その程度か？」

夏侯惇「この：！」

刹那、空を切る音が聞こえて咄嗟に首切り包丁を防ぐように構える。

そして2つの金属音がぶつかる。弾かれて地面に落ちたのは2つの矢。

夏侯淵「今のを防いだか：」

そう言いつつも既にもう1つ矢を構えている。

夏侯惇「でやあああっ！」

そして夏侯惇も何時までも待ってはくれず、また接近して斬りかか

ってくる。

それを受け止めると、今度は時間差で矢が襲ってくる。

千「チィ…！」

急いで夏侯惇の剣を払いのけて大きく後ろに下がる。

夏侯惇「フン、思い知ったか！」

夏侯淵「流石に2対1ではな。まあ中々やる方だ」

確かにこの2人の連携は厄介だ。正攻法でいったら勝てるにしても時間がかかる。

千「だったら…」

俺はポーチから巻物を取り出して開く。

煙が出て、俺は現れた武器を右腕に装着する。

武器は右腕に籠手のようにはめられ、先に数個穴が開いている。

夏侯惇「何だそれは…？」

千「喰らってみれば分かる」

その一言と共に、俺は走り出した。

片手で首切り包丁を振り上げて夏侯惇に斬りかかると夏侯惇はそれ

を大剣で受け止めた。だが：

千「決まりだ」

俺は先程装着した右腕の籠手のしかけを指で弾くとチーンと音が響く。

夏侯惇「…何のつもりだ？」

千「もう分かるさ」

すると夏侯惇の耳から血が垂れる。

夏侯惇「な、何だ…！？」

そう言うと同時にフラリと体勢を崩して尻餅をついて倒れてしまう。

千「これは響鳴穿と呼ばれる武器だ。この武器の内部から衝撃音が放たれて耳の奥にある三半器官を破壊し、平行感覚を奪う」

夏侯惇「な、何故お前は大丈夫なんだ…あの距離ならお前にも聞こえている筈だぞ…！」

千「この音はチャクラ…気と言った方が分かりやすいか？それで操作しているから俺に影響は無い」

立てなくなった夏侯淵から目を離して夏侯淵に向き合う。

夏侯淵「くっ…姉者！」

矢を放つが俺は響鳴穿を弾いて衝撃音を発させると、音の流れで矢の軌道を逸らす。

夏侯淵「なっ!?!」

そしてその隙を突いて接近し、響鳴穿を弾いて衝撃音を放つ。

夏侯淵「くっ!」

慌てて下がるがもう遅い。それに響鳴穿は音だ。音速の速さにそれをチャクラでコントロールする。これを回避するのは難しい。

夏侯淵の耳からも夏侯惇と同じように血が垂れる。

そして平行感覚を失い転んでしまう。

千「俺の勝ちでいいな?」

現状を見る限り、2人の戦闘続行は不可能だ。これ以上戦う事も無いだろう。

夏侯惇「ま、まだだ…!」

大剣を杖に、立ち上がる夏侯惇。その根性は認めるが足がフラフラだ。勝負にならない。

夏侯惇「ううっ…」

やっぱり倒れそうだ。フラついた瞬間、俺は夏侯惇を前から優しく受け止める。

夏侯惇「なっ…!?!?／／／」

千「止めておけ。今三半器官を治す」

手に医療チャクラを集めて受け止めた姿勢のまま耳に手を当てて治療する。

すると耳から流れていた血は止まり、足のフラつきも少し納まった。

夏侯惇「な、何をした…?!?!?／／／」

千「言っただろ。治したんだよ」

そう言って体を離す。

夏侯惇「あ…」

少し寂しげな声が聞こえた気がしたが気のせいだろう。

そして夏侯淵も同じように医療忍術で第三器官を治してやった。

曹操「やるわね…私の目に狂いは無かったわ」

近くに曹操がやって来て労わりの言葉をくれる。が…

千「別に俺は大丈夫だが…まあ俺の実力は見てもらえたか？」

曹操「ええ、貴方の強さ、私の真名を預けるに値するわ。私の真名は華琳よ」

千「そうか、では改めてそう呼ばせてもらう」

曹操の真名を受け取ると、夏侯惇がズンズンと近づいて来る。

夏侯惇「そ、それなら私の事も真名で呼べ！私の真名は春蘭だ！」

千「そうか、よろしくな春蘭」

春蘭「あ、ああ……／＼／＼」

何故か顔が赤くなる。怪我は治した筈だぞ……？

夏侯淵「姉者と華琳様が預けるのならば私も預けねばな。私は秋蘭だ」

千「そうか。それじゃあ改めて皆よろしく頼む」

こうして、俺と春蘭と秋蘭の手合わせは終わった。

猿太「あれ？俺空気？」

言うな。

第十四幕 響鳴穿！（後書き）

よし、まず1人！続けて残りも落とすぜ！

第十五幕 俺に出来る事（前書き）

ちよいと魏の人達に計画の事ばらします。

第十五幕 俺に出来る事

まあ、手合わせから数日経った。

ここに来て分かった事が3つある。

1つは華琳がレズでSである事。

2つ目は春蘭と秋蘭がレズでMである事。

そして…

千「はあ…これは拙いな…」

何が拙いかって？俺の部屋にある大量の書類だ。

3つ目は今の魏には、文官が少ないという事。

だから俺や猿太に回ってくる書類もかなり多い。

作業を始めて既に4時間。やっと半分終わったといった所か。

もう1時間前に猿太の頭はショートしてボタンきゅーだ。

しかしこの書類を確認する華琳はもっと凄いよな…政治的才能はこの時代でトップクラスかもな。

千「とにかく半分終わったから一回提出しに行くか」

終わった書類を持って華琳の部屋へ向かう。

そして華琳の部屋の扉をノックする。

千「華琳、書類を届けに来た。入るぞ」

しかし返事は無い。

千「華琳？」

不思議に思った俺は扉を開けて中を覗き込む。

そこには、机に寄りかかりながら寝息をたてている華琳がいた。

千「寝ているのか…」

そりゃそうだな。俺達が提出した書類を1人で確認しているんだ。疲れも溜まる。

俺は華琳を抱えると寝台に降ろして掛け布団をかけてやる。

千「こんな少女が覇王とはな…」

予想外にも程がある。

…そういえば今まであまり考えなかったけど何故神は俺と猿太をこの世界に送り込んだんだ？

将が女になった三国志の世界に：

何か理由があったのか？それとも理由は無いのか？

千「止めておこう」

こんな事、考えても分からない。俺は俺に出来る事をするだけだ。

千「統一計画：それを果たすだけだ。今の俺には：それしか出来ないのだからな」

そう言って俺は部屋を出て行った。

書類はまた後で出しに来ればいいだろう。

□□□□

視点・華琳

ん…寝てしまったようね…。

誰かに抱えられている…？

うつすらと目を開けると、そこには千の顔があった。

やっぱりそこらのブ男とは違うわね…。

そして私を寝台に降ろすと、徐おもむろに考えた顔になった。

千「こんな少女が霸王とはな…」

少女…そんな風に言われたのは久し振りね…。

そう呟いた後、千はまた考えたような顔になる。

千「止めておこう」

何を止めるのかしら？考える事？

千「統一計画…それを果たすだけだ。今の俺には…それしか出来ないのだからな」

統一計画…？

そう呟いた後、千は出て行った。

一体どんな計画なのかしら…？千がそれしか出来ない…面白そうな計画ね…。

今度聞いてみようかしら？いえ、多分答えてくれないわね。止めておきましょう。

さて、折角千も気を使ってくれたのだし。もう少しだけ眠りましょう。

□□□□□

そして、調練所を通りかかったら、そこには秋蘭が矢を的に向かって構えていた。

その矢は、放たれると吸い込まれるように的に刺さった。

千「やるな…」

俺は弓も死後の世界で神から教わり、そこそこは出来るようになった。
ている。

秋蘭「ふう…ん？千？」

俺の視線に気づいたのか、顔をこちらに向ける。

俺は書類をその場に置いて秋蘭に歩み寄る。

千「やるな」

秋蘭「いや、まだまだだ。お前との手合わせでそれがよく分かった。
華林様をお守りするために、もっと力をつけなければ」

千「そうか…なあ、少し弓を貸してくれ」

秋蘭「ん？いいが…弓も扱えるのか？」

千「ああ。少しな」

弓と矢を受け取って弦にかけて引く。

静かに矢を放すとその矢は空気を切り裂いて的に中心に当たった。

その様子に、流石の秋蘭も目を見開いて驚いている。

千「まあ、こんなもんだ」

秋蘭「す、凄いな…いきなり真ん中に当てるとは…」

千「しっかり狙って、コツが分かれれば案外難しい事でもない。秋蘭なら直ぐにできるようになる。教えてやろうか？」

秋蘭「ああ、是非頼む」

弓を返してコツを教えてやる。

秋蘭「こうか？」

千「いや、もう少し…」

秋蘭「やはり難しいな…」

千「やっぱり口でだと難しいな…こうだ」

口では説明が難しいので傍に近づいて後ろから手を取って体を動かしてやる。

秋蘭「なっ！？せ、千？／＼／＼」

千「ん？どうした？あ、もう少し腕を引いた方がいい」

秋蘭「あ、ああ…／＼／＼」

そして放たれた矢は…的から大きく外れた。

千「どうした？集中しないと当たらないぞ？」

秋蘭「あ、ああ…／＼（こ、こんな状態で集中できるか…！）」

千「ほら…もう1度…」

もう1度同じ様に体を動かさせる。

そして今度は矢を引いた状態を維持させて離れる。

秋蘭「ふう…／＼（ホッとしたような残念なような…）」

千「ほら、狙ってみろ」

秋蘭「ああ」

弦を引き絞り、的を狙う。そして放たれる。

その矢は、秋蘭の手から離れると次の瞬間には、最初からそこにあつたかのように的の中心に刺さっていた。

千「流石だ」

秋蘭「千のお陰だ。礼を言う」

千「いや、俺はきつかけを与えたに過ぎない。そのきつかけをどれだけ自分の実力に繋げるのかはお前次第だ」

秋蘭「ああ。それにしても…剣や術だけでなく弓も扱えるなんて…

何処で修行したんだ？」

何処で、か…

千「そうだな…ここではない何処か、とでも言っておこう」

冗談混じりにフツと笑う。

秋蘭「何だそれは？」

クスリと笑って俺達は笑いあった。

秋蘭「なあ、千」

千「何だ？」

秋蘭「以前、目的があると言っていたな？その目的とは何なんだ？」

…悪いが統一計画の事を話す訳にはいかないな。

千「それは言えないが…そうだな、あえて言うなら…全てを1つにする事だな」

秋蘭「全てを…？」

千「そして…俺に出来る事だ」

空を見上げ、黄昏るような表情になる。

まだまだ完遂までは遠い。だが必ずやり遂げてみせる。

秋蘭「∴／／／」

力を持ってこの世界に来たんだ。俺にはそれが出来る。

千「誰かがやらなきゃならないんだ」

秋蘭「そうか∴」

そして俺は調練所を後にした。

□□□□□

視点・秋蘭

千は調練所から去っていった。

千に目的を聞いた時、寂しそうな顔をしていた∴。

その顔を見た時、胸が締め付けられるような感覚に陥った。

それと同じく、心の臓が速く、強く高鳴る。

何だ∴？この感覚は∴？

秋蘭「千、お前の言う目的は分からないが∴もつと回りを頼ってくれ∴」

人知れず、私はこんな言葉を呟いていた。

第十五幕 俺に出来る事（後書き）

フラグ…立てたつもりです。

言わないで下さい。私にはこれが限界なんです（泣）

第十六幕 イレギュラー・邪神の陰謀（前書き）

はい、今回は伏線です。

オリキャラの予感…！

第十六幕 イレギュラー・邪神の陰謀

千「賊討伐？」

玉座に呼び出されて俺達に命じられたのはそれだった。

華琳「そうよ、ここから少し東の村に黄巾党が現れたから私と春蘭と秋蘭と貴方達で討伐に向かうの」

千「了解だ。出発は何時だ？」

華琳「貴方達の準備が整い次第出発するわ」

猿太「うい。じゃあさっさと準備するか」

そして俺と猿太は装備を整え、賊の討伐へと向かった。

□
□
□
□

死後の世界

視点・神

はっはっは！久し振りの登場じゃ！

皆覚えとるか？ワシが千とその他1名（スマン、名前忘れた）を異世界に送り込んだ張本人！

我輩は神である。名前はまだ無い。

悪かった。ちょいとふざけてみただけじゃ。

まあそんな訳で暇がある時はあの異世界を覗いて千達の様子を見て
おる。

ほう…千の奴はもうかなりの女子おなこを落としておるのう。

するとこの光り輝く世界に黒い断面が現れる。

これは…！

神「こんな所に何の用じゃ？邪神殿？」

そこには年齢20歳前後の全身黒一色の服を着た男が佇んでおった。

奴こそ、ワシのような純粹な神と対を成す存在、邪神じゃ。

普段は干渉する事など無いのじゃが…？

邪神「クク…そんな言い草は酷いですよ？」

相変わらず腹の底の見えん奴じゃ。

邪神「貴方が管理をミスした男…神谷千とやらが行った世界…あの
世界は中々面白そうですね？だから少しちよっかいを出してみ
る事にしました」

何じゃと！？

神「ふざけおってからに…！神は直接世界に干渉する事は禁じられているのを忘れたか？」

邪神「おや、そんな常識は知っていますよ？ですがあくまで直接干渉する事は…ですよ？」

こ、こやつまさか…！？

邪神「少し前にワザとですが貴方のように管理をミスし、殺した凶悪な感情を持つ男を能力を与えてあの世界に送り込みました」

くっ…まさか本当にやりおるとは…！

神「何という事を…！お前はあの世界の末路を知っておるだろう！」

邪神「知っています。そして貴方がそれを阻止する為に彼らを送り込んだものね…」

神「何故じゃ！？何故邪魔をする！？」

邪神「面白いじゃないですか…！積み上げた何かが崩れるのは…何かが壊れるのは最高に面白い…！故に私はそれを実行するのですよ！」

コヤツ…最近大人しいと思っておったら…！

神「そんな事はさせん。その野望も千とその他1名（悪い、どうしでも思い出せん）が打ち砕いてくれるわ」

邪神「見ていれば分かりますよ：既に私の使徒は白装束と接触し黄巾党を裏から操っています。そろそろ呉の辺りに現れる頃ですよ。せいぜい無駄な足掻きをして下さい…」

不気味な笑い声と共に奴は再び現れた黒い断面へと消えていった。

急いでこの事を千達に知らせねば…！

□□□□□

視点・千

千「水遁・水牙弾！」

印を結び、チャクラを水に変換し、その水を槍の形状にして黄巾党を貫く。

今俺達は黄巾党と遭遇。交戦状態だ。

敵の数は10000弱、こちらは6000強といった所で、数では完全に押されている。

その為、俺と春蘭が前線で暴れて引き付けている間に猿太と秋蘭が敵の懷に潜り込み兵糧等を焼き払い、その後挟撃するという作戦だ。

千「雷遁・雷獣走りの術！」

右腕に帯電させた千鳥を形態変化させて狼の形にして打ち出すと通り道にいた黄巾党は感電死していった。

千「春蘭！もうすぐ来るぞ！あまり突出しすぎるな！」

春蘭「分かっている！」

いや、分かっているなら速く戻って来い。俺より10mは前に出ているぞ。

千「全く…！」

背の首切り包丁を抜いて回りに群がる黄巾党を吹き飛ばし、春蘭と合流する。

千「春蘭！一気に行くぞ！」

春蘭「ああ！はあああっ！」

俺達は背中合わせになるとそれぞれ目の前にいる敵を薙ぎ払うと視界が一気に開く程黄巾党を吹き飛ばした。

すると反対側も騒がしくなってくる。

作戦が成功したな。これで勝ちも貰ったも同然だ。

しかし、突然頭に痛みが走る。

千「ぐう…！？」

そのせいで、片膝を付いて首切り包丁を落としてしまう。

その間にも痛みは続いている。

千「何だ…これは…!？」

春蘭「おい千! どうした!？」

春蘭が叫んだ声にも気づかず、頭の中にキィィンという感覚で何かが響いてくる。

千「がっ…! ぐうっ！」

とうとう両手で頭を押さえて蹲ってしまう。

千「うがっ…!」

どんどん痛みが強くなる。だが黄巾党は待ってくれなかった。

黄巾党1「死ねええええええ！」

春蘭「させるかっ！」

剣で斬りかかってきた黄巾党を春蘭が逆に斬り返したのが視界の端に写った。

神『おい千! 聞いておるか!？』

俺の頭の中に直接声が聞こえてきた。

これは…神の声か？

千「何の…用だ…?」

消え入るような声で答えた為、回りには聞こえていないだろう。

神『スマンな。お前の頭に直接会話しておるから脳への負担が大き
いだろうが耐えてくれ。大事な話があるのじゃ』

千「だから…何だ…」

神『その世界にワシとは別の神が邪悪な心を持つ者を送り込んだら
しい。そ奴を倒してほしいのじゃ』

千「その…男の…居場所は…？」

神『呉の方に向かったらしい。それから白装束の協力者が向こうに
おるから気をつけるのじゃぞ。そろそろ通信を切る。これ以上はお
主にとって危険じゃからの』

その後、最後に、「頼んだぞ」とだけ言って俺の頭痛は治まった。

だが俺は顔を上げるとそこには黄巾党が剣を振り上げていた。

春蘭は俺の背中側を守ってくれているが間に合わない。

咄嗟に左腕を構えて防ごうとするが黄巾党の剣が俺の腕と胴体を斬
った。

赤い血が噴出す。

俺はその傷と、あまりの頭痛に気絶してしまった。

□□□□

千「ぐ…う…」

起きた時、もう既に夜だった。

千「ここは…陣営の中か…？」

俺は確か…そうだ、神と通話して…斬られて頭痛で気絶したんだ。

俺の左腕と胸には包帯が巻いてあった。

そして周りを見てみると椅子に腰掛けて寝ている秋蘭と俺が寝かされていた台に頭だけ載せて寝ている春蘭がいた。

華琳「起きたのね」

後ろを振り返ると、そこには華琳と猿太がいた。

猿太「体調はどうだい？ウキヤ？」

千「ん…悪くない…多少傷は痛むが」

華琳「その位我慢しなさい。それにしても…何があったの？春蘭が涙目で血まみれの貴方を抱えてくるから私まで驚いたわ」

千「急に強い頭痛がしてな…それで気絶した。それだけだ」

猿太「頭痛で気絶？何でそんな事？」

ここで神の事を華琳に悟られる訳にはいかない。猿太には後で話せばいいか。

千「さあな」

華琳「後で春蘭と秋蘭にお礼を言っておきなさい。心配しながら徹夜で貴方の看病してたのよ」

千「そっか…そうしよう」

猿太「うう…女の子に徹夜で看病されるなんて…羨ましい！」

五月蠅い。2人が起きるだろうが。

華琳「まあ、心配したのは私も同じだけれど…」

千「ん？何か言ったか華琳？」

華琳「何でもないわ。私も寝るから。明日には陳留に戻るわよ」

そう言って華琳は天幕の外に出た。

さて、華琳もいなくなった様だし…

千「猿太、聞いてくれ。俺が気絶した本当の理由を話す」

そして俺は猿太に神に言われた事を説明してやった。

そろそろ潮時か…呉に向かうかな。

因みに首切り包丁はちゃんと回収してくれていた。

第十六幕 イレギュラー・邪神の陰謀（後書き）

はい、魏編の終了が近づいてきました。

短い気がします。が原作開始後は長めにしますのでご安心を。

第十七幕 異端を追って…（前書き）

短いです。スイマセン。

第十七幕 異端を追って…

俺と猿太、暁はそろそろ魏を離れて呉へ向かう事にした。

そういう訳で俺は玉座で華琳達に旅立つ事を伝えた。

春蘭「な、何だと!？」

秋蘭「…」

華琳「…」

へえ、思ったより華琳の反応は薄いな。

秋蘭は何も言わないが顔を暗くして俯いている。

華琳「ここに残る事は…？」

千「残念だが出来ない。やらなければならない事があるからな」

華琳「そう…なら止める事は出来ないわね。好きにしなさい」

猿太「いやー、華琳は話が分かるからいいね。簡単に話が済んだな」

華琳「…何時か私のものにしてあげるわ…」

ゾクリ!

千「うっ!？」

い、今妙な寒気が…気のせいかな？

華琳「出発はいつ？」

千「明日の昼頃には出発する予定だ」

華琳「そう、ならその時は見送るわ」

千「ああ、それじゃあ準備をする。行くぞ猿太」

俺と猿太は明日の旅立ちの準備の為に部屋に戻った。

□□□□

視点・華琳

…千達が旅立つと言った時、心のどこかにスキマが開いたような感覚に陥った。

これは何…？

顔には出さないようにしたけれど春蘭は大声を出して驚いていたし秋蘭は顔が暗くなっている。

私も…顔には出していないけれど内心動揺していた。

こんなにも千と猿太に依存しているとはね…いえ、正確には千にだけね。

あの戦闘能力に書類の処理速度、是非とも欲しい人材。そして私個人にとっても…

今は無理だけれど…

華琳「…何時か私のものにしてあげるわ…」

ニヤリと笑って私は誰にも聞かれない大きさを呟いた。

□□□□□

視点・千

俺と猿太は、陳留の出口である門にいる。

俺が起爆粘土から生み出した鳳が目の前で待機している。

見送りは華琳、春蘭、秋蘭だ。

猿太「ウキヤ、旅立ち日和だなあ」

千「そうだな、建業に向かうぞ。準備はいいな？」

猿太「おうよ」

俺は振り返って、華琳達と向き合う。

千「世話になったな」

華琳「また何時でも来なさい。歓迎するわ」

千「そうか。何かあった時は当てにしている」

実際、華琳は頼りになる。もしもの時は力を借りるか。

秋蘭「またどこかで会おう」

千「勿論だ…」

秋蘭は昨日とは違い笑ってくれた。

どうにか吹っ切ってくれたみたいだ。

春蘭「こ、今度会うときは貴様に負けない位武を磨いておくからな
！／＼」

千「そりゃ楽しみだな」

春蘭は何故か少し顔を赤くしながら俺に指を向けて噛みつつも元気
になっていた。

それぞれの別れの挨拶を済ませて、俺と猿太は鳳の背に乗った。

千「じゃあ、もう行く」

そう言った直後、白き鳳は翼を羽ばたかせて空に飛び立つ。

次の目的地は呉。別の神が送り込んだ者の事を考えながらも、俺は

次なる目的地を目指した。

□□□□□

とある森の中…白装束の少年と青年が黒服の男と向かい合っている。

少年「…おい！何で暁に手を出さない！？」

「???」「テメエ等じゃあ奴等に勝てねえよ。そんな事も分からねえのか左慈？」

左慈「何イ！？」

青年「落ち着いて下さい左慈」

黒服の男に殴りかかりそうになった左慈を後ろから抑える青年。

左慈「離せ于吉！思い知らせてやる！」

「???」「ククク…テメエにや出来ねえよ。暁を倒す事も、俺に触れる事すらな」

黒服の男は両手で印を結ぶと右腕を左慈に向けて伸ばす。

すると黒服の男の右腕から白い球体が飛び出すと、それは左慈の体内に入り込んだ。

左慈「しまっ…！体が…！」

于吉の手が離れると、左慈は地面に突っ伏した。

「???」お前等は俺の言う事だけ聞いてりゃいいんだよ。ちゃんと協力はしてやるからよ…俺は建業に向かう、テメエ等も後で来い」

そう言い残して黒服の男は去っていった。

左慈「ぐっ…！やっと自由が効くようになった…妙な術使いやがって！」

術の効果が切れて、立ち上がったが、気に喰わないとばかりに、左慈は近くの木を蹴ると、木は大きく傾いた。

于吉「まあ落ち着いて下さい。彼は身勝手ですが私達の目的にも協力してくれています。気をが来るまでは大人しくしておきましょう」

左慈「分かっている…！」

異端なる者を追って、暁は目的を目指す。

そして、世界の結末を変える為、どちらも動き出す。

第十七幕 異端を追って…（後書き）

華林のフラグは少し先延ばしです。

次はちよつと番外編？

第十八幕 2人の軍師！（前書き）

えーあの軍師達と出会います。

第十八幕 2人の軍師!

俺達は建業に向かう道中で荊州に入った。

現在、鳳で山の上空を飛んでいる。

猿太「あー…こんな上空だと少し寒いな…」

千「文句言うな。俺だって寒い」

そう、山の上だけあって気温がそこそ低いので結構な寒さだ。

猿太「さびーよー!凍えちまうよー!」

千「仕方が無い…少し高度を下げるか」

余りにも猿太が喧しいので仕方なく鳳の高度を落とす事にした。

と言うわけで山の本の天辺スレスレの位置を飛行している…。

すると突然下から放たれたであろう矢が鳳の翼を直撃した。

猿太「うおっ!?!何じゃこりゃあ!?!」

千「狩人か?それとも賊…?」

そう言っている間に、鳳に次々矢が刺さっていく。どうやら複数人いるようだ。

猿太「こりゃ拙いんじゃないの!？」

確かにこのままでは流石に落ちてしまう。

千「そうだな、一度乗り捨てるか。飛び降りるぞ」

猿太「あいよ!」

俺と猿太は、鳳から飛び降りると山の中へと落ちていった。

その直後、矢が大量に刺さった鳳も落下していった。

木や葉がぶつかりながら落ちていき、下に落ちる直後に足にチャクラを集中させて木に吸着させると木の幹を走って速度を少し緩めて地面に着地する。

少し離れてしまったが猿太も同じ様に着地しているだろう。

ドオン!

猿太「ぎゃふん!？」

…失敗したのか。

千「猿太、生きてるか!？」

猿太「お、おう…何とか…無事だ…」

茂みの中からは顔面を強打した痕のある猿太がフラフラと出てきた。

千「さて、お客さんだぞ」

猿太「え？じゃあお茶準備する？」

千「そういう意味じゃないぞ」

猿太「分かってるって。ちょっとボケてみただけ」

いや、俺から見たらいつもボケているがな。

草陰が揺れてそこから出てきたのは10数名の黄巾党。鳳を打ち落としたのはこいつ等か。

千「それじゃあ始めるか」

腰の草薙の剣を抜いて黄巾党に向ける。

猿太「ほいほいっと」

猿太も、クナイと手裏剣を構える。

そして俺と猿太は黄巾党と戦いを始めた。

□□□□

視点・諸葛亮

私は諸葛亮。字は孔明、真名は朱里です。

今私達は水鏡先生に言われて山菜を取りに来てるんです。

お友達の鳳統：雛里ちゃんと一緒に山を散策しています。

朱里「雛里ちゃん、この辺りにも山賊の人達が出てくるらしいから早く帰ろう？」

雛里「う、うん」

すると、近くの茂みがガサガサと揺れました。何だろう？

ガサッ！

朱里「はわわっ！？」

雛里「あわわっ！？」

そこから勢い良く出てきたのは黄色い布を巻いて武器を持っている10人程の男の人達でした。

確か最近多くなって来ている黄巾党って人達です！

黄巾党1「なあお譲ちゃん達：少し道案内をしてくれないかい：？」

黄巾党2「全く：さっき逸れた仲間達とも合流できねえし：」

黄巾党3「おじさん達困ってるんだよ：ちょっと助けてくれないかな？？」

雛里「あわわ…！」

た、大変！雛里ちゃんは私より男の人が苦手でもう涙目…！

何とかしないと！

朱里「す、すいません…私達、もう帰る所なんです…！」

黄巾党4「じゃあ丁度いい…一晩だけ泊めてくれないかな…？」

朱里「ひっ…！」

ど、どうしよう…このままじゃ水鏡先生まで…！

黄巾党5「なあ頼むよ…このまま遭難じゃあ洒落にならないだろう？」

雛里「朱里ちゃん…」

朱里「雛里ちゃん…」

2人で身を寄せ合って後ずさるけれど男の人達も少しずつ近づいてくる…。

どうしよう…！怖い…！

??? 「伏せろ！」

突然聞こえた声に驚きながらも、私達はその通りにした。

すると私達の上を何かが通り過ぎていった。

黄巾党1「ぎゃあっ!？」

それは、人だった。

黒地に赤い雲模様の入った服に、背には大きな大刀を背負っている。

少し跳ねた黒い短髪を靡かせてその人は現れた…。

その姿を見て、私と雛里ちゃんはその人に見惚れてしまった。

□□□□□

視点・千

あの黄巾党を片付けたら他にも仲間がいるって言い出したからチャクラを探索してみたら…そこで2人の少女が襲われそうになった。

猿太は後から追ってきている。ちょっと飛ばし過ぎたな。

急いでそこに向かい勢いを乗せて飛ぶ。

千「伏せろ！」

サッと身を屈めた2人の頭の上を飛び越えて飛び蹴りを放ち、黄巾党の1人を吹き飛ばした。

黄巾党1「ぎゃあっ!？」

吹き飛んだ黄巾党はそのまま草陰に入ってそのまま立ち上がらなかった。

千「大丈夫か？」

振り返って2人の少女に聞く。見た目、外傷は無い。

1人は金髪にベレー帽をかぶった少女。

もう1人は薄紫色の髪をツインテールにしている目深なつば付きの帽子をかぶっている少女だ。

千「さて…」

首切り包丁を抜いて威嚇の為に手近な木を一閃、切り倒す。

それを見た黄巾党は目を見開いて、何が起きたか理解すると

黄巾党「すんませんでしたー!」

さっき蹴り飛ばした男を担いで慌てて走り去って行った。

千「ふう、思わぬ足止めを喰らったな」

後はこの2人をどうにかするか。

猿太「ハア…ハア…と、到着…!」

やっと猿太も追いついたか。そこで俺は改めて2人に向き直る。

千「さて…俺は神谷千」

猿太「俺は猿飛猿太！」

千「お前達の名前は？」

するとそこでハッとした様に2人は立ち上がって、

金髪「はわわっ！私は諸葛亮！字は孔明でしゅ！／／／」

紫髪「あわわっ！私は鳳統！字は士元でしゅ！／／／」

……………

ああ、空が青いな（現実逃避）。

猿太「よっしゃ来たアアアアアアア！ロリ軍師来たアアアアアアアアア！」

諸葛亮「はわわっ！？」

鳳統「あわわっ！？」

.....

猿太「ほぐぁー!？」

取りあえず顔面を殴っておいた。

千「えー…大丈夫だったか？」

諸葛亮「は、はいっ！」

鳳統「だ、大丈夫れひゅっ！」

…所で時々噛むのはいいのか？

諸葛亮「雛里ちゃん…」

鳳統「うん…」

すると2人で後ろを向いてゴニョゴニョ話し合っている。

どうしたんだ？

千「どうした？」

諸葛亮 鳳統「あ、あの…お礼がしたいので是非家に来てくださ
いっ!…あう／＼／＼」

…は？

第十八幕 2人の軍師! (後書き)

番外編で1話で終わる筈だったのに続いてしまった…?!

どうなってんだ俺?

第十九幕 水鏡女学院! (前書き)

日常編? です。

第十九幕 水鏡女学院！

先ほど、黄巾党に襲われそうになっていた諸葛亮と鳳統に連れられて俺達は山奥のとある小屋に辿り着いた。

諸葛亮「ここは私達が勉強している水鏡女学院です」

千「へえ…」

猿太「こんな山奥にねえ…ウキッ」

諸葛亮「とにかく、上がって行って下さい」

そう言われて、俺達は小屋に入って行った。

中には、1人の美しい婦人がいた。

諸葛亮「水鏡先生、只今戻りました」

鳳統「ただいまです」

この人が水鏡…やっぱ女か。

水鏡「おかえりなさい…そちらの方々は？」

鳳統「あ、あの…黄巾党の人達に襲われそうになった時に助けてくれたんです…」

諸葛亮「それでお礼がしたくて呼びましたんです」

水鏡「そうですか…2人を助けて頂いてありがとうございます」

丁寧に手を床につけて頭を下げてくれる。別にしたいからしただけだ。

千「頭を上げてくれ、水鏡さん。俺達はそんな事去れるためにここに来たんじゃないんだ」

そう言うと、水鏡さんはゆっくりと頭を上げた。

水鏡「では…どのような用件ですか？」

千「お礼をしたいと言われたからな、一晩泊めてもらいたいんだ。駄目か？」

水鏡「いえ…それ位ならいくらでも」

猿太「そか！じゃあ千、今日はお泊りして明日出発だな！」

千「ああ、世話になる」

そういう訳で、俺達は水鏡女学院で1泊する事になった。

□□□□

猿太「うめえ〜！」

千「ああ、この料理…しっかりと味が染みている」

現在、俺と猿太は水鏡さんと諸葛亮、鳳統の作った料理を食べている。

諸葛亮「ありがとうございます！まだまだありますから遠慮なくお代わりして下さい！」

千「この回鍋肉…かなり美味しい…」

俺の好みの味だ。

諸葛亮「そ、それは私が作ったんです！」

千「そうか、諸葛亮は料理が上手いんだな」

諸葛亮「はわわっ！／／／そんなこと無いですよ！／／／」

少し顔を赤くする諸葛亮。そんなに大きい声出さなくても聞こえるのにな。

鳳統「わ、私も手伝ったんですよ！」

千「そうか、美味しいよ」

少し対抗したようにする鳳統にフツと笑いながら答える。

鳳統「あ、あわわ…！／／／」

何故か鳳統まで顔を赤くする。どうしたんだ？

猿太「…って訳で千の奴1人でフラグ立てまくりやがって…」

向こうでは猿太と水鏡さんが話をしている。ってかフラグって横文字使っても分からんだろう。

水鏡「そうなんですか？猿太さんも頑張ってくださいね？」

猿太「ありがとうございます！俺の事を分かってくれるのは水鏡さんだけです！」

…何だか通じてるよ。

猿太「と言うわけで水鏡さん！俺、アナタの事が好き…」

水鏡「御免なさい」

猿太「せめて最後まで聞いてくれたって…（泣）」

…まあ楽しくやってるか？

千「ん、諸葛亮、お代わりを頼む」

諸葛亮「は、はいっ！」

茶碗を渡して米のお代わりを要求する。

水鏡「あらあら、何だか新婚さんみたいね」

諸葛亮「はわわっ！？／／／」

鳳統「す、水鏡先生!？」

水鏡「フッフ、冗談よ。でもそんなに仲良くしてるんだし真名を預けてもいいんじゃない？」

真名「まあ繋がりを持つためには教えて貰った方がいいかな…。

諸葛亮「そ、そうですね! 千さん、私の事は朱里って呼んでください! …／＼」

鳳統「あわっ…わ、私の事も雛里と呼んでください! あう…／＼」

囃んで顔が真っ赤だが何だか可愛く感じて頭を撫でる。

千「お前達の真名、預かっておく。俺の事はこれからも千と呼んでくれ」

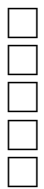
朱里「はい…／＼」

雛里「ふにゅう…／＼」

水鏡「あらあら」

猿太「またフラグ立てやがって畜生ー!」

喧しいぞ猿太。



そんなこんなで翌日。

俺と猿太は俺が再び生み出した鳳の傍で出発の準備をしている。

鳳を生み出した時の朱里と雛里の反応は面白かったな。

猿太「うしっ…準備完了！」

千「…俺も終わった」

そう言うのと2人共鳳の背中に乗る。

朱里「あ、あの…千さん…！」

千「ん？」

雛里「ま、また会えますか？」

…また会えるだろう。実際の歴史通りに2人が劉備の元に行けば、俺達もいずれそこに行く。

千「ああ、お前達が勇気を出せば、また何処かで会えるさ」

朱里 雛里「は、はいっ！」

笑顔で、そして元気のいい返事が返ってきた。

これは期待できそうだ。

千「出発だ」

鳳が翼を大きく羽ばたかせ、空に舞い上がる。

下を見ると、朱里と雛里と水鏡さんが手を振っているのが分かる。

猿太「んじゃ、今度こそ建業だな」

千「ああ」

いづれ、また会える。

新たに出来た繋がりに、俺は満足して次の目的地を目指した。

第十九幕 水鏡女学院! (後書き)

次回で呉編です。

その内邪神の送り込んだ奴とも出会います。

第二十幕 出会いは…（前書き）

雪蓮達と出会います。

第二十幕 出会いは…

猿太「ういゝ、まだ着かないのか？」

隣で座り込んでいる猿太が文句を垂れる。

千「このまま行けばあと2日程で到着する。あまり駄々を捏ねるな」

俺達は現在森の中で野宿中だ。

千「ほら、さっさと食え」

今日の夕飯はその辺で取れた猪鍋だ。他にも食えそうな物を入れておいた。

猿太「…え、何これ？」

千「蛙」

猿太「こっちは？」

千「蛇」

猿太「…」

千「貴重なタンパク源だぞ。しっかり食つとけ」

じゃないとぶっ倒れるからな。

猿太「何でもうちよいマシン物入れておかないんだよ！こんな物食えるかー！」

猿太が大声出して立ち上がると膝が鍋に当たって鍋がひっくり返る。

千「…」

猿太「あ…」

…。

千「猿太、とりあえず土下座」

猿太「…はい！」

殺気を込めて言うのとピシッとした姿勢で土下座する。

千「とりあえず一晩その格好で放置する」

猿太「はあっ！？流石にそれは…ブボッ！」

頭を上げて抗議してきたので頭に踵落としを決める。

千「誰が頭を上げていいと言った？」

猿太「ず、ずびません…」

…頭が地面にめり込んでいるがコイツの生命力なら問題は無いだろう。

千「言っておくが分身に見張らせるから隙を付いて体勢を戻そうとしても無駄だぞ」

影分身の印を結んで分身を生み出す。

猿太「し、しどい…！」

千「恨むなら食い物を粗末にした自分を恨め。俺は寝るからな」

そのまま俺は眠りに付き、猿太は一晚中土下座の体勢だった。

猿太「…ね、眠い」

千（分身）「寝たらもう1度頭が地面にめり込むぞ」

猿太「…誰か俺に救いを…！」

ま、こんな感じだった。

□□□□□

翌朝

千「おし、行くぞ」

猿太「ね、寝不足が…」

鳳の背に乗る。そして俺は懷からある物を取り出す。

千「猿太、これを身に着けておけ」

猿太「え？これって…笠と仮面？」

そう、俺が猿太に渡したのは垂れ布の付いた被り笠と暗部用の犬の形をあしらった仮面だ。

千「少しでも姿を隠すためのものだ。それと噂はこれ以上流すな、動きにくくなる」

俺は猿太に渡した物と同じ笠と仮面を身に着けた。

猿太「ほいほい了解」

猿太も俺と同様に身に着けると、鳳の背に乗って翼を羽ばたかせて飛び上がった。

千「建業はすぐだ。そこで呉の客将になるぞ」

猿太「また客将かあ…なあやっぱり孫策とかも女の子なのかね？」

千「だろうな」

猿太「フッフ…美人かなあ？可愛いかなあ？」

千「会えば分かる」

すると、空に黒い雲が差し掛かる。

千「…雨か」

これは少し急ぐか。

千「猿太、雨が降る可能性があるから速度を上げるぞ」

猿太「おっけー。体が冷えないようにしないとな」

そして鳳は飛行する速度を上げるが、やはり雨が降ってきてしまった。

千「雨…」

猿太「やっぱり好きになれ無いか？ウキツ？」

千「そうだな」

猿太「やっぱりあの日が関係してんの？」

………。

千「猿太、それ以上言うな」

猿太「わーったよ。でも何時までも引きずってんじゃねーぞ」

千「…」

まったく…コイツは妙な所で気が利く奴だな、ホント。

そのまま暫く飛んでいると、下のほうが何やら騒がしい。どうやら戦が始まっているようだ。

猿太「なあ千。見間違いじゃなければ旗に呉って書いてあるけど？」

千「…相手は黄巾党…数が多いな。このままじゃ孤立してる勢力が飲み込まれるな…加勢するぞ。猿太は西側、俺は東」

猿太「ういっす！これ終わったら寝ていい？」

千「好きにしろよ」

そのまま、俺と猿太は分かれてそれぞれ孤立勢力の加勢に向かった。

□□□□

千「こちらの数は約2000前後か」

呉の兵を巻き込まないで救出するには大技を使わないで退路を作る必要があるか…。

千「なら…氷遁・氷柱時雨^{つちらしぐれ}！」

これは水遁と風遁の血継限界で、氷を生み出す事が出来る。

そしてこの術は俺のオリジナルだ。

先の尖った氷柱を敵に向けて連続で放つ術だ。

これを包囲されている呉の軍の回りに群がる黄巾党に向けて放つ。
首元に刺さった者は即死するが足や腕に刺さった者はまだ生きている。

俺は鳳から飛び降りて鳳を黄巾党が密集している地点まで操作し

千「喝！」

鳳は大きな爆発を起こした。

その爆発と爆風で多くの黄巾党が吹き飛んで退路が出来た。

すると俺の元に指揮官らしき女性が近寄って来た。

桃色の髪に赤いチャイナ服？を着た女だ。

女性「貴方…何者？」

千「話は後だ。ここは退け。大技で敵を一掃する」

女性「…そう、今の妖術があれば大丈夫かしら？」

千「ああ。俺を信用してくれ」

女性「いいわよ。私の勘はよく当たるの、ここは任せたわ」

俺が作った退路を呉の軍勢は急いで通り退却していく。

千「俺は足止めか…かかって来い」

黄巾党に向かい直り、俺は首切り包丁を構えた。

□□□□□

視点・孫策

私は孫策、字は伯符、真名は雪蓮よ。

私達は袁術に言われて黄巾党の討伐に向かったのだけれど黄巾党の数が袁術の情報より多くて…でも私は部隊を率いて突っ込んだら私の部隊は包囲されてしまった。

でも黒地に赤い雲模様の入った服に犬の仮面に笠を被った男が現れた。

その男は妖術を使って爆破を起こして私達の退路を開いた。その道を使って私達は1度退却し、無事本陣に戻ってこれた。

雪蓮「冥琳！」

本陣で待機していた周瑜…冥琳に声をかける。

冥琳「雪蓮！無事だったのか！今祭も戻ってきたんだ」

祭「おお、策殿！」

良かった…祭も無事だったのね。

雪蓮「ええ、ある男のお陰でね」

冥琳「男？」

雪蓮「ええ、妖術で敵を吹き飛ばしてくれたわ。大技使うから退けて…」

冥琳「信用するのか？」

雪蓮「ええ。私を助けてくれたし…大丈夫、私の勘は当たるでしょ？」

そう言うと、2人共深く頷いた。

雪蓮「所で祭、貴方はどう助かったの？」

祭「む？黒地に赤い雲模様の入った服を着て犬の仮面を付けて笠を被った男が退路を作ってくれたの。指を動かして仮面をずらして口から炎を吐き出したのじゃ」

雪蓮「私の方も同じ格好の男が来たわね…一体何者なのかしら？」

まあ、規格外の戦闘力を持っているのは確かね。この戦いが終わったら勧誘してみようかしら？

□□□□

視点・千

千「さて：ここらでいいか」

俺は起爆粘土でC2梟ふくろうを生み出して再び空に舞い上がっている。猿太も同様だ。

猿太「こっからどうすんの？早くしないと呉軍に被害がでるぜ？」

千「言っただろ。十八番で決める」

そう言う俺は起爆粘土でドングリ状に左右から翼のような物が出た造形物を生み出す。

猿太「なーる程」

それを黄巾党の中央に落下させると着地する直前に：

千「喝！」

それは、超巨大な爆発を起こして辺り一帯の黄巾党を吹き飛ばした。

今のはC3十八番人形。

大量のチャクラを練り込んで爆破させる人形。威力はC1やC2の比では無い。

今ので生き延びた黄巾党もいるが全体の8割は今ので死んだから残りは次々に逃げ出している。

千「これで終わったな。呉の陣営に行くぞ」

猿太「了解」

俺と猿太は梟の高度を落として呉の陣営に向かった。

千「さて、どいつが小霸王だ？」

俺はこれから顔を合わせる小霸王に期待し、呉の陣営に降りた。

第二十幕 出会は…（後書き）

ふいふ、やっと出会えたよ…次回、客将になります。

フラグ立てられるかなあ？

第二十一幕 闇に見えた影…！（前書き）

ふふ…やっとだ…やっと出会うぞ！

第二十一幕 闇に見えた影…！

桃髪「さっきは助けてくれて礼を言うわ。私は孫策よ」

黒髪「私は周瑜だ」

白髪「ワシは黄蓋じゃ」

…まあ、予想はしていたから何も言うまい。

千「猿太、仮面を取れ。俺は神谷千。こっちは相棒の猿飛猿太だ。2人で旅をしている」

そう言いながら俺と猿太は笠と仮面を取る。

孫策「さて、早速だけれど貴方達は何者？あれだけの爆発を起こしたり…もう1人は祭の話じゃ火を吹いたとか…」

千「妖術師の類だと思ってくれて構わない。それよりアンタに折り入って頼みがある」

孫策「あら、何かしら？」

千「俺と猿太を暫くの間でいいから客将にして欲しい」

そう言うと孫策はニヤリと妖しい笑みを浮かべた。

孫策「それは寧ろこちらからお願いしたいわね。でも何で客将なのかしら？」

千「俺達には目的がある。それを果たす為にはいつまでも同じ場所に留まっているわけにはいかないんだ」

孫策「へえ…その目的って？」

千「悪いがそれは言えないな」

孫策「まあいいわ。客将としてだけれど歓迎するわ。私の真名は雪蓮よ」

コイツは驚いたな。まさか早速真名を預けてくるとは…。

周瑜「雪蓮!？」

猿太「おいおい、いきなり良いのかい？」

雪蓮「いいのよ。助けてもらったし、その上仲間になってくれるんだからね♪」

千「…まあ、真名は預かっておこう」

雪蓮「話が分かるわね？」

黄蓋「それならワシも預けようかの？我が真名は祭じゃ」

周瑜「祭まで…!？はあ…なら私も預ける、私は冥琳だ」

こうして、何故かいきなり3人の真名を預かる事になった。

雪蓮「それじゃあ建業に戻りましょう」

その一言で、俺達と呉の兵士達は帰還の準備を始めた。

□□□□□

視点・????

呉軍と接触したか：何で各地で転々と客将をするかはよく分からないが：まあ今はいいか。

左慈「おい、どうすんだ？このままじゃ建業に行っちゃまうぞ？」

于吉「左慈の言うとおりです。何故もっと早く手を出さなかったのですか？」

???「黙ってろ。まずは小手調べだよ。折角の相手の駒を簡単に倒しちゃ面白くないだろ？」

そうさ。任務だって面白く行こうぜ？

左慈「ふざけるな！さっさと奴らを始末しないと：！」

???「いいから黙ってろよ。小手調べだけするって言ってるだろ？テメエ等は手を出すなよ？」

俺は印を結んで瞬身の術を発動し、奴らの通るルートに先回りをした。

□□□□

視点・千

帰還を開始して数時間。雪蓮の話では明日には到着するらしい。

俺は余っている馬を借りて乗せてもらった。

猿太は荷車で横になって寝ている。そんなに眠かったのか。

千「雨…止まないな」

容赦なく降る雨は次第に強さを増している。

千「嫌な天気だ…」

同時に嫌な予感もする。妙な胸騒ぎだ。

雪蓮「あら？どうしたの？」

馬に乗っている雪蓮が俺に寄って来る。

千「別に…ただ雨が嫌いなだけだ」

雪蓮「へえ…それだけ？」

千「…ああ」

そう話していると前から兵が走ってくる。

兵士「孫策様、この先に怪しい者がいるのですが…」

雪蓮「怪しい者？どんな奴なの？」

兵士「全身黒服で…静かに佇んでいるのですが禍々しい気を放っていて…」

雪蓮「…いいわ。私が直接会ってみるわ」

千「俺も行こう」

そして、俺と雪蓮、途中で合流した祭を引き連れて俺達は前に出た。

そこには、兵士の報告通り黒服の男…顔はフードで見えないが体格的に男だろう人物が立っていた。

???「やつと来たか…」

祭「お主…何者じゃ？」

???「邪に魅入られた者…とでも言っておこうか？」

邪に…見込まれた者？

???「とにかく、死にたくなかったら下がった方がいいぜ」

そう言うと、男は自分の指を少しだけ噛んで血を出すと印を結びだした。

千「その印は!？」

雪蓮「何…?」

男は印を結んだ後、血を手の平につけてその手を地面に付ける。

??? 「口寄せの術!」

ボンツと大きな煙を上げて、そこに現れたのは…

雪蓮「何これ!？」

祭「虫…なのか!？」

そこにいたのは大きな、体高3m、体長8m程のクワガタ虫だった。

千「馬鹿な…!?!まさかお前が…!」

??? 「行け!」

クワガタ「キシヤアアア!」

男が手を俺達に向けるとクワガタ虫は俺達に襲い掛かってきた。

祭「い、いかん!」

顎を広げてその鋭く尖った顎は祭を狙っていた。

祭「(やられるっ…!)」

千「チッ！」

俺は防ぐのが間に合わない判断すると祭の体を抱えて跳んだ。

祭「なっ！？／＼／＼」

千「何とかかわしたか…！」

正直間一髪だった。

千「下がってろ、手を出すなよ」

祭「あ、ああ…！／＼／＼」

そう言って祭を降ろし、俺はクワガタに向かって走り出す。

千「まずはコイツだ！」

ポーチから手裏剣とクナイを取り出して数個つつ投げるが、堅い殻に弾かれる。

どうやら、防御力はそこそこ高いようだ。

千「だがここはどうか？」

今度は、クナイを殻の隙間に投げると、浅くだが刺さった。

千「まだ終わりじゃない…！」

そのクナイは数秒後、爆発を起こし、クワガタに傷を与えた。

クワガタ「ギョワアアアア!？」

今のクナイの柄には、起爆札という時間式で爆発する札を仕込んでおいたのだ。

だがそれで逆上したのか、クワガタは俺に向かって突進してきた。

千「グッ！」

首切り包丁を抜刀し、受ける体制で構えて何とか防御する。

その衝撃で大きく吹き飛ばされる。

雪蓮「千！」

だが何とか持ち直し、首切り包丁を背に戻す。

???「今度は呉軍を狙いな」

何だと…!?!? 拙い…普通の人間じゃ口寄せ獣には勝てない…!

千「させるか！」

???「口寄せの術」

また口寄せをすると、それは通常サイズのクワガタ虫が大量にいた。

千「なっ!?!」

それは、小さな弾丸となって俺に襲い掛かろうとした。

千「土遁・土陸返し！」

印を結んで地面に両手をつけるとその地面がひっくり返り壁となった。

小さなクワガタはその壁にぶつかって消えていく。

そして全て消えたのを確認すると瞬身の術を使って雪蓮達の場所に一瞬で移動する。

瞬身の術は体の細胞を活性化させて肉体能力を上げて高速移動する術だ。だが常人から見ればそれは瞬間移動している様に見えるだろう。

そして前からは突進してくる巨大なクワガタ。

千「影分身の術」

影分身を作り、本体は影分身の腕に乗って打ち上げて空高く飛び上がった。

千（分身）「大玉螺旋丸！」

突進してくるクワガタの下に潜り込み、下から大型の螺旋丸をぶつけて空に打ち上げる。

千「喰らえ…！痛天脚！」

足にチャクラを溜めてインパクトの瞬間に開放する事で爆発的な怪力を発揮し、クワガタの頭に踵落としを決める。

クワガタ「ギョオオオオオオ！」

そのままクワガタは落下し、地面に落ちると煙になって消えた。

千「終わったか…」

俺は地面に降りて分身を消し、あの黒服の男の姿を探す。

???「おっと、動くなよ」

祭「策殿！」

しかし、そこには後ろから雪蓮の首元にクナイを押し当てる男の姿があった。

雪蓮「くっ…!」

???「流石にあの程度じゃ倒せねえか…まあ撤退の為にここは人質を…」

千「魔幻・樹縛殺！」

印を結んで幻術をかける。

???「んおっ!？」

奴は後ろから木が生えてその枝が奴を絡み取って動きを封じられて

いるように感じているだろう。

その隙に俺は跳び蹴りを放ち男を吹き飛ばす。

そしてクナイの離れた雪蓮の体を抱えて後ろに下がる。

千「雪蓮！怪我は無いか！？」

雪蓮「え、ええ…何とか…／／／」

これでよし…次はどうする？

???「クク…やるねえ…まあ、今回はここまでだ。あばよ」

瞬身の術を発動し、どこかへ消えていった。

追おうと思えば追いかけられるがここで追うとまた呉軍に被害が出るかもしれないから止めておこう。

千「…奴は…」

恐らく、神が言っていた別の神に送り込まれた奴だろう。

これは猿太と対策を練っておかないとな。

□□□□

視点・雪蓮

な、何だったのかしら今の…？

大きな虫が出てきて…千が倒したと思ったらそれに見とれて背後に回られて人質にされたけど千に助けられて…

あの時の千の顔…かなり良かったわね…／／／

少し意識しちゃうじゃない…／／／

雪蓮「ねえ千、今のって…？」

千「…よくは分らん。だが敵であることは確かだ」

雪蓮「そう…それより降ろしてくれないかしら？／／／」

千「あ…スマン」

やっと降ろしてもらったけど…何だか抱えられてた時は落ち着いてたわね…。

祭「策殿…顔が赤いですぞ？」

雪蓮「そ、そう？でも祭もさっき赤くなかった？／／／」

祭「そ、そんな事はありませんぞ？／／／」

千「2人ともどうした？早く戻ろう」

雪蓮「そ、そうね！何だか疲れたから…！／／／」

祭「言い訳になっておらんぞ策殿／＼」

雪蓮「う…ま、まだ顔が赤い祭に言われたくないわよ…／＼」

祭「う…／＼」

戦いの終わったそこには顔を赤くする呉王と將軍がいたと言う…。

第二十一幕 闇に見えた影…！（後書き）

まあ敵との出会いとフラグ立てです。

口寄せ獣は必死こいて考えてクワガタです…。

もうちょいいい発想は無かったのか俺…！

第二十二幕 袁家の馬鹿姫！（前書き）

はい、あの子です。

その内フラグ立てたいと思います。

第二十二幕 袁家の馬鹿姫！

翌日、俺達は建業に到着した。

雪蓮「それじゃあ、祭と冥琳は兵を連れて先に戻っていて」

千「どうした？どこかに行くのか？」

冥琳「袁術の所に報告に行くんだ」

成る程、そういえばまだこの頃は袁術の配下だったな。

千「なら俺が護衛として付いて行こう」

雪蓮「あら？1人で大丈夫よ？」

千「ま、一応だ。それに個人的に袁術を1度見ておきたい」

すると雪蓮は少し考える顔になり：

雪蓮「んー、見てどうにかなるって子じゃないと思うけど…まあいいんじゃない？」

千「恩に着る。猿太、お前は皆と一緒に戻っておいてくれ」

猿太「ういっす！」

こうして、俺は雪蓮と共に袁術に会いに行く事になった。

□□□□

千「…」

いや、もういい。もう突っ込まねえよ。

袁術「七乃！蜂蜜水を持ってくるのじゃ！」

張勳「はい！美羽様！」

目の前にいる金髪の少女が袁術か…で、隣にるのが張勳ね…。まあこの袁術を見て最初に思ったのは…

千「すげー馬鹿っばいな」

雪蓮「でしょ？」

ああ、私は馬鹿ですってオーラが滲み出ているな。

袁術「むっ？そっちの仮面の者は何者じゃ？」

因みに俺は一応仮面を着けている。

千「今回の戦いで呉の客将をする事になった、神谷千だ」

まあこんな馬鹿そうな子なら見せても問題ないだろうと思い、仮面を外す。

袁術「…ほう、中々いい男じゃのう。で、そちは何用じゃ？」

千「別に用って程じゃない。アンタの顔を見に…ついでに挨拶に來ただけさ。それより戦の報告はいいのか雪蓮？」

雪蓮「あ、そうね。それじゃあ報告するわ…」

□□□□

雪蓮「と言う訳で…貴女達の言っていた数よりかなり多かったの。千達が来てくれなかったらやられてたかもしれないのよ？」

袁術「まあ無事だったのだから良いではないか。それよりも妾は蜂蜜水が飲みたいのじゃ！七乃！まだか！？」

七乃「あの…それが蜂蜜水を切らしてしまっていて…」

袁術「な、何じゃと！？」

…さっきから何だ？

千「雪蓮、蜂蜜水ってのは何だ？」

雪蓮「袁術ちゃんが好きな蜂蜜を水に溶かした甘い飲み物みたいな物よ」

千「で、それが無くてごねているのか」

袁術「妾は蜂蜜水が飲みたいのじゃ…！七乃…！」

七乃「そ、そう言われましても…」

やれやれ、このまま放っておいてもいいが…

千「練遁・練成」

パンツと手を合わせて地面に着けると、その土を練成して壺と蜂蜜を溶かした水…蜂蜜水とやらを練成した。

七乃「な、何ですか!？」

袁術「これは…蜂蜜水!」

雪蓮「こんな事も出来るなんて…本当に規格外ね」

まあ、そりゃあ驚くよな。

千「別に妙な物は入っていない。今に関しては妖術の類とってくればいい。雪蓮、報告も終わったしもう行こう」

雪蓮「え?でもまだあの妖術師の事が…」

それを今言われて奴の情報が漏れると奴がどんな行動に出るか分からない。

雪蓮「っ!?!?／／／」

千「今はそれは黙っておいてくれ。頼む」

慌てて雪蓮の顔を近づけて小さく声をかける。

雪蓮「え、ええ…

了承を得ると、俺は顔を離す。

袁術「ん〜！蜂蜜水は美味しいのじゃ！」

張勳「良かったですね美羽様！」

ふう…聞かれてなかったみたいだな。

袁術「こんなに美味しい蜂蜜水を作れるなんて…お前、気に入ったぞ！妾の所の将にならんか！？」

おいおいそう来たか…。

千「悪いが、断る」

袁術「な、何故じゃ！？妾の所の方が、孫策よりも良い待遇が出来るぞ！？」

確かにそうだろう。だが、俺は呉にいない理由がある。統一計画のために。

千「俺には目的があつてな、その目的に少々呉が関係しているのさ。だから呉で客将をしてるのさ。悪いが諦めてくれ」

ちゃんとした理由を話す。これなら分かってくれる筈…

袁術「……………じゃ」

千「ん？」

袁術「嫌じゃー！絶対妾の所の将になるのじゃー！」

…恐るべし子供の我俣パワー。

千「落ち着け袁術」

袁術「う、う…」

拙い…このままでは泣き出す可能性が高い…。

千「ハア…暇な時はここに来る。それでいいか？」

これがせめてもの妥協だ。

袁術「…それなら…何とか…」

ふう、あのまま泣かれたら流石に居心地が悪い。

やれやれといった感じで屈んで頭を撫でてやる。

雪蓮「あやすの上手いわね？妹でもいるの？」

千「…まあ、な」

確かにいた。あの日まではな。

袁術「そうじゃー！千には妾の真名を覚えておくのじゃー！妾の真名は

美羽じゃ!」

さっきと一転し、今度は晴れやかな笑顔を浮かべている。

千「そうか、よろしくな美羽」

笑顔になり、アイツにしたように頭を撫でてやる。

美羽「ふぁゝ…／／／」

雪蓮「大人げないけど…羨ましいわね…」

張勳「美羽様可愛い♪」

ふう、袁家との繋がりも持っておいて損はないか…。

千「さて、じゃあな美羽。雪蓮、戻ろう」

雪蓮「そうね」

そうして俺達は美羽の元を去っていった。

去り際に美羽が、

美羽「千く! また来るのじゃく!」

と言って手を振っていたので、俺も振り替えておいた。

その帰り道、雪蓮が腕を組んできたので何故かと聞くと

雪蓮「袁術ちゃんばかり構ってたからね♪ちよつと嫉妬しちゃったのよ」

：そんなに構って欲しかったのか？案外子供っぽい所あるんだな。

□□□□□

視点・？？？

現在、隠れ拠点の椅子に座って向かいにいる于吉と将棋をしている。

ルールは俺が教えた。

左慈「おい、何時まで遊んでいるつもりだ…？」

その隣には頭に血管が浮き出る程苛立っている左慈。

？？？「だから、もうちよい待てって」

左慈「っ…！いい加減に…！」

ちよいちよい前からこうだ。何時暁に手を出すのかとイライラしている。

これは少し思い知らせてやるか…。

？？？「黙れ」

殺気を込めて言い放つと、左慈のさっきまでの怒りに満ちた顔は青

ざめ、向かいに座っている于吉は額に冷や汗が流れている。

??? 「ちゃんと舞台は用意してやるよ。大きな目的を遂行するには、その為の準備をするのも当然だ」

于吉「そ、その準備とやらは何時始めるのですか？」

??? 「もう始めてる」

于吉「は…？」

まあ、そろそろばらしても良い頃かア？

??? 「俺の仲間さ。いや、上司とでも言った方がいいかア？」

盤の上では、俺の駒が于吉の玉に王手をかけていた。

邪に魅入られし者…それは決して1人とは限らない…

第二十二幕 袁家の馬鹿姫！（後書き）

敵方の設定はほぼ決定済みですので、後はどのタイミングで出すかですね。

次回は穏と出会ってフラグ立てておこうと思います。

冥琳はどう立てるかな？

第二十三幕 知と性欲…? (前書き)

どうぞ、第二十三幕です。

第二十三幕 知と性欲…？

美羽の約束から数日…

千「これで終わり…と」

部屋にあった書類を終わらせてふう、と一息つく。

現在の呉は袁術の配下というのもあり、将が各地に分散している。

そのせいで俺達に回ってくる書類が多い。魏に居た頃よりはマシだが。

千「さて…と、早いところ冥琳に提出するか」

立ち上がり、書類を持って部屋を出て、冥琳の部屋を目指す。

雪蓮は文官の仕事が苦手によく街に行ってサボる事があるらしい。祭は酒を飲みに行ったり買いに行ったりと…まあ人それぞれだ。

そんな事を考えている間に冥琳の部屋の前に到着した。

千「冥琳、書類が出来たぞ」

扉を開けて中に入ると、そこには書類整理をしている冥琳と…緑髪で、小さい丸眼鏡をかけた女性がいた。

冥琳「ああ、千。仕事が速くて助かる」

とりあえず書類を渡すが、誰かを聞いてみる。

千「…冥琳、そっちは？」

冥琳「ああ、千にも紹介しておこう。こっちは陸遜、ウチの軍師だ」

コイツが陸遜：何だかパワーっとしてるがいいのか？

陸遜「初めまして～。私は陸遜といいます」

千「そ、そうか。俺はこの間客将になった神谷千だ。よろしくな…」

何だかペースが乱される喋り方だな…少し戸惑うな。

陸遜「えー、千さんは妖術師と聞きましたが本当ですか？」

千「まあ、似たようなものだろうな」

すっかり妖術師として認識されてるな…まあいいが。

陸遜「実はその術の事を聞きたいんです」

千「俺の術を？陸遜も術を使ったりするのか？」

陸遜「いえー、ただそういった知的な物に興味があるんです」

ん…まあ少しなら教えてもいいか？陸遜はどうやら戦闘タイプじゃないから実際に使ったりはしないだろう。

千「いいか？冥琳」

冥琳「ああ。この後はもう仕事はないからな。好きに過ごしていぞ」

休みの許可も貰った。

千「じゃあ、ここじゃあ何だから別の場所に…」

陸遜「それなら、私の部屋に来てください」

千「そうか、お邪魔しよう」

そう言っただけで俺達は陸遜の部屋に向かった。

冥琳「…千、無事に帰ってくればいいが」

その言葉は俺には聞こえなかった。

□□□□□

千「す、凄いな…」

陸遜「いえいえ、そんな事ありませんよ」

案内され、陸遜の部屋に来て最初に見えたのは本の山。

よっぽど好きなんだな、本。

陸遜「それでは、こちらにでも座ってください」

寝台を指差されたので寝台に腰掛ける。

陸遜「では教えて頂きますか？」

千「ああ、まず俺達が使うのは正確には妖術ではなくて忍術と呼ばれる物で…」

□□□□□

視点・猿太

猿太「おーい冥琳、書類できたぜ」

やっと出来た書類を届ける為に、俺は冥琳の部屋に来た。

冥琳「猿太か、助かる」

猿太「やっと終わったよ…千は？」

冥琳「千は大分前に終わって陸遜と話してるぞ」

はあ…やっぱ千はスゲーな。

俺と同じ仕事量なのに俺より大分と速く終わるとはな…まあ俺が勉強とか嫌いでこういう仕事に向いてないってのもあるけど。

それより…

猿太「陸遜ね、どんな奴なんだい？」

冥琳「ん…軍師としてはかなり優秀だが武はイマイチでな…後困った性癖の娘なんだ」

猿太「困った性癖？」

ふむ、娘という事はやっぱり女の子か。

今まで会ってきた娘達も癖の強いのが沢山いたからな、まあ別に変な事じゃないだろうな。

猿太「どんな性癖なんだ？」

冥琳「…珍しい本や…新しい知識の話を聞いたりすると…その、性的興奮が高まってしまふんだ」

……………

猿太「何…だと…？」

これはいい情報を聞いた…これで陸遜には俺がフラグを立てれる！

猿太「待っている陸遜！今俺がフラグを立ててに行くからな！」

そう叫んで俺は冥琳の部屋を飛び出した。

冥琳「…フラグって何だ…？」

そう呟いていたらしいが、今の俺には答えている暇は無い！

千がフラグを立てる前に俺が陸遜と（ピー）をして、（ピー）をして、止めに（自主規制）をする！

猿太「イヤッホウ！」

そこには脳内が桃色の猿顔の男が気持ち悪い位の笑みを浮かべていたという…。

□□□□□

視点・千

千「で、性質変化の性質には相性があったな…」

陸遜「はい…ハアハア…／＼」

ん？さっきから少し息が荒い？

千「おい陸遜、具合が悪いなら無理して聞かなくてもいいんだぞ？」

陸遜「いえ…大丈夫です…ハアハア／＼／＼」

やっぱり息が荒いし顔も少し赤い…風邪か？

陸遜「実は私…こういう珍しい話とかを聞くと興奮してしまっ…」

千「興奮…？」

陸遜「はい…性的興奮が…／／／」

…は？

俺が理解するより速く、陸遜が俺を寝台へ押し倒した。

千「おい待て」

そんな妙な性癖あるのか？

つか、これは少々本気で拙い。

陸遜「ハア…ハア…／／／」

千「おい陸遜、お前何する気だ？」

陸遜「お、抑えきれなくて…／／／」

そうして陸遜が俺の服に手をかけるが…俺は慌てて体制を入れ替えた。

つまり、今は俺が陸遜を押し倒しているような状態だ。

千「いいか陸遜、そう言うのは本当に自分が好きな奴にやって貰う事だ。今、ここで俺とすると絶対に後悔する…」

かなり真剣な顔になって、俺は陸遜を説得する。

まあ以前猿太が言っていた事をそのまま言っているだけだ。

陸遜「…はい、分かりました／＼／」

はぁ…何とか分かってくれたな。

そしていざ陸遜から退こうとすると…

猿太「この部屋かー!？」

Bannon と大きな音を立てて扉を開け、部屋に飛び込んできたのは猿太だった。

勿論、俺達に目が向く。

今外から見たら俺が陸遜を襲っているように見えるだろう。

猿太「……………」

千「……………」

陸遜「……………」

長い長い沈黙が部屋を支配する。

そして最初に動いたのは

猿太「え江えええええええええええええええええええええええー!？」

猿太だった。

千「飛んでけえええええええええー！（記憶が）」

顔面に拳を叩き込み、思いきり吹き飛ばす。

猿太「ぶばああああー！」

猿太の体は、部屋の窓から外に飛び出て、星になった。

久し振りに、本気で焦った。

千「：今のは無かった事にしてくれ」

俺は陸遜に目を合わせる。

陸遜「いいですけど、代わりに私の真名を預かって下さい」

千「ああ、それなら喜んで」

ニコリと笑い、俺は了承した。

陸遜「わ、私の真名は穩のんです／＼／改めてよろしく願いします／
／／／

千「ああ」

そうして、俺は新たな繋がりを持つ事が出来た。

因みに猿太は町の外れで鼻血を出しながら倒れていたらしい。

記憶は消えてくれていたらしい。

もし飛んでいなかったら忘れるまで殴る所だったな。

第二十三幕 知と性欲…? (後書き)

何とかフラグ立てれた。

その内冥琳も落とす予定です。

第二十四幕 皆でお出掛け（前書き）

日常編でございます。

第二十四幕 皆でお出掛け

昼過ぎ、割り当てられていた仕事を徹夜で終わらせるとようやく休憩を貰えた。

千「ふぁ…」

背伸びをして、軽く欠伸をする。

流石に徹夜はキツイ…この後は寝るかな…。

そう思い、中庭を歩いていると…

雪蓮「あら、千」

祭「どこにいくのじゃ？」

荷物を持っている雪蓮と祭に出くわした。

…いかん、厄介なのに見つかったな。

千「いや、仕事が終わったから寝ようと…」

雪蓮「仕事が終わったのなら少し出かけましょ！」

俺の言葉を最後まで聞かずに腕を組んで俺を引っ張る雪蓮。

千「おい雪蓮、流石に眠たいが」

祭「千、諦めた方がいいぞ。こうなった策殿は止められんからの」

俺は深々と溜息を吐いて仕方なく雪蓮に付いて行く事になった。

そこへ新たな人影が：

美羽「むっ！孫策！千の腕を離すのじゃ！」

長居金髪の先端をクルクルっと巻いた小さな少女、美羽だ。

祭「袁術？どうしてここに？」

美羽「：七乃が勉強させようとするから逃げてきたのじゃ」

：成る程、アホの原因はここにもあったのか。勉強嫌いね。

美羽「所で今の話は聞いておった。妾も連れて行け」

雪蓮「：別にいいけど：大した事じゃないわよ？それに護衛を1人も付けずに来ていいのかしら？」

美羽「むっ：そう言われると：」

千「ま、もしもの時は俺が守るさ」

そう言うと、美羽は顔をパアアと輝かせて俺の腰に抱きついてきた。

美羽「流石は千なのじゃ！そういう訳じゃ！孫策、妾は付いていくぞ」

今度は雪蓮がハアと溜息を吐いた。

雪蓮「千がそう言うなら無下にはできないし：好きにすれば？」

そんなこんなで、俺は雪蓮に腕を引かれていった。

だが俺の腰にはまだ美羽がくっついており、非常に歩きにくかった。

□□□□

千「で、ここは何だ？」

雪蓮「町から少し離れた丘だけれど？」

千「そうじゃなくて何故ここに來たのかって聞いてるんだが」

俺は雪蓮に引っ張られていると町外れの丘に到着した。

祭「実は冥琳が鬼のように仕事を押し付けてくるので少し気分転換をするためにじゃな…」

千「様は逃げ出したって事か」

結論を言う前に俺が言ってやると祭はうっと言葉を詰ませた。

千「ハア：冥琳にばれたらただじゃ済まないな」

雪蓮「だって私この所満足に休んでないのよ？少しは休暇も必要よ」

そう思っているなら俺を寝かせてくれ。

千「で、ここで何をするんだ？」

雪蓮「フッフ、この厨房から持ち出したお酒とつまみを食べるのよ」

千「…俺は酒に弱いんだが」

雪蓮「さー飲むわよ！」

聞けよ。

そんな感じで、俺は無理矢理雪蓮に酒を飲まされたが、やはり直ぐに視界が揺らいだ。

元々眠気があったのも加わり、そのまま深い眠りに落ちていった。

□□□□

視点・雪蓮

あらら、千は酒に弱いね。さっき言ってた気がするけど。

でも寝顔はあどけないわね。

美羽「むう、千！起きるのじゃ！」

つまらないのか、袁術ちゃんが千の体を揺するが、中々起きない。

祭「袁術、千は疲れておるのじゃ。ゆっくり寝かせてやればよい」

その姿を見て、祭が助け舟を出す。

袁術「…仕方が無いのう」

それで渋々とだが千の体を揺するのを止めた。

祭「しかし、千の寝顔はとてもあどけないの」

雪蓮「そうね…」

皆で千の寝顔を覗き見る。

千「フ…」

すると、夢でも見ているのか、少しだけ口を吊り上げる。

雪蓮「うっ!?!?／＼／＼」

祭「…／＼／＼」

袁術「っ!?!?／＼／＼」

その顔に、私達は皆そろって顔を赤くしてしまう。

千「猿太…仕事頑張れよ…雪蓮の分も…」

雪蓮「…」

祭「…」

袁術「…」

何だろう、急に猿太に悪い気がしてきた。

祭「ワシ等も寝ますかのう？」

雪蓮「そうね…」

袁術「妾も」

そう言って私達は千に寄り添うように眠った。

□□□□

視点・千

ん…いかん…寝ちまったか…？

体を起こそうとするが何故か起き上がれない。それに何だか重いし…。

目を開けて左右を見ると、右腕は雪蓮に、左腕は祭にガツチリロツクされていて動けない。

しかも重みの正体は俺の上に乗っかっている美羽だった。

千「何だ…この状況…？」

今の俺の頭には？マークが大量にあるだろう。

空は既に赤く染まっている。

とにかく、皆を起こさないようにそっと起きないと…

雪蓮「う、うーん…」

美羽「うみゆ…」

祭「む…」

失敗。起きちまった。

皆ゆっくりと目を開けて俺の方を見る。

千「よう、目が覚めたか？」

雪蓮「…／／／」

祭「…／／／」

美羽「…／／／」

至近距離での挨拶。顔が赤いのは夕日のせいだろう。

雪蓮「え…と…／／」

美羽「せ、千…／＼」

祭「あ、と…今は何時かの？／＼」

千「さあな。思ったより寝てしまったのは確かだな」

これは仕事が終わっていない雪蓮と祭はどやされるな。

千「ま、とりあえず皆離してくれ」

そう言うのと、何故か名残惜しそうな顔をしながら皆離れていった。

千「さて、速い所戻るか」

立ち上がり、3人に告げる。

雪蓮「そうね、帰りましょう／＼」

顔を赤くした3人を引き連れて、俺達は戻る事にした。

何気ない、こんな日常。

たとえばりぼての平和だろうと…

せめてこの平和が、少しでも長く続きますように…。

おまけ

冥琳「雪蓮！祭も！仕事をほったらかしてこんな時間までどこまで行っていたんだ！？」

七乃「美羽様？お勉強の時間をすっぱかしましたね？」

雪蓮「め、冥琳…そ、そんなつもりは無かったのよ？」

祭「そ、そうじゃ！本当は直ぐに帰ってくる予定で…」

美羽「な、七乃…顔が怖いぞ？それに何だか黒い…」

冥琳 七乃「問答無用！」

雪蓮 祭 美羽「ご、ごめんなさ〜い！」

どうやら雪蓮と祭の仕事は全て猿太に回っていたようだ。

美羽はご愁傷様。

千「やれやれ…」

猿太「真っ白に燃え尽きたぜ…」

俺の目の前には必死に誤る3人と鬼の形相で怒っている2人と一切の色を失ってうな垂れる猿太がいた。

第二十四幕 皆でお出掛け（後書き）

ん、コレで美羽にフラグ立てたって事にしておいて下さい！

第二十五幕 月下の戦い（前書き）

今回は戦闘描写です。

第二十五幕 月下の戦い

俺は、中庭で首切り包丁を振って鍛錬の最中だ。

雪蓮と祭は今部屋で以前の埋め合わせとして大量の書類を片付けている。

猿太は

猿太「書類イヤ書類イヤ書類イヤ書類イヤ書類イヤ…」

と壊れたように言い続けるので暫く休暇が与えられた。

俺はまだ仕事は残っているがたまには体を動かさないと。

千「297…298…！」

数を数えながら縦に首切り包丁を振り下ろす。

千「299…300！」

これでとりあえず終了だ。

息をついて顔に浮かぶ汗を拭う。

ここに来て暫く経つし…そろそろ旅立ち時か？

月、華琳、雪蓮と来たから後は劉備か。そこにはいずれ朱里と雛里も来るだろう。

だが邪神の刺客にも気をつけなければならないな。

まだ奴の得意とする術が判明していない。それにまだ仲間がいるかもしれない。十分注意する必要がある。

千「ま、今はやることをやるか」

まずは部屋に戻って仕事の残りを片付けるか。

再び、首切り包丁を背のベルトに取り付け、俺は部屋へ戻ろうとしたが…

祭「おお、千。ここにおったか」

廊下を歩いていると前から祭が歩いてきた。

千「どうした？」

祭「ここから西に離れた場所で黄巾党が現れたのじゃ。策殿がよんでおるぞ」

千「分かった、準備をしたら直ぐに行く」

そう言い残し、俺は準備をする為に1度部屋に戻り、準備が完了し、雪蓮と祭と冥琳と共に賊の討伐に向かった。

猿太も連れて来ようとしたんだが…

猿太「書類イヤ書類イヤ書類イヤ書類イヤ…」

まあ使い物にならなかったから置いてきた。

□□□□□

黄巾党が居る場所から少し離れた場所。

時刻は既に日が落ち、更には今日は雲のせいで月も見えず、辺り一帯はかなり暗くなっている。

斥候が言うには黄巾党の数は3000。こちらの兵力は2000と、やはり数的には不利だ。

千「ここまで来たがもう夜だぞ。どうする？」

雪蓮「んゝ…普通にやってもこっちには千がいるから大丈夫なんだろうけど…」

冥琳「普通にやるだけではこちらにも被害が出るからな。それでは呉の独立に支障が出る」

折角夜だし…

千「それなら、火を使った奇襲はどうだ？」

冥琳「ほう、中々良い案だ。敵の殆ども今は眠っているだろうし奴らのいる所は草原だから燃え移りやすいだろうな」

祭「しかしそれでは火に巻き込まれてこちらの兵も危ないのではな

いか？」

千「大丈夫だ。危険だと判断したら俺が水遁で消火する」

雪蓮「じゃ決まりね。何時雲が晴れて月が出て明るくなるか分からないから早いところやっちゃいませよ」

こうして作戦が決まった。

その作戦を実行するのは俺と数人の弓兵だ。

俺は火遁で、弓兵は火矢で草原に火をつける事になった。

黄巾党の駐屯地を見つけ俺は印を結んだ。

千「行くぞ…」

俺はそう言い息を吸った。

千「火遁・炎弾」

口の中にチャクラで出来た蝦蟇油を着火し、そのまま吐き出す。

それと同時に火矢も放たれる。

炎弾と火矢は草原に燃え移り、瞬く間に燃え上がった。

黄巾党1「な、何だぁ!？」

黄巾党2「ひ、火だ!」

敵は混乱を始めた。

黄巾党にも指揮官はいるだろうがこれでは指示など届かないだろう。

千「さ、行くぞ！」

俺は立ち上がりそのまま黄巾党達に突っ込む。

今を見て雪蓮率いる本体もすぐに到着する。

敵を蹴散らして俺が火を消せば終わる。

腰の草薙の剣を右手で逆手に持ち、左手はポーチから取り出した手裏剣を持つ。

まずは手裏剣を、黄巾党達の首元に向けて投げる。

手裏剣は、大きさに急所に当たらなければ1撃で相手を殺すことは出来ない。だから首を狙うのだ。

そして手裏剣が刺さった黄巾党達は絶命し、倒れていく。

そのまま突撃し、草薙の剣で手近な奴から切り裂いていく。

突然の火と、俺の奇襲に黄巾党はただただ混乱する。

黄巾党3「奇襲だ！」

黄巾党4「ま、拙い！火が迫ってくるぞ！」

黄巾党5「お、おい！向こうから何か来るぞ！？」

本隊か。これで詰みだな。

そう思いながら、俺は燃える草原に囲まれながら黄巾党を斬り伏せていった。

□□□□

あらかた黄巾党は片付けた。

取りこぼしもあるかもしれないが、いたとしても僅かだろう。

俺は遠目だが、本隊が離れるのを見届けた。

千「もういいか」

そう判断し、俺は印を結び、大量のチャクラを水に変換する。

千「水遁・大爆流！」

その多量の水を広範囲に広がらせ、渦を描くように回転させた。

水が止まる頃には、火は跡形も無く消火されていた。

地面には、黒く焦げた草が、俺の水遁のせいで濡れているだけだった。

まあ黄巾党の死体らしきものもあるが。

ふと空を見上げると、既に雲は晴れ、淡い光を放つ月が見えた。

千「…戻るか」

そう決め、踵を返すとそこには1人の男…いや少年がいた。

白い装束に、顔はフードで隠してあって見えない。

だが少し小さい身長が少年のように見せた。

千「何者だ？」

少年「…お前の」

少し間を置いて、少年は答えた。

少年「敵だ！」

それと同時に、俺に蹴りかかってきた。

かなり鋭い蹴りで、身を傾けて回避しようとする。

だが顔にかすめ、頬から僅かに血が出る。

千「チッ」

舌打ちをし、右手で逆手のまま持っていた草薙の剣で斬りつけようとする。

だが少年は着地と同時に腕で俺の腕を受け止める。

その状態から少年は俺の顔面に向けた上段蹴りを放ってきたが、腕を振りほどき後ろに下がることで回避した。

コイツ、強いな。

素直にそう思った。下手をすると恋とも打ち合えるかもしれない。

少年「どうした…その程度か？」

小馬鹿にするようにフンと鼻を鳴らす。

千「いや、甘く見ていた。だから…」

俺はそう言いながら印を結ぶ。

千鳥。俺の左手に雷光が宿る。

千「遊びは終わりだ」

形態変化。千鳥が槍の形に変化する。

その槍は、正確に少年の腹部を貫いた。

少年「がはっ…!?!」

千「千鳥鋭槍」

そのまま横に振りぬいて胴体を真っ二つにしてやろうと思ったが、少年は素早く身を引かせて千鳥鋭槍は少年の体から抜けた。

少年「ぐう…！て、テメエも妙な術使いやがって…！」

千「…さあどうする？致命傷とは言わないが重傷であるには変わらないぞ」

少年「うつ…！」

傷口を押さえているが、どんどん血が流れ出る。放っておけば出血多量で死ぬだろう。

すると、闇の中から新たな人影が現れた。

眼鏡をかけた青年だ。

青年「左慈！」

その青年は、慌てて少年に駆け寄る。

左慈、か。聞いたことはある気がするが俺は三国志に詳しい訳ではないので思い出せなかった。

左慈「于吉…！」

于吉と呼ばれた青年は、左慈に肩を貸すと俺に向かい合った。

于吉「申し訳ありますがここは引かせてもらいますよ」

千「逃がすとても？」

かなりのやり手の上にこうも好戦的な奴を取り逃がすと厄介だ。

それに左慈って奴は俺も妙な術を使うと言った。恐らく、邪神の刺客について何か知っているのだろう。

すると俺と左慈、于吉の間に何か落ちる。

俺はそれに見覚えがあった。

千「煙玉!？」

そう言った瞬間、ボンツと音を立てて煙が噴出す。

視界が塞がれて何も見えない。

印を結び、術を発動する。

千「風遁・烈風掌！」

風を起こし、煙を吹き飛ばし、視界を取り戻す。

だがその時には、2人はおらず、残っているものは何も無かった。

千「逃がしたか……」

今投げ込まれた煙玉は、明らかに第三者が投げ込んだ物。

つまり、今追っても罠があるかもしれない。

仕方がないが、諦めることにするか。

猿太もおらず、バックアップもない状態で追って、罨にかかったら笑えない。

それに戻るのがこれ以上遅れると雪蓮達に怒られるしな。

そう思い、俺はその場を後にした。

第二十五幕 月下の戦い（後書き）

次回、呉編最終話です。

残念ですが冥琳にはフラグを立てない事になりました（立て方が分からん）。

冥琳好きの方はすいません。

第二十六幕 情報整理、そして…（前書き）

かなり短いです。すいません。

第二十六幕 情報整理、そして：

賊討伐からまた暫く、俺と猿太はまた旅立つ予定を立てていた。

そして、現在は俺の部屋で会議のような事をしている。

猿太「まあ、今の所目だった情報はないな。このまま劉備を探すのか？ウキッ」

千「ああ、ゼツから連絡があるといいんだが…」

すると、急にチャクラを探知する。ここに近づいている。

白ゼツ「ハロ〜！」

猿太「どわっ！？」

俺達が座っている近くの地面が開き、そこからゼツが現れる。

猿太は驚いて仰向けにひっくり返ってしまった。

黒ゼツ「久ブリダナ…」

千「そうだな。早速だが何か目ぼしい情報はないか？」

白ゼツ「いくつか面白そうな情報があるよ」

千「教えてくれ」

白ゼツ「まずは最近各地で黒いローブを纏った者達がコソコソ動いてるみたいだよ。かなり強力なチャクラだったしね」

黒ゼツ「ソイツ等ノ組織名ハ確カ『夜』^{よる}…ダツタ筈ダ」

恐らく邪神側の奴らだろう。各地で何をするつもりかは分からないが、いい事ではないだろう。

白ゼツ「次はどっかの占い師が天の御使いって奴が来るって噂を流し始めたらしいよ」

猿太「天の御使い？」

白ゼツ「何でも『流星と共に降り立った天の遣いが動乱の世を太平へと導く…』らしいよ」

それは聞いたことが無い…ただの戯言かもしれないが注意しておくか。

もしかすると俺達や邪神側…夜とはまた別のイレギュラーかもしれない。

黒ゼツ「集メタ情報ハ以上ダ」

猿太「…千、どうする？」

邪神側の状態も気になるが劉備達との繋がりも作らなければなら無い…だがその天の御使いってのも無視する訳にはいかない…。

千「全員別行動をしよう」

猿太「全員か？」

千「ああ。ゼツは今まで通り情報収集、猿太は夜を監視してくれ。俺は劉備を探す。それから天の御使いつてのも俺が探しておく」

猿太「移動方法は？千とゼツはいいけど俺はどうすんの？」

千「…歩け」

猿太「嘘っ！？それ酷くない！？」

千「冗談だ。空を飛べる口寄せ獣と契約しておけ。巻物だ」

俺は猿太にポーチに入っていた巻物を渡す。

猿太「おっけ、後でやっつく」

千「よし、新しい目的も決まった。ゼツはもう行っていぞ」

黒ゼツ「了解」

白ゼツ「またね」

そう言って、ゼツはまた地面の中に消えた。

因みにゼツが開けた穴は綺麗に塞がっていて元通りだ。

千「さて、それじゃあ雪蓮の所に行くか」

そして、俺と猿太とゼツの新たな目標が決まった。

□□□□□

翌日

千「出発するか」

俺は起爆粘土で作り出した鳳で、猿太は口寄せした大きな鷹に乗り、それぞれ別方向へ向かう事になった。

雪蓮「ねえ、やっぱりもうちょっとここにいない？」

千「それは昨日さんざん無理だって言っただろ？」

祭「お主達がいなくなるとまた仕事の量が多くなって…」

冥琳「2人共…」

ギリギリまで粘る雪蓮と祭。それを呆れた顔で見る冥琳。

穏「今度もお話を聞かせて下さいね？」

千「ああ…興奮しない程度にな…」

あの時は本当に焦ったからな。

美羽「うう…」

…美羽に至っちゃまだ泣いている。昨日旅立つ事を報告してからずっとだ。

七乃「泣いてる美羽様も可愛い…！」

…やれやれ。

千「美羽、泣くなよ。必ずまた会えるから…それまで我慢してくれ」

美羽「うっ…わ、分かったのじゃ…！」

何とか分かってくれたようだ。

千「猿太、任務さぼるなよ？」

猿太「おう！千こそ、しっかりやれよ！」

お互い、グーにした拳をコツンと打つと、俺達は鳳と、鷹の背に乗った。

千「じゃあな。暫くの別れだ」

雪蓮「ええ、また来てね」

祭「歓迎するからの」

冥琳「達者でな」

穩「さようなら」

美羽「うう…絶対にもた来るのじゃぞ…」

七乃「お元気で」

千「ああ、じゃあな！」

猿太「ばいばーい！」

俺は鳳を空に羽ばたかせた。猿太も、鷹を飛ばし、俺とは別の方へと飛んだ。

千「さて、まずは幽州か…」

新たな旅を初め、俺は仮面と笠を付け、鳳と共に空を駆けた。

第二十六幕 情報整理、そして…（後書き）

何とか呉編も終了。

原作開始へ向かいます。

第二十七幕 集いし者達（前書き）

今回は夜の組織内部の会話です。

この話で数名名前や容姿が判明します。

第二十七幕 集いし者達

視点・????

薄暗い部屋。

ここは夜のアジトの1つだ。

今俺は円い机：円卓の椅子の1つに座っている。

椅子の数は全部で10。

既に5つの椅子は埋まっている。

??? 「なあ、リーダーさんはまだ来ねえのか？」

流石に1時間以上待っているとイライラもする。隣に座っている長い茶髪の男に声をかける。

茶髪「まあ、今回集まるのはリーダーを含めて6人なので後は彼だけですね。そろそろ来るのでは？」

??? 「だからってこりゃあ遅刻し過ぎだぜ。そう思うだろ大然？」

俺の隣に座っている男の名は矢沢大然^{やざわたいぜん}。俺の仲間だ。

すると俺の向かいに座っている長い黒髪をポニーテールにしている女が口を開いた。

女「だからと言ってそう苛立つな、底が知れるぞ懺」

…今呼ばれたのが俺の名前だ。

葉山懺。
はやまざん

懺「うるせえ…余計な事言うと首が飛ぶぜ、空」

今の女の名前は御剣空。
みつるぎそら

この組織、夜の紅一点だ。

空「やってみるか…？お前の自慢の赤髪を全て削ぎ落としてやるぞ？」

俺の格好は何時もの黒服だがフードを取っているから顔が見える。

赤いツンツンの短髪に鋭い目つきとよく言われる。

しかし、そこに離れた場所にいた大男が口を開く。

大男「止める。それ以上やるなら俺がお前達を殺すぞ」

空「っ！」

懺「うっ…わ、分かってるっての！本気にすんなよ虎のオヤジ！」

今の大男は綺堂虎治。
きどうこ

白いオールバックの髪に白い髭の中年のおっさんだ。

この夜の中でもかなりの実力の持ち主で、俺達には逆らう事が出来ない。

大然「まあまあそこまでにしましょう。アナタもそう思いませんか？」

そう言って大然が同意を求めたのは顔を赤い包帯でグルグル巻きにして全く顔が見えない。

右目の部分が空いているだけで、喋る事もないので名前も分からない。

いけ好かない奴だ。

そう思った所で、扉が開く。そこには夜のリーダー、名前は知らん。

顔も隠してやがる。

全く…どいつもこいつも…。

懺「オイオイ、リーダーさんよオ！1時間も遅れておいて何も言う事無いのかよ？」

リーダー「俺はお前達と違って暇じゃないんだ」

懺「チッ！」

コイツもかなりの実力者で、虎のオヤジよりも強い…。

虎治「それよりも早く会議を始めよう。集まった意味がない」

リーダー「それもそうか…」

そう言うと、リーダーは空いている椅子に座った。

リーダー「さて、現在暁は分かれて行動している。白黒の口寄せ獣は情報探索、猿顔は我々を追っている。奴らの頭の千は幽州に向かった」

大然「幽州ですか？そんな辺境の地へ何故…？」

それは俺も同じ気持ちだった。大体何で奴らはあちこちに移動して客将をするんだ？

リーダー「恐らく、奴らは劉備を探している筈だ。董卓、曹操、孫策と三国志の主だった勢力を回っている」

懺「何でそんな事するんだあ？」

リーダー「暁の具体的な目的はまだ分からんが実際の歴史とは別の歴史を作るつもりだな」

実際とは違う歴史ねえ…面倒くせえ…神の奴に頼まれた事の障害になっちまうかもな。

空「どうするんだ？」

リーダー「そろそろ動き出してもいい頃だ。暁の通り道に種を蒔け」

やれやれ…。

懺「なら千って奴の所には誰が行くんだ？」

リーダー「好きにしろ。行きたい奴だけ行け。ただし消されないように注意するんだな」

それだけ言うと、また黙り込んでしまった。

懺「…で、誰が行く？」

回りを見渡しながらか聞くが、皆様子を伺っている。

だが、その沈黙は俺の隣に座っている男によって破られた。

大然「誰も行かないのなら私が行きましょう。懺、貴方が纏めている白装束を借りてもいいですか？」

懺「構わねえが役にたたねえぞ？この前だって勝手に行動しやがって負けやがったんだからな」

俺が煙玉投げなかったら死んでたぜ。

大然「ええ、雑兵も多い方がいいでしょう？」

そう言うと、大然は席を立った。

大然「ではお先に失礼します。私が彼を殺しても恨みっこなしですよ」

そして、大然は部屋を出て行った。

虎治「では俺も行こう。まだ任務をやり遂げていないのでね」

空「私もだ」

懺「じゃ、俺は大然の代わりをやるかね」

次々に席を立ち上がり出口に向かう。

懺「オイ、テメエは来ないのか？」

赤包帯の男に声をかけるが右目をギョロリと動かしてこっちを見たが、すぐに別の方向を向いてしまった。

懺「チッ…」

面白くねえな。だがいずれ思い知らせてやるさ…。

□□□□□

リーダー「やれやれ…あんな曲者揃いを纏めるのは大変だな。お前もそう思わないか？」

部屋に残されたリーダーは、向かいにいる赤包帯に声をかける。

赤包帯「そうだな…」

それに応える赤包帯。

リーダー「所で、それは取らないのか？」

赤包帯「ああ、外すのはまだ先だ」

リーダー「やれやれ…主も厄介な仕事を頼んでくれる」

そう言いながらリーダーはフードを取ると、そこには青いさらさらとした直毛に左目に大きな縦傷のある顔だった。

赤包帯「止めたいならやめればいい」

リーダー「冗談言うな。主の命令に従わなかったら殺されてしまうだろう？まあ、実際の所消える訳だが…」

赤包帯「ならその命令に従えばいい。俺もその為の存在だ」

皮肉めいた声に、リーダーの眉がピクリと動く。

リーダー「ああ…所で、大然は千に勝てると思うか？」

赤包帯「…勝率はかなり低いが…知略家の大然なら真っ向からは挑む事は無いだろう。その知略次第だな」

リーダー「そうか…まあいい。まだ補充も利くしな」

椅子を引いて赤包帯も立ち上がる。

赤包帯「俺はもう行く…」

リーダー「分かった。俺は他の奴らの所に行ってみる」

それに伴い、リーダーも立ち上がる。

リーダー「お前もしっかりやってくれ。尾獣の封印解除をな…」

赤包帯「了解した」

集いし者達、夜の闇を届けにそれぞれ動き出す。

それを暁の光は止める事が出来るのか…

第二十七幕 集いし者達（後書き）

いかがでしたか？

最後の言葉通り近いうちに尾獣出します。

次回から原作の流れに入りますが殆どオリジナルストーリーですのであしからず。

第二十八幕 天の御使い（前書き）

アンケートを終了させて頂きます。

長い間ありがとうございました。

結果は一刀アンチ。

力量は原作通りとします。

第二十八幕 天の御使い

幽州に入り、既に5日が過ぎたが劉備は見つからない。

何せこの世界では女になっているので容姿がはっきりしない。

そんなこんなで、俺は幽州をウロウロする羽目になっている。

今はとある村の飯屋で食事を取っている。

千「…特徴は女の3人組って事しかないからな、簡単には見つからないか」

そんなにあっさりと見つけれないわけではないと思っはいた。

千「だがどんな女なのか…仁や義を大切にするのならどこかで義勇軍でも募っているか…？」

可能性のある選択肢から情報を絞り込みそこを総当りする作戦だが今現在は義勇軍などの活躍は聞いていない。

とりあえず、食事を終えてずらしていた仮面を付け直す。

千「劉備や関羽や張飛が確実に来る場所…桃園か…？」

桃園…確かここからそう遠くないな、そこへ向かうか。

村の外に待機させていた鳳の背に乗って、空に飛び上がる。

千「ここからもう少し西か…」

そう判断し、俺は鳳の速度を上げる。

が、空の果てに何か見える。

空から降る、一筋の白い流星。

千「こんな昼間に…流星だと？」

あのままだと…この先で落ちるな…そう言えばゼツの情報にあった
天の御使いは流星と共に降り立つって言っていたな…。

千「追うか…！」

俺は鳳の飛行速度を最大にし、流星を追いかけた。

□□□□□

視点・一刀

う…ん…

あれ？俺…どうしたんだっけ…？

そうだ！白い服を着た少年の持っていた鏡が割れて飲み込まれて…
どうなったんだ？

今まで気絶していたようなので、目を開けてみる。

一刀「う…ここは…」

目を開けて回りを見渡すと、そこは…森。

……………森!?

一刀「な、何だここ!？」

一体どうしたんだ!？」

……………ああ、夢か。もう一眠りすれば元に戻るさ。

一刀「さあて、早く目を覚ますか」

そう言ってもう1度横になろうとするが…

男1「おうおう兄ちゃん! 珍しい服着てるじゃねえか!」

一刀「うわっ!？」

草陰から3人の男の人が出てきた。

でもなんか古臭い服に腰には…剣!？」

え…? ここは映画の撮影か何か?

男1「その珍しい服、こっちに寄越せよ! ついでに金目の物もな!」

一刀「え、えと…これは映画の撮影かなにかですか?」

男2「意味分らない事言っていないでさっさとアニキの言うとおりにしろ！」

男3「そ、そうなんだな！」

どうやらリーダー格の男の人はアニキと言うらしい。

アニキ「チビ、デク、下がってな！殺して身包み剥けば一緒だろ」

一刀「ってこの剣本物！？」

鞘から抜いた剣がキラリと輝き、振り上げられると、偽者でない事が分かる。

ど、どうなってんの！？何で本物なんか持っているんだ！？

ただ、初めて迫る本物の死に、俺は恐怖した。

一刀「うわあああっ！？」

だが、俺の視界を何かが塞いだ。

それは、白く大きな、とても大きな鳥。

それが俺と男達の間に入り込み、体当たりで3人を吹き飛ばした。

そのまま白い鳥は空に飛び上がってしまったが、上から何かが…いや誰かが落ちてくる！？

その人は見事地面に着地し、こちらを見た。

黒をベースに、赤い雲模様の入った服に、顔には犬の形をした仮面。頭には笠を被っていて、何よりも目を引くのがその背中にある巨大な剣だ。

ってかこの人も普通の格好してない…一体何がどうなっているんだ！？

□□□□

視点・千

やっと流星が落ちたと思われる森の上空に到着した。

だが落下した時の音もなかったので、正確な位置を特定するのは難しいな。

こうなったらチャクラを感知して回りを探索するか。

そらを移動しながらチャクラを感知する。

千「…誰かいる」

チャクラを感知。少し離れた場所からチャクラを感じる。数は4つ。

そこから更に離れた場所に3つのチャクラも感じるがとりあえず近い位置にある4つのチャクラの場所へ向かった。

少し先に開けた場所があり、そこから4つのチャクラを感じる。

そしてそこには…

千「あれは…学生服か!？」

白い、少し豪勢な学生服を着た青年が、黄巾党の3人組に襲われて
いるのが見える。

千「チッ…またイレギュラーか? まあともかく助けるか!」

鳳の高度を下げて、高速飛行で黄巾党に体当たりをし、吹き飛ばす。
鳳を上空に飛ばし、俺は飛び降り、その学生と黄巾党達の間に着地
した。

千「大丈夫か？」

とりあえず学生の無事を確認する。

学生は暫くポケットとしていたが、ハッとしたように首を縦に何度も
振った。

千「そうか…」

そう言って振り返り、黄巾党達を見る。

…ん? どこかで見たような気がする。

チビ「おい! いきなり何すんだ!」

デク「謝るんだな！」

アニキ「よくもやりやがったな…！」

起き上がってそれぞれ口にする…あ、思い出した。

確か洛陽の飯屋で暴れようとしたから少し脅してやった奴等だ。黄巾党に入っていたのか。

千「久振りだな」

アニキ「へ？」

仮面と笠を外すと暫く3人は俺をじっと俺を見ていたが思い出したのか顔が青ざめていく。

アニキ「あ、アンタは…！」

千「思い出したか？それなら話は早い。今すぐ退け。でないと首切り包丁の錆にするぞ」

脅す為にできるだけ低い声を出しながら首切り包丁の柄に手を回す。

アニキ「ひ、ひいいいいいー！」

チビ「ま、待ってくれアニキー！」

デク「ま、待つんだなー！」

3人は風のように走り去り、すぐに見えなくなってしまった。

学生「あ、ありがとう。助かったよ…」

後ろから学生に声をかけられる。

だが俺には確かめる事がある。腰の草薙の剣を順手に持ち、学生に向ける。

千「お前、何者だ？」

学生「ちょ…一体何なんだよ!？」

千「お前、学生だな?なぜこの世界にいる？」

学生「わ、分からないんだ!なんか…不審者ともめてたら鏡が割れて光に飲まれて…気がついたらここにいたんだ!」

…チャクラの流れから嘘は付いていないな。

千「そうか、悪かった。俺は神谷千。お前は？」

俺は草薙の剣を降ろす。

学生「え、ああ…一刀。北郷一刀」

…これが、暁の神谷千と天の御使い、北郷一刀の出会いだった。

第二十八幕 天の御使い（後書き）

えー、一刀君アンチと書きましたが実際の所空気の扱いにしたい
と思います。

第二十九幕 大徳の王…！（前書き）

はい、3姉妹との出会いです。

第二十九幕 大徳の王…!

俺は噂の天の御使いであろう人物、北郷一刀を助けた。

とりあえず、仮面と笠を付け直す。

一刀「な、なあ千さん…ここは一体何処なんだ？」

千「呼び捨てでいい…ここは…まあ三国志の時代だ」

一刀「…は？」

まあそんな反応だろうな。いきなりそんな事を言われても信じられるわけがない。

一刀「え？ほ、本当は？」

千「本当の事だ。ここは三国志の世界で、お前は何かしらの方法でここに來たんだ」

まあ実際は違う世界だが。

一刀「え…た、タイムスリップって事？」

千「少し語弊がある。ここは三国の主だった将が女になっている別世界だ」

……………

暫くの沈黙。恐らく頭が回っていない。

一刀「…え？ いやでも…だって…え？」

千「とにかく付いて来い。近くの村まで案内するからそこで話し合おう」

俺は草薙の剣を鞘に収めて鳳を呼び寄せると、その背中に乗る。

千「乗れ」

一刀「そ、それは一体何なんだ？ ていうかまだ考えが纏まっていなくて…」

…面倒だな。

俺は一度鳳から降りると北郷の傍まで歩いて服の襟を掴むと。

一刀「え？ な、何？」

それを投げ飛ばす。

一刀「どわあゝ！？」

そして北郷は鳳の近くに無様に落ちた。

カッコわる…。

加減はした筈だが打ち所が少し悪かったのか少し咳き込んで立ち上がった。

一刀「な、何を…!？」

千「早く乗れ。話は村で聞く…」

そこまで言った所で、近くの草陰から何かが飛び出した。

それは、長居黒髪をサイドテールにした女と、赤髪のショートカットの少女だった。

千「何だ？」

その手にあるのは…青龍偃月刀…関羽か!もう1人の少女は…まさか張飛か?

関羽「貴様!そこの方から離れろ！」

張飛「さもないと鈴々達が成敗してやるのだ！」

…思い切り勘違いされている。

まあこの状況を見れば誰でもそう思うだろう。

仮面と笠を付けた怪しい男と投げ飛ばされて咳き込んでいる男…俺怪しすぎるな。

千「待て、俺は…」

関羽「問答無用！」

随分と聞き分けが無いんだな。青龍偃月刀を振りかぶってこちらに迫る。

とりあえずもう1度草薙の剣を抜刀して青龍偃月刀を受け止める。

関羽「止めただとっ…!？」

千「はっ！」

動揺した所に力を加えて押し返す。

関羽「ぐっ！」

張飛「愛紗！」

小さな体に大きな蛇矛を担いで俺に突進してくる。

だがその一撃も草薙の剣で受け止める。

千「かなり重いな…！」

恋や春蘭にも引けを取らない…こんな小さい体の何処にこんな力があるんだ…？

無理に受け止めず、力を逸らして受け流すと、反対側から関羽が再び斬りかかってくる。

だがそれを受け流し、今度は関羽と張飛が同時に斬りかかってくるが素早く草薙の剣で強く弾くと青龍偃月刀と蛇矛は空高く弾き上がり地面に突き刺さった。

関羽「馬鹿な…!？」

張飛「負けた…のだ…？」

千「ふう…話を聞け。俺は賊の類じゃない」

関羽「嘘を言うな…!あの状況で…!」

一刀「あ、あの…その人の言っている事…本当の事で…さっき助けてもらったんだ…」

被害者…である一刀が何とか事情を説明すると関羽と張飛の顔が青ざめていく。

関羽「も、申し訳ありません!」

張飛「ご、ごめんなさいなのだ!」

もの凄い勢いで頭を下げるが、正直気にしていない。

千「気にするな。所で…お前達の名前を聞いていいか？」

関羽「は、はい!私は…」

???「愛紗ちゃん!鈴々ちゃん!」

…そこへもう1人、長い桃髪をした女が現れる。

…劉備なのか?あののほほんとしたのが?

桃髪「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん大丈夫？」

関羽「はい、桃香様。怪我らしい怪我ありません」

千「…話の途中ですまんが、質問に答えてくれ」

関羽「あ、はい。私は関羽雲長です！」

やはり関羽か。

張飛「鈴々は張飛翼徳なのだ！」

こっちは張飛か…。

桃髪「あれ？自己紹介？なら私も！私は劉備元徳です！」

で、これが劉備か…。

千「そうか…俺は神谷千だ」

仮面と笠を外しこちらも自己紹介をする。

一刀「…」

横で唾然としている一刀がいるが、まあ放っておけば直るだろう。

関羽「あの…貴方の武を見込んで是非お願いします！」

千「積もる話もあるだろうが、腰を落ち着けて話そう」

そう言うのと、俺は起爆粘土を手の平に食わせてC2梟を作り出す。

張飛「にゃにゃにゃ!? 妖術なのだ!?!」

関羽「ど、どうなっているんだ!?!」

劉備「はわ〜! 凄ーい!」

一刀「ポカーン」

流石に驚いているな。

千「コイツに乗れ。俺はあっちに乗る」

俺は鳳に乗り、劉備達に梟に乗るように言うと、少し警戒しながらも乗ってくれた。

千「じゃあ行くぞ」

そうして、鳳と梟は飛び上がった。

一刀「:ってま、待ってくれー!」

あ、忘れてた。

面倒だったがちゃんと回収しておいた。

第二十九幕 大徳の王…！（後書き）

フラグは立てますとも。おいおい立てますので少しお待ちを。

第三十幕 牽制…（前書き）

戦闘描写があると長くなるようです。

第三十幕 牽制…

俺と劉備達、そして北郷は空を飛んで近くの村まで辿り着いた。

途中、劉備と張飛は

劉備「うわー！本当に飛んでるー！」

張飛「凄いのだー！気持ちいいのだー！」

と言って大はしゃぎ。

それを落ちないように関羽が落ち着かせていた。

北郷は…まあ驚いていた程度だった。

で、俺達はまた飯屋で食事を取っている。

俺は食べていないが。

とりあえず北郷も落ち着いたようだ。

それより張飛の食事が半端ない。恋と同じくらいか…？

千「で、話の続きだが…」

関羽「は、はい…貴方の武を見込んでお願いがあるのです」

千「それはさっき聞いた」

俺は出された水を喉に通す。

関羽「そうでしたね。実は私達は…」

話を纏めると、劉備、関羽、張飛の3人は、黄巾党や賊に虐げられている人々の為に立ち上がり、誰も苦しむ人がいなくなる、皆幸せな世の中を作りたいそうだ。

その為に天の御使いを探していたそうだ。

で、さっきの白い流星を見つけて森に入った所に俺と北郷と俺を見つけたらしい。

とどのつまり、俺と、天の御使いである北郷の力を借りたいらしい。

千「…劉備、お前の夢は誰もが幸せに過ごせる世の中だったな…？」

劉備「はい…」

千「その誰もがの中に、その世の中を作るために犠牲になった人々は含まれるのか？」

俺がそう言うと、僅かに劉備は体を震わせた。

劉備「…」

千「戦った敵の兵、その敵にやられた自軍の兵…その犠牲になった

人々は…果たして幸せなのか？」

劉備「…確かに…私の理想の為に死んでしまった人は…幸せではないかもしれませんが…でも！何もせずにはいられないんです！だから…その人達の犠牲を無駄にしない位幸せな世の中を作ってみせます！」

…。

千「いい答えだ」

口の端を吊り上げて笑う。

戦いを行う限り、犠牲は出る。その犠牲をいかに無駄にしない事が重要だ。

俺達、暁も戦いを行ってきた。それにより、何人も何人も殺した。

その犠牲を無駄にせず、俺達は統一計画を成し遂げる。絶対にだ。

千「俺には目的がある…ずっと力を貸す事は出来ないが…暫くの間なら構わない」

俺が出した答えは了承。繋がりも作らなければならないしな。

劉備「あ、ありがとう！」

関羽「ありがとうございます！」

張飛「やったのだ！」

3人でそれぞれ別の反応だ。

…そういえば。

千「お前は どうするんだ？ 北郷？」

さっきから完全に喋るタイミングを逃していた北郷に問う。

一刀「え？ お、俺は…俺でよければ…力を貸してあげたらいいな
ゝって感じかな…？」

…何だ？ このヘタレは。

千「まあいい。これからよろしくな。劉備、関羽、張飛」

劉備「あ、折角だから私の事は真名で呼んでください」

千「いいのか？」

劉備「はい！ 私の真名は桃香です」

関羽「では私の事も愛紗と呼んでください」

張飛「鈴々は鈴々なのだ！」

千「ああ、俺の事は千と呼んでくれ」

そうして真名を預けられるが話しに付いてこれていないのが1人。

一刀「え？真名って何？桃香とか愛紗とかって…？」

愛紗「真名をご存知ないのですか？」

一刀「あ、ああ…初めて聞いたけど…」

千「真名と言うのは親しい者のみにだけ教える本当の名だ」

一刀「え…そんなのあるの？」

千「ああ。じゃあ具体的な目的は決まっているか？」

………

シーンと聞こえそうなほど場が静まり返る。

千「何も考えてないって事でいいのか？」

若干呆れる。あれだけの目標がありながら目の前の目的を考えていないとは思わなかった。

千「こういう場合はどこかに仕官して名を上げるのが定石だな」

愛紗「成る程…しかし何処へ仕官するのですか？」

そうだな…この時期となると…。

一刀「確か黄巾党の頃だと…」

千「公孫賛だな」

一刀「ちょ…俺の台詞…」

桃香「あー、白蓮ちゃんかあ！懐かしいな」

一刀「俺の話…」

千「知り合いなのか？」

一刀「だから…」

桃香「うん。同じ私塾で勉強してたんだ」

ほう、実際の歴史は知らんが友人なら話も通りやすいな。

所で北郷が隅で暗い雰囲気を放っているんだが何かあったのか？

千「まあ、今日はそろそろ日が落ちる頃だし宿にでも泊まるか。皆持ち合わせは幾らある？」

と言うと、愛紗が財布の中身を確認する…だが少し顔色が悪くなる。

鈴々「にゃ？どうしたのだ愛紗？」

愛紗「足りない…」

千「足りないって…宿代がか？それなら俺も出すが？」

愛紗「そうではなく…食事代すら足りません…」

…これは鈴々の食欲もあるが元々金がなかったみたいだな。

まさか食事代も足りないとは…。

千「まあ足りない分は俺が出すよ…宿代もな…」

少しうな垂れて答えた。

少し前に錬遁で金は練成したからまだ余裕はあったし足りないならもう1度やればいい。

そう思い、俺達は飯屋を後にした。

□□□□□

夜の宿…部屋は1つ。

やはり金が足りなかったから俺が錬遁で練成しようとしたが愛紗が俺に金を出させるは悪いと言ったので1部屋になった。

まあ俺は何をする訳でも無いけどな。

もしここに猿太がいたら泣いて喜んでいたに違いない。

俺は今、草薙の剣の手入れをしている。

他にも首切り包丁や手裏剣、クナイや他の忍具も整理、手入れしている。

一刀「凄い数の武器だな…」

まあ手裏剣だけでも様々な種類があるしクナイも鎖や紐で繋がっているものもあるからかなりの数だ。

千「そういえば北郷、お前何か武術の心得はあるのか？」

少し何か習っていたような身の振りをしているがあまり期待は出来ない。

一刀「ああ、剣道部をやってたよ」

千「そうか」

問答はそれだけ。直ぐに忍具の手入れに戻る。

すると、急に外に気配を感じる…まさか…。

千「…すまんが少し外に出る。絶対に外に出るなよ…」

桃香「え？どうしたの？」

千「何も聞くな。とにかく外には出るなよ」

それだけ言い残し、忍具を纏めて持って部屋の外に出た。

□□□□

既に日が落ち、暗くなった通りに出ると、黒いマントで全身を覆い

隠している人影があった。

千「お前は何者だ？まさか…夜か？」

そう言った瞬間、黒いマントを脱ぎ捨て、宙を浮いて俺に突進してきた。

千「っ!？」

慌ててクナイを出して刃の付いた爪を受け止める。

千「コイツは…!」

傀儡人形…それも原作ではカンクロウが使っているカラス…いや、よく見ると各部が違う…。

本来、腕は4本だが2本腕だ。複製品か何かか？

俺は爪を弾いて後ろへ飛び退く。

しかしチャクラの糸が見えないな…限界までチャクラを抑えているのか？

それでこれほどの傀儡捌きならかなりの使い手だな。

千「傀儡って事は術者は近くにいるって事か…」

チャクラを感知して居場所を見つけるか…。

だが俺がチャクラ感知を始めようとすると偽カラスが爪を光らせて

攻撃してくる。

成る程、探知はさせないって事か…！

クナイを逆手に持ち替え、左手にも持つ。

連続で繰り出される両手の爪を防いでいく。

千「チィ！」

流石に防ぎきれなくなり、クナイが弾き飛ばされる。

一旦距離を取るために飛び上がって建物の屋根の上に乗るが、すぐに偽カラスも追ってくる。

今度は隣の建物に飛び移る為に横っ飛びする。

だが跳んだ先にまた傀儡人形が現れる。

千「ぐっ…今度はクロアリか…！」

そう、今度は捕獲用の傀儡人形、クロアリだ。

いや、またこれも各部が違っている…。

4本腕の筈なのに2本腕…角も2本じゃなくて1本だ。

こいつも複製品か？

千「って考えている場合じゃないな」

既に偽クロアリは胴体の部分を展開して捕獲の体勢だ。

手で頭の部分を掴んで下に叩き落とすと同時にその勢いを利用して更に高く飛び上がる。

そのまま元の通りに降り立った。

千「これは傀儡を破壊するか術者を探さないと埒があかないな…」

だが術者を見つけるのは難しいな…チャクラ探知をしようとする
と傀儡が襲ってくるしな。

千「やはりあの程度じゃ破壊しきれないか…」

さっき叩き落した偽クロアリが立ち上がってこちらに向かってくる。

偽カラスも屋根から下りて俺に向いてくる。

千「さて、そろそろ本気で行くぞ」

首切り包丁を抜き、正眼に構える。

そして偽カラスと偽クロアリは俺の正面から猛スピードで迫ってくる。

それを迎え撃てるように腕に力を込める。

だが、2体の傀儡は俺を無視するように通り過ぎた。

後ろを振り向くと、そこには愛紗と鈴々が、それぞれの得物を持って立っていた。

千「おい！待て2人共！」

俺は制止するが2人は止まらない。

愛紗「加勢します！」

鈴々「鈴々達に任せるのだ！」

千「違う！後ろだ！」

俺の声で、2人は後ろを振り向くと、そこにはもう2体の偽カラスが迫っていた。

愛紗「なっ…！？」

鈴々「にゃにゃ！？」

千「ぐっ…伏せろ！」

そう叫ぶと同時に、俺は首切り包丁を投げ飛ばした。

まずは2人に向かっていている偽カラスと偽クロアリを切り裂く。

その後、愛紗と鈴々は慌てて体を屈めると、その上を回転した首切り包丁が通り過ぎ、偽カラス達を胴体から真っ二つにした。

そして勢いを失った首切り包丁は地面に落ちた。

だがその前に愛紗と鈴々に問いたださないと。

千「何をしに来た？絶対に来るなと言っただろう？」

愛紗「僅かですが殺気が出ていたので…何かあると思って…」

鈴々「そうなのだ！…と言うより、あれは何なのだ？」

千「あれは傀儡人形と呼ばれる操り人形だ。あれを操っている術者が近くにいないはずなんだが…」

そこまで言うと、カタリと何かが音を立てた。

千「っ！？」

その音は、偽カラスの1体の首だけが分離してこちらに飛んできた音だった。

そして偽カラスの口は、展開し、針が飛び出している。

千「仕込み…！」

その針の先は…愛紗。

俺は愛紗の体を押して、避けさせるが…偽カラスの首は向きを変え、俺に迫る。

顔を傾けてかわそうとするが、頬に少しだけ掠ってしまう。

千「ぐっ…」

だが、偽カラスの頭に繋がっている糸を、写輪眼で見切り、糸を掴む。

そこに俺のチャクラを流し込む。

それは糸を辿り、術者の体を破壊する。

??? 「ぐあっ…!」

写輪眼で糸を辿った先には、黒い人影。だがその人影もすぐさま闇に姿を消した。

千「逃がしたか…うぐっ…!」

針に毒が塗ってあったのか、顔の辺りが痺れる。

愛紗「千殿! 私を庇って…!」

鈴々「千のお兄ちゃん!」

千「やはり…針に毒が…」

頬に医療チャクラを当てて直接毒抜きをする。

幸い、掠っただけなので毒の量は大した事は無かったのですぐに毒は抜けた。

愛紗「大丈夫ですか!? 医者に…」

千「俺は大丈夫だ。それよりこれ以上襲われると厄介だ。宿に戻ろう」

愛紗「しかし…」

千「大丈夫だ。行こう」

俺は首切り包丁を拾い、宿に戻った。

千「奴らは…」

□□□□□

視点・大然

傀儡人形で手を出してみたらまさかこちらが少々とは言え手傷を負うとはね…。

大然「ぐっ…油断しましたね。まさかチャクラを流し込んでくるとは…」

左慈「情けないな。自慢の傀儡も破壊されてんじゃねえか」

白装束…雑魚の分際で…！

大然「チッ…破壊されたのは右手の指だけ…まだ左手が残っていますよ…！」

左慈「はっ！結局倒せてねえじゃねえか！どうするつもりだ！？」

撒いた種にも気づかないとは…愚かな。

大然「今回の倒せるとは思っていませんよ…ただ今日は牽制したのです」

左慈「牽制だと？」

大然「ええ、彼は今回の事で私が目をつけている事を知った…それで少なからず警戒し、気を張る。そして疲労した所を突くのですよ」

左慈「またまどろっこしい…」

大然「彼を嘗めてはいけません…これからも定期的に仕掛けて行く必要があります…貴方方にも手伝ってもらいますよ」

暁と夜は対峙する…。

そして今、夜の傀儡師は動き出した。

第三十幕 牽制…（後書き）

大然は傀儡使いって事で。

オリジナルの傀儡も出る予定っす。

じゃあ愛紗にフラグ立ててからハムの人ん所に向かいます。

第三十一幕 信じる事…！（前書き）

やっぱり戦闘描写があると長くなりますね。

第三十一幕 信じる事…!

俺達は公孫賛のいる町に向かっている。

あの戦いから既に2日。

奴は昨日の夜も、皆が寝静まった頃、俺達が野宿していた場所から離れた場所で仕掛けてきた。

偽カラスが3体で、何事もなく倒せたが、俺の後をつけている事は間違いないだろう。

そして、今夜も…

千「かあっ!」

風のチャクラを流し込み、切れ味と攻撃範囲を大きく上げた手裏剣を雨に様に投げると、目の前に迫っていた偽クロアリはバラバラになった。

そして、俺の足元には既に同様の方法で解体された偽カラスが2体。

千「今日はここまでか…?」

この程度の攻撃で俺を倒せないというのは奴も分かっている筈なのに何故仕掛けてくる…?

だが、思考に集中していた俺の頭は、一瞬、その反応に遅れた。

千「なっ…!?!」

俺の足元の地面が盛り上がり、口のような物に飲み込まれる。

千「捕獲用に改造したサンショウウオか！」

サンショウウオは、長い胴体に何本も足がついていて乗り物のようになっている。なので当然乗ろうと思えば乗れる。これも複製品か？

今のは背中の部分に飲み込まれて閉じ込められたみたいだな。

そして僅かに何か焦げる臭いがすると、俺は草薙の剣を引き抜き、千鳥を発動して千鳥刀で山椒魚の背中を切り刻み、脱出した。

直後、サンショウウオが爆発して粉々になってしまった。

千「危なかった…まさか内部に起爆札を何枚も張っておくとはな…」

今言ったとおり、もう少し脱出するのが遅かったらサンショウウオと一緒に爆発してる所だった。

千「今ので逃げられたか…」

この隙に逃げたようで、昨日も今のように逃げられた。

千「…戻るか」

踵を返し、皆が寝ている場所に戻ろうとするが…

愛紗「千殿…」

これはしまった…まさか愛紗につけられているとはな…夜の連中に集中してて気づかなかったな。

愛紗「以前の事と言い、今の事と言い…貴方は一体誰と戦っているのですか？貴方は何者なんですか？」

千「…妖術師の類さ敵も俺と同じだ。嫌になったら言ってくれればいい、すぐに別行動を取る」

愛紗「…」

俺が皮肉気に告げると、顔を俯かせてしまった。

ここの所警戒していて疲れてしまったので、俺は眠る事にした。

□□□□□

視点・愛紗

どうすればいい…

千殿の事は嫌いではない。それどころかここ数日共に過ごしてみても良い人物だと思う。

だが、彼の使う術は未知数だ。

得体が知れず、前から襲ってくる人形も敵の術で動いているらしい。

このまま共に行動すれば、桃香様や鈴々、ご主人様にも被害が出るかも知れぬ…。

愛紗「どうすれば…」

人知れず、私は呟いていた。

そして、答えは返ってはこなかった。

□□□□□

視点・千

翌日、朝になったら起き、皆で公孫賛の元へ向かう。

そして日が落ちるまで皆と会話しながら歩き、日が落ちれば野宿をするという方法を使っている。

因みに俺は笠も仮面もつけていない。

そして、空もそろそろ茜色に染まってきた。

だが、愛紗は難しい顔をしていて、顔も少し暗い。

多分、俺の事を考えているのだろう。

まあ、それは皆が決める事。もしここで分かれても、夜を倒した後
に繋がりを作ればいい。

そう思い、足を先に進める。

そういえばこの時期になら公孫賛の所には星がいるだろうな。随分と久し振りだ。

鈴々「にゃゝゝ後どれぐらいで着くのだゝ？」

千「この調子なら2日後には到着する。そうすれば士官もできるだろうし飯も食えるぞ」

鈴々「よーし！それならもっと急ぐのだ！」

野宿で、食べる量に制限があり、多少不満だったのか歩幅を広げてズンズン進んでいく鈴々。

だが足が短くそんなに速くないのが現実だ。

思わずクスリと笑ってしまふ。だが隣にいた北郷が驚いた顔をしている。

千「…どうした？」

一刀「いや、そんな顔もできるんだなと思って」

コイツは俺を機械か何かと勘違いしているのか？俺だって人間で感情くらいある。

千「当たり前だ。お前だって可笑しな事があれば笑うだろ？」

一刀「まあ、そうだけどさ…」

何故か歯切れが悪く、こちらも居心地が悪くなる。

千「何だ？言いたい事があるならはっきり言ってくれないと分からないぞ？」

一刀「あ…正直、千って冷たい人みたいだったから…」

千「俺だって人間だ。笑う時もあれば、泣く時もあれば、怒る時もある。多少無表情って言われるがな」

これは猿太に言われた事だ。もっと喋ればもっとモテるとか言われるが、正直どうでもいい。

猿太こそもう少し喋らなければモテるんじゃないや………無理だな。

暫くして日が落ち、こうして俺達の3日目の旅は終了…するかにみえた…。

千「じゃあ今夜はここで野宿だな」

木々の下、俺達は焚火の傍に集まり、食料である魚を焼いている。

鈴々「むう…これじゃ足りないのだー！」

駄々を捏ね始める鈴々。まあ沢山食べる鈴々にとっては辛いだろう。今焼いている魚は8匹で、1人頭2匹だ。普通の人ならば満腹とは言わないが腹8分目にはなる筈だが…。

千「ほら、よかったら食え」

俺は焼きあがった魚を鈴々に差し出す。

鈴々「やったのだー！」

桃香「でもそれじゃ千さんの食べる分が…」

千「大丈夫だ。俺にはこれがある」

そう言ってポーチから取り出したのはとある丸薬。兵糧丸だ。

桃香「それは？」

千「兵糧丸と呼ばれる丸薬で、1つ食べれば3日3晩戦えると言われる秘薬みたいな物だ…」

説明が終わると、俺は1粒兵糧丸を飲み込んだ。

実際、兵糧丸は高タンパク質で、ある種の興奮剤や鎮静剤のような効果もあるからエネルギーも摂取できる。

これともう1つの魚で俺の夕食は終わり…

鈴々「じー…」

もう食べ終わってる…！？そして視線の先は俺の魚…。

千「食べてもいいぞ…」

鈴々「やったのだ！」

やれやれ、もう1つ食べとくか、兵糧丸…。

そして俺達は眠くなるまでそれぞれの方法で時を過ごしていた。

桃香は鈴々と話をしていて、愛紗は青龍偃月刀を振って鍛錬。北郷は愛紗を見て…いや、正確には振った際に揺れる愛紗の胸を見ている。

俺は目を閉じてチャクラの感知をしている。今度はいつ仕掛けてくるのか分からないからな。

……………来た。

感じるチャクラは1つ。恐らく本体。

そしてそこから伸びるチャクラの糸…その先には恐らく傀儡人形…いや…何もついていない。

そのままチャクラ糸は伸びて…接近してきている！

千「皆、何か来るぞ！」

俺が声をかけると、桃香と北郷が一箇所に集まり、それを鈴々が守るように武器を構え、愛紗は俺の隣に来て偃月刀を構えている。俺も何時でも対応できるようにする。

ここにいる人間を操るつもりか…？

チャクラ糸は、近くに近づくと、地面の中に潜っていった。

そして次の瞬間、近くの地面が盛り上がり、そこから現れたのは例の偽カラス。

どうやらここに予め傀儡を埋めて仕掛けておいたようだ。

数は2体。

千「水遁・水乱波！」

口から水を吐き出し、カラスの1体を水浸しにすると、続いて印を結ぶ。

千「雷遁・感激波！」

俺が出した水に雷で感電させる術だ。これにより偽カラスは電撃のショックでバラバラに弾け飛んだ。

愛紗「はあっ！」

もう1体の偽カラスは、愛紗が偃月刀で爪を弾き、隙が出来た瞬間に偃月刀で胴を一閃した。

千「まだ油断するな」

俺がそう言うと、愛紗と鈴々は武器を握りなおす。

俺は写輪眼を発動し、チャクラ糸を感知する。

やはり糸は地面に潜る。

千「気をつけろ！地中から来るぞ！」

続いて地面から現れたのは：見たことのない傀儡だ。

腕は2本。足はない。黒いローブを羽織っていて胴体部分は見えない。顔には目が1つしかなく、髪はボサボサの黒い髪になっている。

数は2。そして後から偽カラスも2体現れる。

見たことのない傀儡は、2体で、片手づつ手を合わせると、そこから何かが連結する音が聞こえる。

そして手を離れた時、その傀儡達の手のひらには鎖が繋がっていて、ジャラリと音を立てた。

この場合は片方倒せばそれが引きずられて足手纏いになる筈。

俺は見たことの無い、片方の傀儡に狙いをつける事にした。

だが、傀儡は高く飛び上がり俺の頭上を越えた。

千「逃がすか：何っ!？」

俺は傀儡を追おうとしたが、偽カラスに遮られてしまう。

もう1体の偽カラスは鈴々達の方へ行っている。

そして鎖の傀儡は、愛紗を挟むような陣形を取っている。

そうか…！ 奴の狙いは…！

千「逃げる愛紗！」

愛紗「え？」

2体の傀儡は愛紗の回りを高速で回転する。

つまり、今の愛紗は鎖で体を縛られ身動きがとれなくなっていた。

愛紗「ぐっ！は、離せ！」

そう言われて離す筈もなく、そのまま傀儡は愛紗を連れ去っていった。

千「愛紗！」

俺は、偽カラスの頭を蹴ると、頭は吹き飛んでいき、その隙をついて俺はその後を追っていった。

木々の間を通り、チャクラを感知すると、近くで止まった。

千「ここか！」

俺が飛び出すと、そこは少し開けた場所だった。

千「お前…いやそれは…」

そこにいたのは先ほどの2体の傀儡と木に縛り付けられた愛紗。

そしてその愛紗の首筋に尾の形をした刃を向けている傀儡人形、ヒルコだ。

そして、後をつけて来たのか、後ろから鈴々を先頭に、桃香、北郷もここに来た。

桃香「愛紗ちゃん！」

ヒルコ「動かないで下さい」

尾の形をした刃が、愛紗に近づく。

一刀「な、何だ？あれも人形なのか？」

千「ああ、あれは傀儡人形ヒルコ。術者はあの中だ。傀儡自体が武器にも鎧にもなる」

ヒルコ「お初にお目にかかります…あ、本体は見えていませんか…私の名は大然。どうぞよろしく」

千「夜…だな？愛紗を離せ」

ヒルコ「お断りします。貴方をおびき寄せる大切な餌ですから…それにしてもクロヒョウの仕込みは知らなかったらしいですね？」

クロヒョウというのは恐らく愛紗を拘束している傀儡だろう。

千「…何が望みだ？」

ヒルコ「あなた方の装備を全て捨ててください。妙な真似をすれば
関羽殿の首が落ちます」

愛紗「駄目です！私の事は構わずに…！」

ここで愛紗に死なれる訳にもいかなないので、俺は草薙の剣や首切り
包丁を始めた武器を全て捨てた。

鈴々「むう…」

鈴々も、大人しく蛇矛を捨てた。

愛紗「そんな…」

ヒルコ「ではまず誰から死んでもらいましょうか…？」

そう言うのと、ヒルコは口の布を取り、口を展開する。

確かあそこからは毒針が出てくるはずだ。

ヒルコ「そうですねえ…ではやはり貴方からにしましょう！」

ヒルコの口からは、毒の塗られた針が俺に向かって無数に飛び出す。

愛紗「大然殿！」

だが、それは俺に刺さることはない。

腕に巻いていた包帯を解いて振り回し、針を辛うじて弾いていた。

ヒルコ「ほう：ですが抵抗したので残念ながら関羽殿には死んで頂きます」

冷淡にも言い放ち、尻尾を愛紗に向けて突くが：

ヒルコ「何：！？」

ヒルコの尻尾には、もう片腕の包帯を伸ばし、巻きつけて動きを止めていた。

そして本体ごと引張り、千鳥の印を結んで形態変化、千鳥鋭槍を作り出し、ヒルコを切り裂いた。

千「そう簡単にやらせはしない」

大然「やりますね：これで本当にご対面ですね」

そこにいたのは、長居茶髪をして、黒い衣の背中に三日月のマークがある衣を着た十代後半の男。

千「夜：」

大然「その通り：さて、今日はここまでにしますかねえ：ヒルコも壊されてしまいましたし。また近いうちにお会いしましょう：」

そっくり残し、奴は去っていった。

直後、愛紗を拘束していた鎖が緩んだ。恐らく術を解いたのだろう。

千「大丈夫だったか？愛紗」

俺達はすぐに愛紗の安否を確認する。

愛紗「何故…あんな危険な事を…？」

かなり暗い顔になってしまっている。恐らく、人質にされたのに責任を感じているのだろう。

千「ん？」

愛紗「包帯で防いだものの…あれは一種の賭けなのでは…？」

確かに、包帯で針を弾くのは至難の業…因みにさっきの俺もかなりキツかった。

だが、意味もなくこんな賭けをしない。

千「大切な仲間を助けるなら分の悪い賭けも悪くはないさ」

笑いながら、そう言うとき愛紗は顔を真っ赤にして何かを呟いていた。

千「さて、戻ろうか」

俺達は、疲れた体を休めるために、戻る事にした。

そして、俺はさっき愛紗に言われた言葉を思い出していた。

「ありがとう…」

と。

□□□□

視点・愛紗

私は、戻る途中でもう1度千殿の顔を見た。

な、何だ…？ 顔が少し熱くなって…心臓の音が速くなる…？

でも少し安心する…

い、一体どうしたんだ…？

結局、この答えは分からなかった。

第三十一幕 信じる事…！（後書き）

捕まった女の子を主人公が助ける！

これぞ王道！

って調子乗りました、スンマセン。

次回はハムの人と出会いますとも。そしてあの人もね。

第三十二幕 昇り龍再び（前書き）

あー、テスト始まるわ…。

更新少し遅くなるかもです。

第三十二幕 昇り龍再び

鈴々「到着なのだー！」

町について早々、入り口で鈴々が叫んだ。

そのせいで、回りの人々は俺達を不思議そうに見る。

愛紗「こ、こら鈴々！そんな大声で叫ぶな！」

その視線が堪えたのか、愛紗は鈴々を咎めるが、当の本人は殆ど気にしていなかった。

難儀な姉妹だと思ってしまった。

千「さて、そこまでだ。桃香、早く公孫賛の所に行こう」

桃香「うん！」

俺は皆を促すと、既に見えている城に向かった。

□□□□□

とりあえず、俺達は門番に声をかけ、桃香が公孫賛の友人である事を説明し、確認が取れたので部屋に案内された。

一番前に桃香が座り、その少し後ろの左右に愛紗と鈴々、その後ろに俺と北郷が並んで座っている。

千「さて…また女かね…？」

独り言だったが、隣にいた北郷には聞こえてしまったようで、俺の方を向いてきた。

北郷「なあ、千って他の武将にも会った事あるんだよね？」

少しにやけた顔で俺に小声で語りかけてくる。

千「ああ、魏や呉…後董卓軍にもいた事がある」

北郷「やっぱり、可愛かった？」

……何を言っているんだか。

千「さあな、俺はそう言った事にあまり興味がない…だが容姿は優れていたと思うぞ」

北郷「なら公孫賛も…」

ニンマリとした笑顔になり、若干引く。

と言うか、何を期待しているんだお前は。

すると、この部屋に誰か入ってくる。

赤い髪をポニーテールにして、桃色の服と白い系鎧を着ている。

恐らく、彼女が公孫賛だろう。

公孫贊「久し振りだな桃香！」

桃香「白蓮ちゃん！」

2人は、暫く友人同士の再会を喜んでいた。

公孫贊「ところで桃香、お前今まで何をやっていたんだ？」

桃香「えっと…あちこちで沢山の人達を助けてたの」

公孫贊「…それだけか？」

桃香「うん」

少し呆れたような、それでいて諦めたような表情の公孫贊。

公孫贊「桃香、ずっとそうしていたのか？」

桃香「だって…どこかの県に所属して他の場所の人達を助けられないのが嫌だったんだもん…」

今度は桃香が雰囲気暗くして言う。

確かに、1箇所に留まっていたは助けられない人々もいる。

まあ、俺も各地を転々としていたがな。

公孫贊「そうか…でも1人じゃできる事も限られているだろう？」

桃香「うん…でも私は1人じゃないよ。とっても頼りになる仲間がいるから！」

そう言って俺達に向き直る。

公孫賛「この4人が仲間か？」

桃香「うん！」

愛紗「私は関羽。桃香様の家臣です」

鈴々「鈴々は張飛なのだ！」

それぞれ自己紹介を始める2人。俺達もしないとな。

千「俺は神谷千。千と呼んでくれ」

一刀「俺は北郷一刀。一応天の御使いってのをやってるよ」

俺達の自己紹介をして、公孫賛は少し驚いた顔をしている。

公孫賛「天の御使い？お前がか？」

どうやら北郷について驚いているようだ。

北郷「あ、ああ…まあまだ実感がないけど…」

こんな所でもヘタレスキル発動。少し喝を入れてやるか。

千「もっとしっかり構えてろ。桃香達はお前を主として行動してい

るんだ。ナヨナヨしてると他の奴らに嘗められるぞ」

そう言うのと、北郷は苦笑して頬を搔いた。

公孫賛「何だか桃香やそっちの北郷よりお前の方がよっぽど主らしいな？」

公孫賛も、この様子に少し苦笑している。

千「そうでもないさ」

まあ、この世界に来て暁を率いているから、多少のリーダーシップは持ち合わせていないといけない。

???「いえ、そんなことはない。千殿にも人を惹きつける何かがありますよ」

急に聞こえたその声は、聞き覚えがあり、思わず立ち上がってしまった。

千「この声は…」

そこにいたのは、白い着物に、藍色の髪、朱い槍を持っている女性。

それは、紛れもなく、趙雲子龍…星であった。

千「久し振りだな、星」

星「ええ、千殿もお変わりないようで何よりです」

本当に久し振りだ。

俺が初めて出会ったこの世界の三国の将。

そういえばこの時期は公孫賛の所にいたなと思う出す。

公孫賛「何だ星、知り合いだったのか？」

星「ええ、少し前に賊が町を襲おうとした所を2人で撃退しましてな…そういえば、猿太殿は？」

そういえば星と出会った頃は猿太もいたな。

千「今は別行動だ。その内また会えるだろう」

星「そうですか、まあ私としては千殿と出会えたなら何も言う事はありませんが」

そう言って俺の腕に軽く抱きついてくる。

愛紗「なっ!？」

それ行動に、愛紗だけが過敏に反応した。

千「どうした? 愛紗？」

愛紗「あ、いえ…その…」

何やら戸惑っている様子の愛紗。だがその姿を見た星はニヤリと笑みを浮かべる。

星「いかがした関羽殿？」

愛紗「す、すまないが貴女の名をお聞かせ願いたい…」

愛紗は笑顔だが、何故か口元が引きつっている。どうかしたのか？

星「そうでしたな。私は趙雲子龍。先ほど言ったとおり千殿の知人だ」

そんな愛紗の様子に、更に体を俺に押し付けながら星は続けた。

また愛紗の体がピクリと揺れた。妙に黒いオーラを放っているが、どうしたんだ？

星「そういえば白蓮殿、私の準備も整いましたぞ？」

公孫賛「あ、ああ…そうか、なら出発しよう」

桃香「出発？どこかに行くの？」

公孫賛「ああ。この近くに黄巾党が現れたらしいからその討伐にな」

千「それなら俺達も付いて行こう。元々仕官するつもりで来たんだしな」

俺が案を出すと、皆頷いてくれた。

公孫賛「そうか！指揮官の人数が足りなくて困っていたんだ」

星「それでは行きましょうか、千殿」

俺の腕を取ったまま、俺を引っ張り外に連れ出す。

愛紗「…」

一刀「ねえ桃香…愛紗が怖いんだけど…」

鈴々「黒いのだ…」

桃香「ど、どうしたんだろ？」

公孫賛「もしかして…」

まあ、こんな感じで俺達は賊退治に向かった。

第三十二幕 昇り龍再び（後書き）

星との再会です。

修羅場修羅場。

次回は2人のロリ軍師さん登場です。

第三十三幕 本当の修羅場（前書き）

はい、再会します。

第三十三幕 本当の修羅場

何だか黒いオーラを放っている愛紗を鎮め、俺達は近くの荒野まで辿り着いた。

千「敵は？」

公孫贊「どうやら、他県から移民中の者達を襲うつもりだな」

やはり民を狙うか…。

千「とにかく、手分けをして移民中の民を誘導するんだ」

俺の言葉に皆頷き、それぞれ自分の持ち場に付いた。

桃香「皆さん！私についてきてください！」

農民の一団と合流すると、桃香が率先して誘導した。

その農民の一団を桃香が誘導していると、鈴々が遠くを見ているのが分かった。

千「どうした、鈴々？」

鈴々「逃げ遅れている人がいるのだ…」

千「何？」

鈴々がそう言ったので、試しにチャクラを感知すると、確かに速度

が遅いが移動する3つのチャクラがある。

その後ろからはおよそ30のチャクラが後を追っている。

千「確かに…と言うか、このチャクラは…」

何だか覚えのあるチャクラだ…前に会った奴がいるのか？

一刀「どうしたんだ？」

鈴々「逃げ遅れてる人がいるのだ！」

一刀「な、何だって！？じゃあ俺がその人たちを助けに…」

千「北郷、その勇氣は買うがその人達の後ろから黄巾党が迫ってきている。お前はここに残れ」

残念だが、北郷は今付いてこられても足手纏いにしかない。

一刀「くっ…」

北郷は悔しそうに俯いた。声をかけてやってもよかったが、生憎時間がない。

千「北郷、お前は誘導に戻れ。鈴々は遅れている民を迎える準備をしてくれ。俺が連れてくる」

鈴々「間に合うのだ？」

千「余裕でな」

俺は巻物を取り出すとポーチにあった筆を取る。

巻物には何も書かれてなく、巻物の軸には仕掛けがあり、蓋を外すとそこには墨が入っている。

筆に墨を付けると、その筆で巻物に鳥の絵を書いていく。

千「忍法・超獣偽画！」

そしてその巻物を振り回すと、そこから描かれた白黒の大きな鳥が飛び出した。

一刀「うわわわっ!？」

鈴々「凄いのだっ！」

この術は、白紙の巻物に描いた動物を立体化させて操る事が出来る術だ。

千「じゃあ行く」

俺はその鳥の背に乗り、空に舞い上がった。

□□□□

視点・朱里

朱里「はわ…はわ…」

雛里「あわ…あわ…」

私達は、荊州から天の御使い様を探してこの幽州に来ました。

つい最近、このあたりで白い流星が落ちたとか…

それで！私達ここに来たんです！

それに旅をすれば…そ、その…千さんにもまた会えるかもしれないし…／／／

それで、県を移動する人達と一緒に行動としたら、黄巾党の人達が襲ってくるって…

でも、遅れているお婆さんを見捨てるわけにもいかず、私達はお婆さんに合わせて歩いています。

お婆さん「ふ、2人とも…ワシはもう駄目じゃ…速くお逃げ…」

お婆さんは諦めて、座り込んでしまった。

朱里「だ、駄目です！諦めないで下さい！」

雛里「そうです！ここまで来たんですから…」

お婆さん「そ、そうじゃな…ここまで付き合ってくれた2人の為にも頑張るよ…！」

何とかお婆さんも立ち上がった。

黄巾党1「追いついたぞ！皆こっちだ！」

朱里「はわっ！？」

雛里「あわっ！？」

ど、どうしよう！？追いつかれちゃった！

黄巾党2「ようし…もう逃げられねえぞ」

黄巾党3「でも婆とガキかよ…」

黄巾党4「婆は殺してガキはどっかに売り払うか」

ええっ！？こ、このままじゃ…！

朱里「はわわ…ど、どうしよう雛里ちゃん…」

雛里「…せ、せめてお婆さんだけでも逃げてください！」

私達は両手を広げてお婆さんの前に立つ。

お婆さん「2人とも…！」

どんどん近づいてくる黄巾党の人達…でも、逃げる訳にはいかない…！

でも、もう少しで傍まで来る、という所で、上から何かが降りてくる。

あれは…白黒の大きな鳥？

鳥は、黄巾党の人達に突っ込むと、黄巾党の人達を吹き飛ばし、バシヤッと音を立てて墨になって消えてしまった。

そして、続いて上から何かが落ちてくる…。

そして、その人は、私達の前に降り立った。

千「久し振りだな、朱里、雛里」

黒地に赤い雲模様の服、短い黒髪、背中に大きな剣。

その人は…また私達の危機を救ってくれた。

朱里 雛里「千さん…」

私達は、同時にその人の名を呼んだ。

□□□□□□

視点・千

逃げ遅れている3人を助けるために超獣偽画の鳥で空を飛び、その場へ行くと、そこには諸葛亮こと朱里、鳳統こと雛里と1人の老婆がいた。

黄巾党に襲われそうになっていたので、超獣偽画の鳥を飛ばし、吹

き飛ばした。

そのまま俺は落下して、降り立つ。

千「久し振りだな、朱里、雛里」

朱里 雛里「千さん…」

久し振りに出会った小さな軍師は、呆然としながら俺の名を呼んだ。

千「下がってろ」

俺は、巻物に墨で狛犬の絵を描いていく。

千「忍法・超獣偽画」

描いた狛犬が大きくなって飛び出し、黄巾党に向かって走っていく。

黄巾党5「な、何だコイツ等！」

白い狛犬は、黄巾党に体当たりすると、墨なって消えていく。

千「終わりだ。超獣偽画」

巻物に描いた長い長い龍を立体化すると、龍は、飛び上がって黄巾党に突っ込み、墨と共に吹き飛ばした。

千「やれやれ」

そして更に鳥を描き、鳥を2羽出現させる。

そして巻物を閉じ、筆と共にポーチに収める。

千「さて、陣まで行こう。乗ってくれ」

朱里「あ、はい！」

雛里「分かりました！」

2羽書き出したのだが、朱里も雛里も俺と一緒に乗りたがり、仕方なく老婆は1人で乗ってもらった。

乗る前に、朱里と雛里に向かって、

老婆「ありがとうねお嬢さん方。それと頑張るといいよ」

と笑って言っていた。その言葉に2人は顔を赤くしていた。

何を頑張るんだ？

そんな訳で、俺達は陣営に戻った。

□□□□□

千「今戻った」

鳥から2人と老婆を降ろし、老婆は兵士に町に遅らせる事になった。

で、朱里と雛里は俺が桃香に推薦する事になった。

北郷はかなり驚いていたが、落ち着くと2人をいやらしい目で見ていた。

桃香「その2人が？」

千「ああ。武は無いが軍師としてはかなりの逸材だ。2人を仲間に出れないか？」

桃香「うん、いいよ」

公孫賛「おいおい桃香、そんなに簡単に決めていいのか？」

俺も驚いた。まさかこんなあっさり決めるとは思わなかった…。

桃香「うん！千さんの知り合いならいい子だろうし仲間も増えるからね！」

千「らしいぞ、2人ともよかったな」

朱里「はい！」

雛里「あ、ありがとうございます」

話が終わり、新たな仲間を迎える事になった。

そこへ、星が現れる。

星「ところで…お2人は千殿とどういった関係で？」

雛里「そ、それは…あわわ／＼／＼」

どういった関係かと言われても知り合いだが…？俺が何度か助けた程度だ。

それと2人とも何故顔が赤くなるんだ？

星「…これも敵か？（黒笑）」

愛紗「…ほう？（黒笑）」

朱里「はわわっ！？」

雛里「あわわっ！？」

な、何だ…？愛紗と星からかなりの威圧感を感じる…？

そして驚いた朱里と雛里は俺の腰に抱きついてきた。

愛紗「なっ！？」（う、羨ましい！…って私は何を！？）

星「ほほう…（私の前で千殿に抱きつくとは…）」

千「…皆仲良くしろよ」

険悪なムードになりそうだったので釘を刺しておいた。

その後、皆で真名を交換した。

公孫賛の真名は白蓮と言うらしい。

そして、俺達は黄巾党討伐のための軍議を始める事になった。

第三十三幕 本当の修羅場（後書き）

連続修羅場。

修羅場って思わずニヤけてしまいますよね。

第三十四幕 武、知、人（前書き）

はい、三十四幕です。

なんか変な内容になりましたがご容赦を。

第三十四幕 武、知、人

千「どうする？正面からぶつかっても勝てるだろうが、被害を抑えるに越した事はないからな」

俺達は今、軍議をしている。

その軍議には、俺と桃香と愛紗と鈴々と星、朱里に雛里に白蓮、北郷と、皆勢ぞろいだ。

白蓮「何かいい策はないか？」

俺は顔を朱里と雛里に向けている。この2人なら何か思いつくはずだ。

そんな俺の視線に気が付き、朱里と雛里は恐る恐る手を上げた。

白蓮「ん？どうした朱里、雛里」

朱里「は、はい！あの…この地図によるとここに身を隠しやすそうな場所があるので…」

雛里「ひ、一当てした後には後退して不意打ちをするのはどうでしょうか…？」

流石だ。その策があれば、被害も少なくて済むはずだ。

星「ほほう、中々の知略…私は依存はりませんぞ」

白蓮「ああ、私もだ。皆はどうだ？」

その言葉に反論する者はいなかった。

白蓮「それじゃあ配置を決めるぞ、まず…」

□□□□

鈴々「ぶー…」

千「そう怒るな鈴々」

配置は愛紗と星が第一戦線。俺と鈴々が伏兵。白蓮、桃香、北郷、朱里、雛里は本陣で待機だ。

鈴々「でも…鈴々も戦いたかったのだ」

シヨンボリと落ち込んでいる鈴々だが、今回の前線の役目はある程度で敵をおびき寄せるために退く事だ。

はっきり言って、鈴々の性格上あった役目ではないだろう。

千「そう言うな、今回の策の成功するかしないかはこの伏兵部隊にかかっている。つまり、鈴々は期待されているのさ」

頬を膨らまして拗ねている鈴々の頭に手を置き、優しく撫でてやる。

鈴々「にゃ…気持ち良いのだ…／／／」

ふにゃつと顔を緩めて気持ち良さそうに目を細める鈴々。

：こんな事をしているとアイツを思い出す：アイツもよくこんな顔になってたな。

すると、少し離れた所から地響きのような音が聞こえてくる。

千「来たな」

撫でていた手を離し、背の首切り包丁に手をかける。

鈴々「ふにゃ／＼／＼：っは！？よ、ようし！皆行くのだ！」

気を取り直した鈴々も、蛇矛を持ち、俺達は隠れていた草陰から飛び出した。

□□□□

千「はあああっ！」

鈴々「だりゃああっ！」

俺の首切り包丁と、鈴々の蛇矛が振られると、人間がお手玉のように軽々と吹き飛ぶ。

慣れない人間がこれを見たら思わず現実逃避したくなってしまいうだろう。

千「風遁・真空大玉！」

印を結んで息を大きく吸って吐き出すと、真空の塊である大きな玉が吐き出される。

その大玉が弾けると、強烈な風が巻き起こり黄巾党を40人は吹き飛ばした。

鈴々「やっぱり千のお兄ちゃんは凄いのだ！鈴々も負けないのだー！」

俺の隣で蛇矛を振るっている鈴々がどんどん黄巾党を薙ぎ払っていく。

千「ふ…」

後の蜀の軍も随分と活気付いて来た。

俺が思う所、国には3つ、必要な物がある。

1つは武、つまり軍勢力だ。

他国から自分の国を守り、民を守る為に。

2つ目は知。これは、単に策を考えるだけじゃない。

債務をこなし、少しでも経費を削減して金に余裕を持たせるためだ。

そして最後は人…まあ人徳って奴だ。

愛紗や鈴々は、個人としての武はあるが、それを率いているのは桃

香だ。

桃香は、この国を変えたいと思って、仲間を集めた。

その心が大切だ。

国を変えたいと、誰かを救いたいと思うその強い心に、皆惹かれていくんだ。

このいずれ星も桃香について行くだろうし…これなら桃香に力を貸すのももう少しでいいだろうな。

そう思い、俺は首切り包丁を握り直したが、人ごみの向こうに、何かを見つけた。

黒い衣に、背に三日月のマーク…夜か!?

だが、その夜は、顔に赤い包帯を巻いていて、顔は見えなかった。

千「おい！お前…！」

俺はそいつに声をかけようとしたが、そいつは煙になってこの場から消えた…

夜…大然って奴とは別の奴だな…一体なにがしたかったんだ…？

□□□□□

戦闘の結果は、こちらの圧勝だった。

武、知、人の三拍子揃ったこちらの敵ではなかった。

首切り包丁を手で回転させて血を振り払うと、そのまま背に収めた。

星「千殿、そろそろ戻りましょうぞ」

鈴々「早く来るのだ〜！」

千「ああ、すぐ行く」

皆が急かすので、踵を返して本陣へ戻る。

だが、もう1度だけ振り返り、俺は沈み始めた夕日を見つめ、

千「…夜」

そう、呟いた。

□□□□□

視点・大然

大然「何故貴方がここに？」

普段から関わりを持たないリーダーの方が、何故か私の元に来ました。

リーダー「報告だ。尾獣の封印が数体だが解けた」

大然「ほう…それはそれは…」

リーダー「そろそろ本格的に仕掛けろ。暁は邪魔だ」

大然「分かりました。…ですが回りには将もいますし私1人では厳しいかと…」

それにあの千さんの戦闘力は計り知れませんしね…。

リーダー「一尾を貸してやる。好きに使え」

そう言うと、彼は私に少し大きめの釜を渡す。

リーダー「この中に一尾を封じてある。この札を剥がせば開放されるが…扱いには注意しろ」

大然「分かりました…それでは傀儡の準備もあるのでこれで…」

そう言って、私はその場を去りました。

□□□□□

視点・リーダー

リーダー「さて、どうなるか…」

赤包帯「今戻った」

偵察に出ていた赤包帯が戻る。

リーダー「奴の調子は？」

奴、と言うのは暁の頭である千の事だ。

赤包帯「面には出ていないが戦続きで疲労が溜まっている筈だ。今なら大然と一尾でも十分勝てる」

リーダー「そうか。尾獣の封印も一部だけが解除できたし…そろそろ夕暮れの段階に入るぞ」

赤包帯「もう入るのか…常闇計画の第二段階」

リーダー「懺に洛陽に向かうように言え。それと黄巾党はもう無用だ。斬り捨てるぞ」

さあて、この世界を常闇で覆ってやるか…。

第三十四幕 武、知、人（後書き）

白蓮にフラグ立てれねえ…多少無理矢理にでも立てるか…？

近々大然と決戦をしますのでよろしく！

第三十五幕 自分らしく…！（前書き）

フラグ立てますとも。

第三十五幕 自分らしく…!

さて、賊退治から2日。俺達は白蓮の所で少し世話になっている。

千「白蓮、これで最後だ」

白蓮「ああ、助かるよ」

それに伴い、俺達は債務を手伝っている。

千「それにしても…結構な量があるんだな」

白蓮「言っただろ？人手が足りないんだよ…」

苦笑しながら言うがその目の下には隈が出来ている。

千「…お前、碌に寝てないだろ」

白蓮「えっ？何で分かったんだ？」

千「目の下…隈が出来てるぞ」

俺は自分の目の下を指して言う和白蓮はまた苦笑した。

白蓮「ああ…賊討伐の後、残っていた仕事をやっててな…まだ終わってないんだ…」

白蓮は、文官の仕事もある程度こなす。器用貧乏という言葉や普通といった言葉が似合いそうだ。

だが、そのそこなく何でもこなす能力は統一計画を果たした後の世に欲しい…。

千「白蓮、少し休め。その書類は俺達でやっておく」

白蓮「え？で、でも…」

千「でもじゃない。それから明日も休みを貰え。無理をして倒れたら元も子もない」

白蓮「いや、でも…」

千「休め」

白蓮「う…分かったよ…」

こうして、白蓮はしぶしぶだが今日と明日は休む事になった。

そして俺は白蓮がやるはずだった大量の書類を持って皆に協力してみ貰うために部屋に向かった。

まずは朱里と雛里だ。

千「朱里、雛里、入っていいか？」

朱里「千さん？」

雛里「どうじょ…あう…／／／」

許可を貰って、2人の部屋に入る。

千「すまんが、白蓮の書類を手分けして手伝って貰いたいんだ」

朱里「それくらいなら幾らでも」

雛里「はい、任せてください！」

千「すまないな。他の奴にも頼みにいくから…また後でな」

そう言って部屋を去る。

さて、後は桃香と愛紗と星、それと北郷もだな。

鈴々はこういった事に向いていないから無しだ。

星「千殿、どうしました？」

これは都合の良い。

千「白蓮に疲れが溜まっていてな。出来れば星にもこの書類を手伝って貰いたい」

星「成る程…他ならぬ千殿の頼みであれば喜んで」

千「助かる」

また少しだけ星にも書類を渡す。

千「北郷や桃香は？」

星「債務をサボり、愛紗に追い掛け回されておりますが…」

何してんだか…。

千「そうか、ありがとう」

仕方が無い…後は自分でやるしかないな。

その後俺は自室に戻り、またかなりの数の書類を処理したのであった。

□□□□□

翌日

俺は昨日で書類を終わらせ、休みを貰って町をうろついていた。

今日の書類は、昨日サボった桃香と北郷に行っているはずだ。

千「ん？あれは…」

俺が歩いている先に、白蓮がいる事に気が付いた。

千「白蓮、何をしているんだ？」

白蓮「ん？ああ、千か。今日は千も休みなのか？」

千「ああ。書類は桃香達が処理している」

白蓮「そ、そうか…ははは…」

乾いた笑みを浮かべる。

千「折角だから、一緒に町を回らないか？」

白蓮「それもいいな、じゃあ行こうか」

俺達は並んで歩き、町を見て回る事にした。

千「なあ、どこかにいい甘味所は無いのか？」

白蓮「え？ いや、あるけど…」

千「何だその目は？」

白蓮「お前って…甘い物好きなのか？」

………何だよ、駄目なのか？ いいだろ男が甘い物好きでも。

千「ああ…」

白蓮「へえ、意外な所があるんだな」

千「ほっとけ」

俺は白蓮に案内されて、美味しいと評判の桃饅頭が売られている店に
来た。

千「モグモグ…」

白蓮「よく食べるなあ…」

テイクアウト…まあお持ち帰りって事で今は町の離れを歩きながら食べている。

千「まあな…」

次々に桃饅頭を口に入れては飲み込んでいく。

白蓮「…なあ、ちょっと私の話を聞いてくれないか？」

急に顔を伏せて暗い顔になる。

何かの相談事か？

千「別にいいぞ」

俺が答えると、少しだけ間を置いて口を開いた。

白蓮「私ってさ、どんな事でも中途半端な結果しか出せなくて…普通って言われてきてさ…」

千「…」

白蓮「私をもっと出来る奴だったら…皆に書類押し付けなくてもよかったんじゃないかって思ってた…」

コイツはコイツなりに普通である事に劣等感を持っていたのか…。

でも…

千「いいんじゃないか？」

白蓮「え…？」

千「お前はお前らしく、他人は他人らしく、違いがあるから人なんだ。皆一緒だったらそれこそおかしいだろ」

白蓮「…」

千「つまり、お前はお前であればいいのさ」

言い切った所で、また桃饅頭を口に入れる。

そしてふと白蓮を見ると何故か目から涙をボロボロと流していた。

千「ど、どうした？何か気に触るような事を言ったか？」

流石に急に泣かれると俺も焦る。

白蓮「ち、違うんだ…その…う、嬉しくて…！」

千「嬉しい？」

白蓮「そんな風に言われたの…初めてで…今のままで…いいって言われたの…」

目を擦りながら涙を流し続ける白蓮の肩を掴んで引き寄せる。

千「泣きたい時は泣け。俺の胸なら幾らでも貸してやる」

白蓮「すまない…」

そのまま白蓮は俺の胸に顔を埋めて声を殺して泣いていた。

□□□□

視点・白蓮

白蓮「本当にすまない…みつともない所を見せてしまった…」

うう…今頃になって恥ずかしい…！

あんなに泣いたのは久し振りだったな…。

千「さっき言っただろ。泣きたい時は泣けばいい、恥ずかしい事じゃないさ」

白蓮「うう…」

千「さあ、今日はもう帰ろう」

そう言って私に手を差し伸べてくれる。

白蓮「あ、ああ…」

何だろ、この気持ち…

千の傍にいたい…千に傍にいて欲しい…この安心するけど、少し緊張する気持ち…何だろう…？

私がこの気持ちの正体に気がつくのは、もう少し後になる…。

第三十五幕 自分らしく…！（後書き）

なんか白蓮メインヒロインみたいなノリになっちゃった…まあハレムだけど。

次回、何と…！

第三十六幕 来襲、一尾！（前書き）

急展開！？

第三十六幕 来襲、一尾！

前の休日から数日が経ち、桃香達は明日旅立つ事になった。

俺も統一計画を第二段階に移すか…

第一段階は三国の将達と繋がりを持つ事、そして第二段階は…実際の歴史とは違う歴史を作る事だ。

つまり、実際の歴史では死んだ人物を暁で保護したりする。

これは統一計画を考えた時は容易くできると思っていたが…夜の介入もあるだろうから少し難しいな…。

だがやらなければな…失敗は許されない。

千「この事を猿太やゼツにも伝えておかなければな…」

口寄せで呼び寄せるか？

だが猿太は夜を追っているから呼び出すと監視の目が外れてしまうからな…。

まあおいおい話せばいいだろう。

千「さて、今日も武器の手入れを…っ!？」

何だ!?!このでかいチャクラの塊は!?!

今はまだ封じられているみたいだが…町の離れまで来ている！

千「くそっ！」

窓のから外に飛び出す。

チャクラを感知した方へ全力で駆け出す。

千「何だ…！このチャクラ量…それも…禍々しい程の…！」

全力で走る事5分。町の離れに到着すると、そこには、大然と、少し大きめの釜があった。

そして、巨大なチャクラはその釜からあふれ出してきた。

千「大然！その釜は何だ！？何が目的だ！？」

大然「おや、何時になく動揺していますねえ？そんなにこの中身が気になりますか？ではお目にかきましょう！」

そう叫ぶと、大然は釜に張ってあった札を思い切り剥がす。

そして、釜の蓋が開き、中から大量の砂が飛び出し、どんどん形を成していく。

千「こ、これは…！」

砂は集まり、固まり、それは1つの尾を持つ巨大な狸になった。

千「一尾…！」

意思を持つチャクラの塊、尾獣が一体、一尾。

一尾「ヒヤハハハハ！やっとなでて来れたぜエ！」

一尾の性格は、破壊的で感情的…暴れると手がつけられなくなる。

千「大然！お前…いない？」

俺がもう1度大然の方を見ると、そこにはもう誰もいなかった。

千「くっ…！」

一尾「ギャハハハハ！お、丁度いい所にあるじゃねえか…手始めにあれをぶっ壊すかア！」

千「行かせるか！」

手の平にチャクラを集中、巨大な球体に形態変化。

千「超大玉螺旋丸！」

一尾「グオッ！？！」

一尾の腹に正面から巨大な螺旋丸を押し付けると、一尾は少しだけ後退した。

千「C2鳳」

起爆粘土で大きな鳥を作り出し、飛び上がる。

一尾「オイオイ何だア？」

千「悪いがこの先へは行かせられないな」

一尾「ハッ！出来るのか？テメエみたいな小さな人間によォー！」

一尾が叫ぶと地面から砂が持ち上がり、固まって一尾の腕の形を成す。

その数は3つ。

千「チッ！」

鳳を操作し、襲い来る爪を回避する。

千「火遁・豪火球の術！」

口から大きな火球を吐き出すが、砂の爪で防がれる。

やはり砂に火は駄目か…！

一尾「じゃらくせえッ！」

スゥーと一尾が息を吸い込むと口と腹が膨らんでいく。

千「拙いな…！」

俺は急いで印を結ぶ。

一尾「風遁・鍊空弾！」

千「水遁・爆水衝波！」

一尾は口から真空大玉とも比べ物にならない程の真空の玉を吐き出した。

俺は、体内で超大量のチャクラを変換した水を吐き出す。

大量の水とチャクラが練り込まれた空弾がぶつかり合って弾けた。

水が飛び散り、風が巻き起こる。

千「まるで嵐だな…！」

俺が吐き出した水は、大地を覆いつくし、小さな湖のようになってしまった。

一尾「連弾砂時雨エ！」

宙に浮かせていた砂の爪から砂の弾丸が雨のように襲ってくる。

鳳を動かして回避するが止む事のない砂の弾丸に鳳が打ち抜かれる。

千「うおっ！」

そして飛ぶ手段を失った俺は落下するが、空中で体制を直し、足にチャクラを放出して水の上に立つ。

千「水遁…」

一尾「喰らいやがれ！」

俺が印を結ぼうとすると、宙に浮いていた一尾の腕が俺に向けて加速する。

千「水龍弾！」

だが俺の術で生み出された水の龍は、一尾の腕とぶつかり合い、互いに弾き飛ばされた。

千「このままじゃジリ貧だな……」

いくら俺でも無駄にチャクラを消費する訳にはいかない……！

千「多重影分身の術！」

俺は一気に数百人に分身する。

一尾「あア！？」

千「いけっ！」

そのまま一尾を囲むように移動し、全員で飛び掛る。

一尾「ちょこまかとッ！」

体全体から一気にチャクラを放出して、俺の分身を吹き飛ばす。

千「ぐあっ！」

俺の分身は次々に消えていく。

千「ぐっ…化け物だな…」

一尾「死ねエええええええ！」

再び口から息を吸い込んで口と腹が膨らんでいく。

千「な、何てチャクラだ……!？」

一尾「風遁……！」

千「攻撃範囲が広すぎる…回避が…」

この術は間違いない……原作では使っていないが最強クラスの術だ！

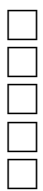
一尾「鍊空閃！」

口から放たれたのは、視界を覆いつくす程の巨大な竜巻。

それも相当な量のチャクラを練りこんである……！

千「ぐあああああああつ！」

その竜巻は、容赦なく俺を飲み込んだ…。



視点・愛紗

愛紗「状況はどうなっている!？」

私は近くにいた兵士に問いかける。

兵「はっ! 住民の避難はほぼ完了しました! 町に入り込んだ人形の数はおよそ40! ですが兵士では相手になりません!」

そう、急に町の外れに巨大な狸が現れたと思ったら町にはあの人形が襲い掛かってきた。

奴らは強く、兵では何十人でもかかっても1体も倒せていないらしい。

私ですら、さっきやっと3体倒した所だ。

そして、住民や文官、ご主人様や桃香様や朱里、雛里は城の中に避難している。

こんな時に…千殿は一体どこにいる?

愛紗「住民の避難所を固めろ! 私は倒れている兵の救出に向かう!」

兵「はっ!…ぐはっ!？」

だが、その兵士は、後ろから胸を刺され、血を吐いて地面に倒れた。

愛紗「なっ! 大丈夫か!？」

だが、返事はない。兵士が立っていた場所を見ると、そこには4本

腕で、黒い布を羽織り、目が3つある人形が、いた。

その人形の4本の腕の手首からは、毒の塗られた短刀が飛び出していた。

愛紗「このっ！」

私は怒りに任せて青龍偃月刀を薙ぐが、人形はスッと飛び上がって、建物の屋根に降りた。

その屋根には、以前、私を人質として使った妖術師であり、この人形達を操っている男…名は確か…大然。

大然「フフフ…この傀儡人形、カラスを嘗めないで下さいよ？普段使っている複製品とは訳が違いますからね…」

愛紗「大然！貴様、一体なにをするつもりだ！あの化け物もお前の仕業なのか！？」

大然「邪魔者を片付けているだけです。あれは一尾の守鶴…つまり化け狸ですよ…奴には千さんを始末して貰おうと思ひましてね」

千殿はあの化け物と戦っているのか！？

愛紗「つまり私達は足止めされている訳か…」

大然「ご名答。まあ普通の人間が何千人束になっても尾獣には敵いませんがねえ。さて、お喋りはここまでです。一つ私のカラクリ演劇にお付き合いを！」

そう言うと、先ほどの人形が私に迫る。

私はご主人様や桃香様、千殿の事を気にしながらも青龍偃月刀を握りなおした。

第三十六幕 来襲、一尾！（後書き）

さて、千は一体どうなったのか！？

町はどうなるのか！？

期待せずお待ち下さい。

第三十七幕 反撃開始！（前書き）

一尾とは決着。

続いて大然。

第三十七幕 反撃開始！

一尾「ヒヤハハハハ！殺した！殺したぞォ！この術は俺のチャクラが練りこまれた竜巻を打ち出して敵を風の刃で切り刻むんだよォ！これを喰らって生きてられる訳がねえ！」

暫く吼えている一尾。気分が済んだのか、町に向き直る。

一尾「ククク…さアて…今度こそ町をぶっ壊すか…」

千「独り言か？」

一尾「あァ！？」

一尾はよほど驚いたのか、勢いよく振り返ると顔を歪めた。

千「俺はまだ生きているぞ」

一尾「何故だァ！確かに殺した筈だァ！何故生きている！？」

さて、種明かしの時間だ。

千「あの時…多重影分身はお前を攻撃する為に分身したんじゃない」

一尾「何ィ？」

千「あの分身は、俺の本体を隠す為にしたことだ。だから、さっきお前の術を喰らったのは俺の分身だ」

その間、俺は隠れて隙を窺っていた。

あれだけの規模の術、人間1人に使ったら手ごたえも感じないだろう。

一尾「テ、テメエ……！」

千「それよりも自分の回りに注意した方がいい」

一尾「何ッ!？」

俺は、隠れている間に更に3人、影分身を作り出し、本体を合わせて四方から一尾を囲むように配置している。

千「水遁・水龍彈の術！」

4方向から、多量のチャクラを練りこんだ巨大な水龍を撃ち出し、一尾を飲み込む。

一尾「グオオオオオオオオオオッー!？」

水が晴れた時、そこには体を構成する砂が爛れた一尾の姿があった。

一尾「ゆ、許さねエ……この俺をコケにしやがって……！」

千「まだ倒れないのか……しぶといが、これで終わりだ！」

再び印を結ぶ。この術はかなりの大技だ！

二尾「この俺がア……こんな所でエ
ええええええええええええええええええ

!

千「水遁・大瀑布の術！」

湖になっている地面の水を巻き上げ、それを一気に叩き落すという手順を繰り返す事で、巨大な滝を4方向から一尾に叩きつける。

一尾「ガアアアアアアアアアア……！」

最初は大きな悲鳴を上げていたが、声はどんどん小さくなり、最後には何も聞こえなくなってしまった。

そして術を解除し、全ての水がチャクラに還ると、辺りには、俺達
が戦闘した後が残っているだけで、後は元通りだった。

一尾は力なく地面に倒れ、どうやら氣を失っているようだ。

千「一尾の回収は後だな、大然がいらないという事は町に行った確率が高い…待っているろ、皆…！」

視点・愛紗

愛紗 「ハア……ハア……」

私は、青龍偃月刀を杖にしながら立っている。

体のあちこちに切り傷が出来ていて毒のせいで体が痺れる……!

愛紗「ぐっ…！」

大然「どうしました？これで終わりですか？折角大事に遊んであげたのにもう壊れてしまうのですか？」

愛紗「黙れっ…！」

叫ぼうとしても、毒の痺れや痛みのせいで少し掠れてしまう。

大然「このカラスに塗っておいた毒を麻痺毒にしてあげたんですよ？致死毒なら貴女はとくに死んでいますよ」

横にいる人形のカラスとやらを撫でながらニヤリと笑う。

くそっ…！このままでは…

鈴々「愛紗！」

星「大丈夫か！？」

白蓮「ぼ、ボロボロじゃないか！」

そこへ、3人が私の元へ駆け寄ってくる。3人とも無事だったんだな…。

大然「おや、来てしまいましたか。まあ何も問題はありませんね」

奴は懷から更に2つの巻物を取り出し広げると、煙が上がる。

大然「傀儡人形カラス、クロアリ、サンショウウオ」

そこにはさっきの人形と、黒い布を纏った4本の腕を持ち、頭に2本の角がある人型の人形と、人の体よりかなり大きい4本足の動物のような人形が現れた。

鈴々「新しい人形なのだ！」

星「これも千殿と同じ妖術なのか…？」

白蓮「そんな呑気な事言ってる場合か！来るぞ！」

その声と共に、カラスとクロアリと呼ばれる人形が飛び掛ってくる。

星「白蓮殿は愛紗の護衛を！行くぞ鈴々！」

鈴々「分かったのだ！」

愛紗「き、気をつけろ！」

あの人形達は普通じゃない…！

鈴々「喰らうのだー！」

蛇矛を振ってカラスの腕を切断しようとするが、蛇矛が当たる前にカラスの右腕は肩から外れ、分離する。

鈴々「にゃにゃ！？」

大然「カラクリ演劇…黒秘技・機々断片！」
だんぺん

その腕の付け根の部分から、毒の塗られた小さな仕込刀が飛び出し、鈴々を狙う。

星「させん！」

だが鈴々に刺さる寸前で星の槍である龍牙に弾かれた。

大然「やりますねえ…しかしこれはどうですか？ 黒秘技・旋風戯曲！」

今度は2体の人形が円を描くように回転しながら、カラスは手首の仕込み刀を、クロアリとやはらは4本の腕に直接装着された鋸状のこぎりの刃を振り回す。

星と鈴々はそれぞれの得物を持って迎え撃つ構えた。

星「ハイーッ！」

鈴々「うにゃー！」

上手く反撃の間合いを読み人形達に接近される前に得物で切り裂こうとするが…

大然「甘いですよ…黒秘技・裏回し」

回転していた2体は急に動きを止め、逆に回転を始める。

そのせいで星と鈴々の武器は空を斬り体勢を崩す。

そして2体の人形はそれぞれの刃で2人を切り裂いた。

星「ぐあっ！」

鈴々「うにゃああっ！」

大然「ほう、上手く体をそらしましたね。傷が浅いですが毒は十分ですね。じきに動けなくなりますよ」

またニヤリと笑う。こんな奴に星と鈴々まで…！

大然「まあ動けなくなれば容易く殺せますし…公孫賛殿如きでは私の傀儡を倒すのは不可能…ならせめて纏めて葬ってあげましょう」

すると今まで後ろで待機していたサンショウウオと呼ばれた大きな人形の口が開いた。

そこには、何か金属製の筒があり、その部分がどんどん赤く染まっていく。

星「ま、拙い…！」

鈴々「体が…痺れるのだ…！」

白蓮「くそっ…私は…！」

愛紗「こんな…ところで…」

大然「終劇です。黒秘技・三大悲劇！」

更に赤く染まり、とてつもない何かが放たれる直前、そのサンショウオの上に何かが落ちた。

そして落ちてきたそれは、拳を握るとサンショウオに叩きつけると、サンショウオはバラバラになって吹き飛んだ。

その拳を叩き付けた人物は…

千「終劇にはまだ早いんじゃないか？」

大然「折角いい所でしたのにね…」

千殿…！無事だったのか…良かった…。

千殿に任せれば…きっと何とかしてくれる…。

そう思い、私は動かない体を鞭打って後ろに下がった。

□□□□□

視点・千

鈴々「千のお兄ちゃん…！」

星「千殿…」

愛紗「千殿！」

白蓮「千！」

千「すまない、待たせたな」

どうやら白蓮以外毒を喰らっているみたいだが…傷が多い愛紗が無事って事は致死性の毒じゃないな。

千「白蓮、皆にその薬を飲ませろ。多少解毒ができる筈だ」

そう言って俺はビンに入った薬を投げ渡す。

この薬は、以前俺が針で受けた毒を取り出して解析し、作っておい
た解毒薬だ。

同じ毒じゃないかもしれないから効くかは分からんが無いよりはマ
シだろう。

その薬を受け取ると、皆はそれぞれ後ろに下がった。

さあ、こちらに集中だな。

千「終劇かどうかは俺を倒してから決めろ」

大然「そうですね。一尾は貴方に傷1つつけられなかったようです
が…まあいいでしょう。チャクラは多量に消費しているみたいです
し」

気づかれたか…。今言われた様に、俺は最近の戦いや、一尾との戦
闘でチャクラが残り少ない。

全開時の2割にも満たない。これ以上傀儡を出されるのは拙いが…

千「お前を倒すのには十分だ」

大然「試してみますか？」

暫くの沈黙の後、大然が指を動かすと、本物のカラスとクロアリが俺に向けて刃を光らせた。

千「はっ！」

左手で背の首切り包丁を抜いて薙ぎ払う。

だが、カラスとクロアリの動きがピタリと止まり、その斬撃を回避すると、再び俺に突っ込んでくる。

千「遅い」

だが俺は右手で草薙の剣で向こうの間合いに入る前に切り刻んだ。

時間差による2段攻撃だ。

大然「やりますね…こうなったら奥の手で行きますか…」

新たな巻物を取り出し、開く。

ボンツと煙と共に現れたのは1体の傀儡。

黒い髪に黒い衣…右腕は袖に通さず襟から出ている。

千「三代目風影か」

大然「ご名答。それでは行きますよ」シュカカと糸が付いて稼動する音が聞こえる。

そして右袖の奥から台形の形をした剣が現れ、左袖からは歯車状の刃が現れる。

俺は左手の首切り包丁を肩に担ぎ右手の草薙の剣を逆手に持ち、構える。

大然「ソォラッ！」

先ほどの2体とは比べ物にならない速度で接近し、右腕の刃を突き出す、草薙の剣で弾き、首切り包丁を振り下ろす。

大然「おっと！」

傀儡の体を傾け、首切り包丁をかわし、今度は左腕の歯車を回転させながら振り下ろす。

それを俺は草薙の剣で受け止める。

暫く火花が散っていたが、強度の差で、歯車の刃はボロボロになってしまい、使い物にならなくなっていった。

千「ハアアアアッ！」

首切り包丁を横に薙ぐと、三代目風影は、右腕の剣で防ぐが、腕力と強度の差で、剣は折れ、三代目風影は吹き飛んでいき、家の壁を突き破って止まった。

大然「流石：早いところコレを使いますか。砂鉄結集・五寸釘！」

さっき三代目風影が突っ込んだ家の壁の穴から黒い大きい釘のような物が飛んできたので、それを回避する。

千「これは…」

俺が回避した釘は、地面に深々と突き刺さっていた。

これは名の通り砂鉄で出来た釘だ。

三代目風影は砂鉄を自在に操る術を扱ったな…金属系の武器は効かないな。

俺は草薙の剣と首切り包丁を収める。

大然「おや、諦めましたか？」

千「冗談言うな！」

大然「ですよね…！」

俺は千鳥の印を結び、左腕に雷を宿す。

三代目風影は、引き寄せられるように大然の元へ戻り、砂鉄でブロツク状の物を作ら上げた。

大然「砂鉄結集・大金鎚！」

千「千鳥流し！」

ブロック状の砂鉄は、俺が地面に流した千鳥の磁力に引き寄せられて地面に落ちる。

大然「何っ!？」

驚いて隙が出来た!この隙に俺は一気に三代目風影に接近し…

千「桜花掌！」

腕にチャクラを溜め、直撃する瞬間に開放。怪力を発揮し、殴る。

殴られた三代目風影は、吹き飛び、家の壁にぶつかり、今度はバラバラになりながら壁を突き抜けた。

千「どうだ…?これで傀儡は尽きたんじゃないか…?」

流石にこれ以上出されるとキツイな…。

大然「…まさか三代目風影をバラされるとは思いませんでしたよ…そろそろ切り札を出しますか」

俺と大然は、お互い1歩ずつ前に出る。

千 大然「終劇にしよう」

暁と傀儡師…終劇は近い…。
フィナーレ

第三十七幕 反撃開始! (後書き)

次回で大然戦終了予定です。

前からちよくちよく言っていた大然の秘密も明らかになります。

第三十八幕 人形が眠る時…（前書き）

決着。

第三十八幕 人形が眠る時…

大然「お目にかけてましょう、私の最大にして最後の傀儡をね」

新たなる巻物を取り出して、広げる。

大然「傀儡人形サソリ」

原作では暁の1人の傀儡師であり、赤砂の異名を取った忍者、サソリ。

自らの肉体を人形に改造し、朽ちない体を作り上げた男。その男の傀儡がそこにあった。

赤い短髪の髪に腹の部分は開いており、ワイヤーロープが収納されている。

背中には、左右に羽のように飛び出したカッター型の刃。

両手の平には、金属製の発射口が見える。

左胸の部分には、蟻とかかれたパーツがあり、背中には4つの小さな巻物を背負っている。

千「今度はそれか」

大然「ええ、ですがそれだけではありません…これが私の最後の…」

そう言って夜の装束の上着を脱ぎ捨てる。

大然「傀儡です」

そこには長い茶髪に、X字型に刃が背中から飛び出ており、腹に小さな4つの縦長の穴が開いていて、口の奥から僅かに金属製の発射口が見える傀儡人形がいた。

千「その体…お前も体を改造したのか…」

大然「その通り、私自身が、最強の傀儡人形です」

これは拙すぎるな…サソリに、それ以上の人傀儡とは…。

大然「さあ、始めましょう！終劇をね！炎天大突破！」

そう言って指を動かすと、サソリが腕を持ち上げ、俺に向けると手の平の発射口から炎弾が飛んで来る。

千「くっ！」

思ったより速いな…！何とか飛んで回避すると、今度はサソリの腹のワイヤーロープの先端に付いている剣が迫る。

千「ちいっ…！」

ワイヤーの剣は、俺の顔を狙っていたので、顔だけ背けて回避するが、剣は後ろの地面に刺さり、それを手繰り寄せてサソリは俺に接近してきた。

背中にあるカッター型の刃は、回転しながら俺を切り刻もうとして

いる。

未だ空中に浮いている俺の体を捻り、ワイヤーロープを掴む思い切り引っ張って逆に引き寄せると同時に、地面に足を付け、体勢を戻す。

千「桜花掌！」

大然「分離！」

俺はチャクラを溜めた拳を突き出すが、サソリの体はバラバラに分解し、俺の拳をかわした。

千「なっ…!!？」

そして分離したと思えば、俺の真後ろに回りこんで再び組みあがると、背のカッター型刃を俺に突き出す。

それも後ろに飛んでなんとかかわす…!

大然「それで避けたつもりですか？」

千「っ！」

俺の後ろには手の平から毒の塗られた小刀が突き出ている手を振りかざしている大然。

大然「はあっ！」

千「ぐあっ！」

何とか右腕を斬られただけで済んだが、酷い痛みが俺を襲う。

千「うぐっ…！毒が…」

大然「この仕込み刀に付いているのは麻痺毒ではありませんよ？あと数分で動けなくなり、明日には死にますよ？」

千「ならあと数分でお前を倒すだけだ…」

大然「できますかね？」

余っていた解毒薬を飲むと少しだけ体が楽になる。

大然「おや、解毒しましたか？でも痺れはすぐには取れませんよ」

千「言っている。風遁…真空波…！」

印を結んで息を吸い、勢いよく吐くと、真空の刃が大然を襲うがそれをあっさりと回避する。

大然「フフ…大秘技・時雨手裏剣！」

大然の腹にある穴から、雨のように手裏剣が発射される。

千「体が…！くそっ！」

痺れる体を無理矢理動かし、草薙の剣を抜刀すると、降り注ぐ手裏剣を弾き飛ばす。

大然「ソォラッ！」

そして後ろから来るサソリは、カッター型の刃で俺を切り刻もうとするが、何とかそれを草薙の剣で防御する。

しかし勢いに負けて、草薙の剣は俺の手から弾かれて地面に突き刺さる。

だが、俺もサソリの体を蹴り飛ばすと、少し吹き飛んだが、大然の隣に降り立った。

大然「しつこいですね…少々勿体無いですが、奥義でかたをつけますか」

そう言うのと、サソリの背負っている巻物を1つ取り出し、開くとそこから赤い衣を纏った傀儡が飛び出す。

その数は100。

サソリの右胸の部分が開き、そこから無数のチャクラ糸がブワッと広がり、傀儡にくっつく。

大然「さて今度は…」

サソリが背負っている巻物をもう1つ広げるとそこからは白い衣を纏った傀儡が飛び出す。

その数100。

今度は大然の右胸が開き、同じようにチャクラ糸が飛び出して傀儡

に付く。

大然「大赤秘技・二百機おおあかの操舞演！」

おいおい…！大然とサソリが100体づつ操っているのか…！

大然「行きなさい！」

近くにいる傀儡から、俺に向かって突っ込んでくる。

俺は背の首切り包丁を抜いて片っ端から傀儡を切り裂いていく。

千「数が多すぎる…！」

オマケに残りのチャクラも…

突然、俺の膝がガクリと下がる。

千「ぐっ…！」

何だ…？もう毒が回ってきたのか？解毒した筈だぞ…！？

大然「フッフ…ここの所の疲れが今になって出てきたようですねえ…では、これにて終劇です」

ぐっ…確かに休みは少なかったがよりによって今か…！

傀儡達が勢いをつける為に少し後ろに下がると、一気に俺に突っ込んでくる。

千「カアッ！」

体を無理矢理動かし、目の前に迫る傀儡の刃を防ぐ。

だが俺の回り、360°から傀儡が迫ってくる。

これは防ぎきれん…！

だが、俺の死角を囲むように、4人の人物が立つ。

愛紗「千殿！」

星「大丈夫ですか？」

鈴々「千のお兄ちゃんを苛めるなー！」

白蓮「私だって…！」

それは、さっきまでは後ろに下がっていた皆だった。

恐らく、さっきの解毒薬が効いたのだろう。

そして皆は、それぞれの武器で傀儡達が持つ武器を防いだ。

千「お前等…」

愛紗「お手伝いします！」

…確かに、今の状態でこの数を相手にするのはキツイ。

千「死ぬなよ」

一言だけ言うと、俺は傀儡を弾き返し、サソリへと走り出した。

千「回りの奴は頼むぞ！俺は本体を潰す！」

残りの少ないチャクラを使い、写輪眼を発動する。

更に千鳥の印を結び、千鳥鋭槍を作り出し、傀儡を切り裂いていく。

愛紗「はっ！はぁー！」

星「ハイハイハイーツ！」

鈴々「うりゃー！」

白蓮「でやっ！」

それぞれの武器を使い、次々に傀儡を叩き落していく。

恐らく、数が多い分、傀儡の扱いが雑になっているのか、簡単に倒していく。

そしてサソリはがら空きの状態になった。

首切り包丁を振りかぶり、縦に振り下ろすと、サソリの体は縦に真っ二つになるが、左胸にあった蟻と書かれたパーツ、あれが本体であるが、傀儡を壊された瞬間に飛び出し、別の傀儡に取り付こうとする。

千「逃がすか！」

咄嗟にクナイを取り出し、投げつけると、本体のパーツに突き刺さり、地面に落ちる。

そして赤い装束を纏った傀儡達は力なく地面に落ちていった。

大然「くっ…ですがまだ100体いますよ！」

まだ残っている傀儡が、全員に次々襲い掛かる。

だが、俺は写輪眼で動体視力が上がっているので傀儡達を潜り抜け、大然に襲い掛かる。

大然「くそっ！これはどうですか！？」

口の奥にある発射口から炎を吐き出す。どうやらあれは火炎放射機になっているようだ。

千「甘い！」

首切り包丁を回転させ、竜巻の要領で炎を巻き取って回避する。

大然「何っ！？」

千「喰らえ！」

首切り包丁を振りかぶり、薙ぎ払うと、大然は咄嗟に腕で防御するが腕が斬り飛ばされ、吹き飛んだ。

千「…まだ終わらないか」

あの大然の体も傀儡。本体を破壊しない限り、動き続ける。

予想通り、大然は腕がないが立ち上がる。

大然「まだ…終わりませんよ…終劇には…まだ早い！」

千「…いや、もう幕引きだ」

そう言った直後、ドツと音が響き、大然の腹の真ん中を貫いた。

大然「がはっ…！？ほ、本体が…！？」

そう、大然の本体は、腹の真ん中にある。

さっきまで地面に突き刺さっていた草薙の剣が刺さっているのだ。

刃の先端には、チャクラ糸が付いている。

そのチャクラ糸は、俺の指先についている。

回りに残っていた傀儡は、全て地面に落ちていった。

大然「な、何故…」

千「俺は…あらゆる術を使う事が出来る…傀儡の術も例外じゃない」

大然「なら何故…！私の本体の場所が…分かったのですか…！？」

簡単な事だ。

千「俺のこの眼…写輪眼はチャクラを見切る。これでお前の本体の場所を見切ったに過ぎない」

大然「……………い、いやだ…！私は…！まだ…！」

そうは言っても確実に本体を貫いた。決着はついた。

大然「イ、イ…ヤ…ダ…！」

そう言っていると、大然の傀儡の体は、どんどん塵になっていく。

千「お前…！体が…！？」

大然「キ、キ…エ……………ル……………ノカ…！？」

千「待て！消えるな！」

だが俺の声は届かず、そのまま大然は塵となって消えてしまった。

千「何故消えるんだ…？」

俺の頭の中は疑問で満ちていたが、考えるのも疲れて、その場に座り込んでしまった。

愛紗「千殿！大丈夫ですか！？」

心配してくれたのか、皆が駆け寄ってくる。

千「ああ、少し…疲れただけだ…だから、少し…寝る…」

その一言と共に、俺は眠りについた。

□□□□□

ん…ここは…？

パリン！

千「うおっ！？」

急に何か割れた音がしたので慌てて起き上がる。

愛紗「ご主人様！もう少しゆっくりと運ばなければ…！」

一刀「ご、ゴメン！」

桃香「あ、千さん起きた？」

千「あ、ああ…」

目を覚まし、辺りを見渡すと、ここはどうやら白蓮の城の中で、俺に割り振られた部屋だった。

部屋には、桃香、愛紗、鈴々、北郷がいた。

さっき何か割れた音は、北郷の持っているお盆から湯飲みが落ち

て割れた音だったらしい。

千「俺はどのくらい眠っていた？」

鈴々「にゃ？千のお兄ちゃんが寝てまだ2日しか経ってないのだ。
千のお兄ちゃん、凄く丈夫なのだ！」

そう言って俺の腰に抱きついてくる鈴々。

愛紗「こら鈴々！千殿に抱きつくな！また倒れるかもしれんのだぞ
！」

心配してくれるのは嬉しいがゆっくりと眠ってチャクラも大体回復した。もう倒れる事はないだろう。

千「いや、大丈夫だ。倒れたのは力を使いすぎたからだからな。もう大分回復した」

愛紗「そうですか、安心しました…」

そう言えば…

千「白蓮と星と朱里と雛里は？」

桃香「今町の復興をしているよ。人形さん達との戦いで壊れちゃった建物も多いから…」

復興作業か…俺の出番だな。

千「俺も手伝ってくる」

桃香「だ、駄目だよ！まだ休んでないと…！」

愛紗「桃香様の言うとおりです！今は体を休めてください！」

千「俺の術を使えば10秒で復興が終わるぞ」

その言葉に、皆黙り込んだ。

千「じゃあ、少し行ってくる。…そういえば、あの化け狸はどうなっている？」

愛紗「気絶しているようですが、あまりに巨大で運ぶ手段もないので白蓮殿が見張りを配置して管理しております」

そうなれば交渉して一尾の身柄を何とかこっちの物にするか。

封印しないとな。暁にも連絡をつけないとな。

千「じゃあ行ってくる」

愛紗「わ、私も行きます！」

桃香「なら私も！」

鈴々「鈴々も行くのだ！」

一刀「じゃあ俺も…」

何だ、結局皆来るのか。

□□□□□

白蓮「で、作業を一旦止めて皆をここに呼んだのは何でだ？」

今白蓮が言った通り、この周辺に作業に参加していた皆が集まっている。

千「見てれば分かる」

印を結んで右手を地面につける。

千「木遁・連柱家の術」

地面からモコモコと木が次々に生え、形を成す。

あっという間に崩れていた家は新品の木造の家に建て変わった。

続いて印を結び、今度は両手を地面につける。

千「土遁・土平つちだいらの術」

デコボコになっていた地面は蠢うごめくと瞬く間に平らな地面になった。

この術は俺のオリジナル。さっき考えた土の状態を操る術だ。

この光景を見て、皆暫く啞然としていたが、気を取り戻すとワッと歓声を上げた。

白蓮「まさかここまでとはな…」

朱里「凄いです!」

雛里「さ、流石です!」

星「フッフ、千殿ならこれ位は当然ですな」

まあ、これで元通りだ。

だが、少しやり残した事があるか…。

千「なあ白蓮、少し頼みがあるんだが…」

□
□
□
□
□

白蓮「寂しくなるな…」

千「そう言うな。一尾の件は感謝している」

復興から2日、俺と北郷達は新たに旅立つ事になった。

だが一緒にではない。

愛紗「千殿、本当に一緒に来れないのですか？」

千「ああ、少し野暮用があつてな」

鈴々「千のお兄ちゃんがいないと詰まんないのだ…」

千「むくれるなよ鈴々。また会えるさ」

いずれ反董卓連合でな。

桃香「本当ですか？」

千「ああ、お前達が信念を曲げなければだがな」

朱里「私達、絶対に諦めましえん！…あう／＼／」

雛里「そ、そうですだから桃香様達について行くってきまたんでしゅ…うう／＼／」

星「私としては千殿と共に行きかけたのですが…致し方ありませんな」

この3人には俺が桃香達について行くように頼んだ。

少し渋っていたが了承してくれた。

千「じゃあな北郷。元の世界への足がかりはこちらでも調べておく」

一刀「ありがとう、頼むよ」

こいつはただの事故でこの世界に来たようなものだ。

帰り道を探すくらい協力してやってもいいだろう。

俺はそれぞれ別れを告げると起爆粘土で4頭の竜を作り出す。

千「C2竜^{ドラゴン}」

その大きさは、体高7m程、体長は15m程だ。

その4頭の体にロープを付け、その先を一尾に繋ぐ。

一尾は、俺が責任を持って処理すると言ったら白蓮はあっさりと任せてくれた。

千「じゃあな皆、また会おう」

俺は竜の1頭の背中に乗ると飛び上がる。

一尾の体も宙に浮き上がる。

下を見ると、桃香達が手を振っている。

俺はそれを確認すると竜達の速度を上げた。

人形は眠る…そして暁は新たなる旅路へ…。

第三十八幕 人形が眠る時…（後書き）

新たな旅路…つっても次は魏です。

凧達も出ます。

魏編でこんな話が見たい！というリクエストがあれば是非感想に書いて下さい。

全部は無理ですが一部は書いてみたいと思います。

第三十九幕 統一計画（前書き）

統一計画の全貌。

第三十九幕 統一計画

千「さて、ここらでいいか」

俺は人目を避けてとある大きな崖の下に来ていた。

幽州の海辺の端。俺の背後は波が岩に当たって音を立てている。

千「土遁・岩宿崩し」

印を結び、手を地面につけると地面が揺れると目の前の崖の一部が崩壊する。

その崩壊した場所は、中にもポツカリ穴が空いている。

かなりの大きさで、一尾ですら簡単に入ってしまう。

だが地面は崩れた岩が落ちていてデコボコしている。

千「土遁・土平の術」

その岩も、術で土に同化させて地面を平らにする。

俺はC2竜を操作し、一尾を洞窟の中に入れると、続いて印を結ぶ。

千「土遁・土陵団子」

そして印を結ぶと穴の入り口より少し大きめの岩を持ち上げると、それを入り口の前に置く。

更に術式を組み込んだ封と書かれた札を上の方へ貼り付ける。

千「影分身の術」

俺は5人に分身し、分身である4人はそれぞれ封と書かれた札を持って、四方に散った。

これは、五封結界と呼ばれる結界で、この封と書かれた札を別々の場所に貼り付けて発動する結界忍術。

これを解く為には5枚の札を全て剥がさないとならないが、この入り口の札以外にはトラップが仕掛けてあり、剥がした者の偽者が現れて足止めをする事もできる。

そして俺は自分の右腕を捲くり、札の封と書かれた部分に押し付けてグリッと回すと岩は横にずれていった。

俺は岩から降り、穴の中に入ると、再び岩は元の場所に戻り、入り口を塞いだ。

千「暗いな…」

俺はある札をクナイに取り付けると天井に向けて何本か投げつけると、クナイは天井に刺さり、取り付けた札は輝きだした。

この札は閃光札。

雷遁の術を応用させて作った。

一定時間経つと輝きだし、閃光弾のような一瞬の眩い光を放つものもあれば、こうして電灯のように使える物もある。

C2竜に一尾を降ろさせ、竜は起爆粘土に戻り、俺の腰のポーチへ戻った。

千「準備は整ったな。口寄せの術！」

指先を少し噛み切り、口寄せを行うと、猿太とゼツを呼び出した。

猿太「うおっ！？…何だ、千か」

白ゼツ「何か用？」

千「少し連絡が取りたかった。あれを見てくれ」

俺は顎で一尾を指すと、2人は驚いた表情になった。

黒ゼツ「一尾…？何故ココニ？」

千「つい最近、俺は夜の1人と戦闘を行って、勝った。その夜の1人が連れて来たんだ」

猿太「で、これが何？」

千「夜や他のイレギュラーに渡さないように封印する。コイツでな」

俺は印を結び、さっきの血を手の平につけて地面に付ける。

千「口寄せ・外道魔像」

すると、地面から目の塞がれた化け物の像が現れる。

更に両手を上に向けて広げている。

猿太「おいおい、外道魔像かよ…これを使うのか？」

千「そう言ってるだろ。これを指に嵌めろ」

俺は自分がしていた指輪を外して1つつつ猿太とゼツに投げ渡した。

猿太には右中指の白と書かれた指輪。ゼツには右小指の亥いと書かれた指輪だ。

猿太「何これ？」

千「外道魔像とリンクするための指輪だ。その指と同じ場所に付け」

そう言うと、外道魔像の広げた指に飛んだ。

猿太は右手中指、ゼツは右手小指、俺はまだ8つの指輪を嵌めていたので適当に左親指に乗った。

千「これから3日3晩はかかるから覚悟しておいた方がいいぞ」

猿太「うへえ3日もかかんの？やっぱ止めない？」

黒ゼツ「ウルサイ、黙ッテヤレ」

猿太「へーへー」

皆で印を結び、術を発動する。

千「封印術・幻龍九封尽！」

すると外道魔像の口から薄青い球体が出現し、形を変えて9体の龍になり一尾を包み込んだ。

これで一尾を封印する。3日間飲まず喰わずでも死にはしないし、終わった後しっかり栄養補給をすればいい。

こうして尾獣の封印は始まった。

□□□□□

3日後

猿太「あー、もうちょいで終わるな」

一尾の姿は殆どなく、もはや形の定まっていないチャクラの塊だ。

猿太「なあ千、この封印が終わったら何すればいいんだ？夜は特に変わった様子はなかったぞ？」

白ゼツ「目ぼしい情報も無かったしね」

そういえばまだ言っていなかったな。

千「俺達の目的…統一計画を第二段階に移す」

猿太「その第二段階って？」

…まあ最後までバラしてもいいか。

千「第一段階は三国の将達と繋がりを持つ事だ。そして第二段階は実際の歴史とは別の歴史を作る事だ」

猿太「じゃあ何だ、死ぬはずの人間を助けたり戦に参加したりするのか？」

千「ああ。その過程で金も集めて欲しい」

猿太「金え？何でそな物？億万長者にでもなるのか」

話を聞けと言っているのに…。

千「順を追って話す。まずこの世界はもうじき魏、呉、蜀の三国が現れて強大な勢力となって大陸に広がる。勿論その為の軍事力が必要になる」

猿太「そりゃ分かるが…」

千「軍は戦で勝つためには絶対に必要なものだ。だが同時にその保持には莫大なコストがかかる。武器然り防具然り兵糧然り、戦いに勝つには多大なリスクがある」

良い武器が無ければ敵を倒せないし良い防具が無いとすぐに死ぬ。そして良い兵糧がなければ士気が下がる。

千「その為にはそれらを買う為の金がいるが：金を俺達暁が集めて世の経済を不況化させる」

猿太「そんな事してどうするんだよ？」

千「つまりだ、金が無ければ大きな戦をする事も出来ない。俺達暁が戦争の規模をコントロールするんだ」

俺達の思いのままにな。

千「小さな戦ばかりが続き、更に不況により兵に支払う金も少ない。貰える金が少ないのに命がけの職に就く奴は少ない。軍は縮小される。それに不況のせいで黄巾党のようにちらほら賊も出てくるだろう」

猿太「そんな事したら更に世が荒れちまうじゃねえか」

千「そうだ、戦いに次ぐ戦いが起こり各国は疲弊する。そしてその疲弊が限界に達した時、各国に繋がりを持つ俺達暁が仲介して三国同盟を作り上げるんだ」

猿太「成る程ね、それが統一計画の全貌って事か」

納得した表情の所悪いがまだ続きがあるんだな。

千「まだだ、ここまでが第二段階だ。最終段階が残っている」

猿太「へ？まだ何かするの？」

千「俺達の持っている金を世に広めて経済を元に戻した後、夜を駆

逐する」

これは必須条件だ。

猿太「あ、そういう事」

千「そしてその後、経済が元に戻ったら同盟が解消される恐れがある…そこで、俺達暁が三国に戦いを挑む！」

猿太「ハァ!？」

ゼツ「…？」

千「俺達の力をよく知る三国の者達はこれにより一致団結する。そしてその戦いに俺達が敗北する事により三国は互いを信頼し三国同盟はより強固な物になる。これが統一計画だ」

猿太「負けた俺等はどうなの？」

それもしっかり考えてある。

千「その後は猿太、お前が暁を率いてゼツと共に忍の才のある者を育てろ。そうしてこの大陸の平和を影から見守る暁を維持するんだ」

猿太「…お前は、どうするんだ？」

千「……………」

黒ゼツ「千、オ前マサカ…」

そこまで言った所で、一尾の封印が終わった。

千「ここまでだ。俺が言った通り、金を集めると同時に夜を倒してく。それから死ぬはずの奴らにも目をつけておけ」

俺は外道魔像の指から飛び降りて出口に向かう。

千「それからその指輪には俺なりに改造を施して置いた。少量のチャクラを込めれば指輪を持っている奴と通信ができる…何か用がある時はそれを使え」

俺は出口の岩を開けると外に出、起爆粘土で梟を作り出し空に羽ばたく。

千「…誰かがしなければならんだ…そう、俺が――」

俺の声は、風に消えた。

第三十九幕 統一計画（後書き）

まあこんな感じですよ。

なんか悪役っぽいですねえ。

ま、ハッピーエンドになる予定ですが…自分バッドエンド嫌いなんです。

次回より魏編です。リクエストがあればどうぞ。

第四十幕 暁に舞う三羽烏（前書き）

視点がコロコロ変わってしまう四十幕になりましたとき。

第四十幕 暁に舞う三羽鳥

バサツと音を立てて飛行する梟。

あ、因みに今の俺は仮面と笠を身につけている。

既に一尾封印から1週間が経ち、俺はまた陳留付近を飛んでいた。

何故かと言うと、大きな町の近くなら沢山の情報がはいるからだ。

それに、その付近の村で黄巾党を討伐し、金目の物を現金に変えるという事を繰り返し、既に日本円で200万は回収した。

猿太やゼツも同じ事を行っているだろう。

そして金は、俺が担いでいる袋の中に入れてたが、時空間忍術で別空間に保管しておいた。

千「次の村で降りるか」

暗くなる前に町か村で宿を取る事に決めた。

夜が何か目立った動きを起こすまではそう急ぐ必要も無いだろう。

千「ここらでいいか…」

近くに村を見つけ、梟を外れに降ろして起爆粘土に戻し、村へ向かう。

そういえばここは随分と陳留に近い村だと思い出す。

だが、俺の前に1人の女が立ちふさがる。

銀色の髪を背中中で三つ編みにして体中に傷跡のある女だ。手にはナックルを取り付けている。

女「待て！貴様、何者だ！？」

千「…そう言うお前は？」

女「私は今、貴様に聞いているんだ！答えろ！まさか黄巾党の仲間じゃないだろうな？」

…黄巾党は黄色い布を巻いている筈だが俺は巻いていない。まあ怪しい格好なのは認めるが。

千「違う、俺は旅人だ。この村で今夜泊まろうと思ったただけだ」

女「嘘を付くと自分の為にならんぞ…？」

拳を握り締め、構えを取る。とゆーか随分と頭が堅いな、もう少し柔軟性を持たせろ。持たせすぎると猿太みたいになるが。

千「嘘を付く理由が無いと思うが」

女「今この村に向かっている黄巾党の斥候ではないのか？」

黄巾党がこの村に近づいて来ているのか…だからここまで警戒しているのか。

千「どうしても信用してくれないのならここは下がるとするか…」

女「待て！簡単に逃がすと思うな！」

相手にするのも面倒なので瞬身の術で梟を待機させておいた場所まで一瞬で移動する。

そして俺は梟の背に乗り空へと羽ばたいた。

千「このまま黄巾党を殲滅してもいいが…あの女の実力が気になるな…」

そう、さっきの女はそこそこの力を持っている。三国の将かもしれないし実力を把握するいい機会だ。

千「やばそうだったら手伝えばいいか」

そう決めて、今夜は野宿する事にした。

□□□□□

次の日、俺は梟に乗り空から先日の子の義勇軍と黄巾党の戦いを見ていた。

戦況はどうやら義勇軍が押されているようだ。

指揮官は義勇軍の方がいいが、やはり訓練を受けていない義勇軍では数で押し切られる。

数は義勇軍が1000強、黄巾党が5000程度だ。

千「さて、これを試す日が来たな」

巻物を1つ取り出して広げると、現れたのは大然の使用していた傀儡の1体三代目風影だ。

大然を倒し、白蓮が廃棄しようとしていたのを貰い受けて直した物だ。

左指先からチャクラ糸を取り付け、右手で草薙の剣を抜く。

千「やるか」

三代目風影を操作し、共に地面へ落ちていく。

着地の瞬間、中々大きな衝撃が足を奔ったが問題はない。

黄巾党1「な、何だコイツ等!？」

急に落ちてきた俺に動揺しながら、武器を構える黄巾党。

千「行け」

三代目風影を操作し、右腕の袖から台形型の剣が現れて、黄巾党を切り裂いた。

黄巾党2「ぎゃあっ!」

黄巾党3「なっ!?!こ、この野郎!」

千「砂鉄界法!」

三代目風影の内部に収納していた砂鉄を口から放出し、圧縮させた球体を空中に飛ばし、そこから無数の巨大な砂鉄の針を出現させる。

その針は辺りの黄巾党を貫き絶命させる。

1撃では死ななかった者も、砂鉄に染み込ませてある毒ですぐに息絶えるだろう。

黄巾党4「な、何だコイツ!」

黄巾党5「気をつけろ!コイツ、妖術を使うぞ!」

空中で待機させていた梟の高度を下げる。

千「喝!」

梟は大きな爆発を起こし、傍の黄巾党達は吹き飛んでいった。

すると、向こうの方も騒がしくなってきた。

何だと思ってそちらを見ると、曹と書かれた旗が見えた。

千「…久し振りだな、華琳」

自然と口の端が吊り上る。

千「一気に決めるか。砂鉄結集・大手裏剣！」

砂鉄を集めて直径2 m程の大きな手裏剣を生み出して黄巾党を真っ二つにしていくな。

これで俺の回りにいた黄巾党は大体片付いた。

どうやら南側が苦戦しているようだな…そっちの援軍に行くか。

俺は三代目風影を操作しながら南側に向けて走り出した。

□□□□□

視点・風

私の名は楽進。真名を風と言う。

私は今、村に近づいてきている黄巾党と義勇軍を率いて戦っている。

だが数が違い過ぎる…援軍に陳留の曹操様も来たみたいだがこの南側はもう駄目かもしれん…！

真桜「風！」

こちらに走ってくる人影…紫の髪を結んでいて露出の高い服を着て、カラクリの槍を持っている…私の仲間、李典、真名を真桜だ。

風「真桜か！どうした？」

真桜「東側の敵が壊滅したで！」

凧「何っ！？どういう事だ！何があった！？」

真桜「う、ウチもよう分からんのだ。兵の話やと黒地に赤い雲模様の服に犬の仮面をつけて笠を被った男と黒服の男が現れて妖術で一気に倒したとか…」

黒地に赤い雲模様…犬の仮面に笠…き、昨日の旅人か！？

ほ、本当に黄巾党じゃなかったのか！？それに妖術ってあの急に消えたあれか…？

真桜「っ！凧！後ろや！」

凧「はっ！？」

しまった…！気を取られて後ろを…！

黄巾党5「死ねえっ！」

間に合わないっ…！そう思い、思わず目を瞑る。

死ぬのか…？嫌だ…死にたくない…まだ生きたい！

黄巾党5「ぐあっ！？」

…え？

仮面の男「戦場ではしっかりと前を見ていないと死ぬぞ？何時でも

助けてはやれんぞ」

目を開けると、そこには昨日私が追い払ってしまった旅人が右手で持つ細い剣で黄巾党を斬り捨てた姿があった。

凧「あ、貴方は…」

仮面の男「まだやれるか？」

凧「は、はいっ！」

仮面の男「なら戦え。俺も手を貸そう」

そう言うと、その仮面の男は傍にいた黒い服を纏った男を傍に寄せた…ってこの男浮いている！？

真桜「…」

真桜も気が付いたのか唾然としている。

千「お前も何をしている？戦えないなら下がった方がいいぞ？」

真桜「はっ！？だ、大丈夫や！」

凧「い、行くぞ真桜！」

とりあえず、浮いている男の疑問は頭の隅に追いやって戦いに集中する事にした。

□□□□□

視点・千

援軍の効果もあってか、あの後直ぐに決着がついた。

俺の術や華琳の軍にやられていく仲間を見て1人、また1人と逃げ出し義勇軍が勝利を収めた。

草薙の剣に付いた血を払うと鞘に収めて巻物を取り出して広げ、三代目風影を巻物の中に収めると、その巻物をポーチに入れた。

千「さて、華琳に挨拶くらいはしていくか…」

華琳達が陣を張っている場所に向けて歩き出すと向こうから誰かやってくる。

蒼を基準にしたチャイナ服に短めの藍色の髪…。

千「久しぶりだな、秋蘭」

秋蘭「まさかと思ったが…その声、間違いなく…千、久しぶりだな」

仮面と笠を外し、素顔を晒す。

すると秋蘭は微笑む。

千「どうした？」

秋蘭「いや、嬉しくてな」

そうか、俺も久し振りにあえて嬉しいがな。

千「華琳は？」

秋蘭「向こうの陣でお待ちだ。来てくれ」

千「別にいいが、あいつ等もいいか？」

俺は後ろを振り返ると先ほどの銀髪の女と紫髪の女、あといつの間に来ていたのかオレンジ色の髪をサイドテールにし、さらにそれを三つ編みにしている女がいた。

秋蘭「彼女達は？」

千「義勇軍を率いていた奴らだ。良かったら引き入れたらどうだ？」

秋蘭「成る程：華林様に進言してみよう。お前達！こっちに来てくれ！陣で話がある！」

3人「は、はいっ！」

：そっかいえばあの3人って結局誰なんだ？

□□□□

視点・風

戦いが終結し、喜ぶのも束の間、曹操様の陣に呼び出された。

先ほどの旅人は魏軍の将軍と話をしている。

まさか…あの人は魏軍の将軍と知り合いなのか!?ど、どうしよう
…昨日の事…。

凧「…なあ沙和、あの方、どう思う?」

私は隣にいた于禁、真名を沙和に話しかけた。

沙和「ん…将軍様と話しているし…多分悪い人じゃないと思うの
」

そう、だよな…き、昨日の件で罰せられたりしないだろうか…?

凧「真桜、お前はと思う?」

真桜「…」

一応、真桜にも聞いてみるが返事が無い。

沙和「真桜ちゃん、どうしたなの?」

少し顔が赤く、ぽうつとしている…?

真桜「…今、あの人の素顔見えたやん?」

確かに見えた。仮面と笠を外してこちらを振り向いた時に…か、か
なりの美形だったな…//

真桜「凧…沙和…」

凧「何だ？」

沙和「どうしたの？」

真桜「一目惚れって…あるモンやな…／＼／」

……………えええええ！？

第四十幕 暁に舞う三羽烏（後書き）

たまには一目惚れもいいかと思っています。

次回、華琳と再会して再び魏軍へ。

途中でまた夜の会話も入れたいですね。

第四十一幕 新たな仲間達…！（前書き）

今回は華琳との再会に夜内部の会話。

第四十一幕 新たな仲間達…！

千「久しいな、華琳」

華琳「ええ、まさかこんな所で会えるとは思っていなかったわ」

陣に行くと華琳と春蘭、それと見慣れない桃髪の少女がいた。

俺の後ろには、秋蘭と義勇軍の指揮官の3人が付いてきている。

春蘭「せ、せせせせ千！？何でここに…！？／／／（きゅ、急に来られても何を話せば…！？／／／）」

何故か春蘭は顔が真っ赤になっている。

千「久しぶり、春蘭」

春蘭「あ、ああ…ブツブツ…／／／」

とりあえず挨拶をしておいたが、春蘭は下を向いて何か言っているようだ。

桃髪「…華琳様、この人は？」

華琳「季衣は初めてだったわね。前に話した春蘭と秋蘭以上の武を持つ妖術師、神谷千よ」

完全に妖術師として認識されている…まあ構わないがな。

華琳「で、その子は許緒よ。この間私達の仲間になったの」

この小さいのが許緒？ いや、鈴々も小さかったから別に変ではないか…。

許緒「そっか！ 兄ちゃんが前の話の妖術師かぁ！ 1度会ってみたかったんだ！」

鈴々と同じ位元気だな。

華琳「そういえば千、随分と活躍しているみたいね？」

千「活躍？」

秋蘭「幽州の公孫賛の町に巨大な化け物と数百の人形が現れたが黒地に赤い雲模様の衣を纏った男が撃退し、妖術にて一瞬で町を復興した。という噂が流れ始めているぞ」

：しまったな、今思えば大立ち回りし過ぎたか…。

華琳「その者は幽州に現れた大妖術師として名が広まり始めているわよ。まあ辺境の地にはまだ届いていないかもしれないけどね」

千「目立つつもりは無かったんだがな…」

華琳「フフ…どう？ もう1度私の元で働いてみない？」

千「…客将で良ければな」

金集めは客将をしながらでも出来るし黄巾党の件が片付くまで目立

った武将は死なない筈だ。

黄巾の乱が終わるまで厄介になるか。そうすると張三兄弟…いや、こっちでは姉妹か。

まあともかく情報が必要になるな。

華琳「それでいいわ。その内貴方から志願させて見せるけどね」

千「そうか、期待しないで待っている」

仮に魏軍に入りたいと思っても統一計画を果たすまで、俺は特定の軍に志願する事は無いだろう。

華琳「さて…待たせたわね。そこの3人は？」

秋蘭「はっ！千が言うには義勇軍を指揮していた者との事です」

華琳「貴女達、名は？」

銀髪「は、はいっ！私は楽進と申します！」

紫髪「ウチは李典や！」

オレンジ髪「私は于禁なの」

楽進、李典、于禁は魏の将だったな…確か三羽鳥と呼ばれていたな。

秋蘭「千の推薦で、我が軍に入れてみてはどうかと…」

華琳「そうね…貴女達のおかげでこの町の被害も少なくて済んだ様だし…どう？私の軍の入る気は無い？」

3人はそう言われて少しポカンとしていたが直ぐに気を持ち直した。

楽進「ぜ、是非お願いします！」

李典「こっちからお願いしたい位や！」

沙和「お願いしますなの！」

こうして、魏の軍に俺は再び客将として入る事になり、三羽鳥という仲間も加わる事となった。

□□□□□

視点・リーダー

リーダー「よし、集まったな」

俺はフードで顔を隠し、俺が率いている夜の面々を集めた。

だが、10ある椅子の2つは空席だった。

虎治「…？ 懺と大然がまだだが？」

リーダー「懺には任務を与えている。…大然はやられた」

その言葉に、何人かが反応した。

空「馬鹿な、大然が…？」

リーダー「やったのは暁の頭である千だ。皆気をつけろ」

すると俺の隣に座る黒いボサボサとした髪の方が口を開いた。

ボサボサ髪「それを言うためだけに俺達皆集めた訳じゃないだろ？」

リーダー「相変わらず勘が良いな、翔^{かける}」

コイツは実質、夜の中で俺の次に強い力を持つ男塩原翔^{しおはら}だ。

翔「まあな。それだけなら口寄せ獣使って文を届けるだけでいいしな。で、その話には懺の任務も関係してるんだろ？」

リーダー「ああ、俺達は黄巾党への援助を打ち切った。黄巾党が活動できるのもあと僅か、もうじき反董卓連合が組まれる。その時に暁を一気に駆逐する」

今の懺の任務はそれに関係している。

しかし、向こうに座っている茶色い目が隠れる程の前髪をした男が反論する。

茶髪「反論…」

リーダー「何故だ？^{ひびき}響？」

この男は東雲響^{しののめ}。無口で前髪が見えないから無表情にも見える。

響「尾獣…使役…暁…殲滅…」

相変わらず分かりにくい喋り方だな。まあ分かったが。

響は尾獣を使って暁を一気に倒すと言いたいらしい。

しかし今度は離れた位置に座る長い白髪に白い肌をした男が喋り出す。

白髪「へえ、そんな力が君にあったなんて初耳だよ」

その言葉に反応し、響きがその男を見る。

リーダー「ちしょう血勝、仲間にそんな言い方は止めろ」

今の白い男はおりま檻間血勝。

夜の中では科学者や研究者としての立場を取っており、医術にも長けている。

俺の素顔を知る1人だ。

響「今…貴様…抹殺…」

血勝「ククク…出来るかな？君程度にさ」

リーダー「いい加減にしろ。響、これは命令だ。お前に割り振られた六尾を勝手に使うような真似はするなよ」

椅子から立ち上がり身を乗り出す2人を止める。

響「…了解」

多少不満そうな顔をしていたがこれでいいだろう。

すると今まで黙っていた黒髪のパサ毛の髪をして、左目に眼帯をしている男が口を開いた。

パサ毛「そう言えばリーダーさんよ、残りの尾獣の封印はどうなってるんだ？」

コイツは^{ひひょうおとなし}緋電音無。飄々としていてどうも掴み所のない男だ。

リーダー「空、虎治、翔、血勝、それからお前…尾獣の封印はどうだ？」

お前、と言うのは赤包帯の事だ。

空「七尾の封印解除は約6割まで進んだ」

虎治「四尾も大体6割だ」

翔「八尾はまだ4割かな、と」

血勝「三尾は8割まで封印は解除したよ」

赤包帯「九尾は2割…」

三尾はもうすぐ、九尾はまだ全然だな…四尾、七尾、八尾はもう少し

し時間があるか…。

音無「まっ…たく…俺の五尾の封印解除は終わっているぜ？なにタラタラしてんだか…」

空「うるさい…すぐに終わる」

音無「どうだかねえ？」

挑発的な音無の態度に空は齒噛みしている。

リーダー「そこまでだ。ともかく、反董卓連合が結成されるまで勝手な行動を取るなよ。以上で解散だ」

そう言い残し、俺はその部屋を出た。

□□□□

響「我…敗北…皆無…闘…暁…！」

新たな仲間を加えた魏軍へ入った暁…しかし、新たな敵が近づきつつある。

その名は響、使役するは六尾。

暁と夜は再び対峙する。

第四十一幕 新たな仲間達…！（後書き）

はい、続いて六尾。

戦うのはまだ先ですが。

第四十二幕 警備隊！（前書き）

日常編♪

第四十二幕 警備隊！

猫耳「華琳様、この全身精液男は何なんですか？」

：酷い言われようだ。

陳留に到着して城の中に入ると猫耳のフードを被った女がいきなり
の暴言だ。

千「華琳、彼女は？」

猫耳「っ！？あ、アンタ！何で華琳様の真名を知っているのよ！？」

俺の質問に華琳が答える前に猫耳フードが俺に質問をぶつける。

千「以前ここで客将をしていた頃に真名を預かったんだ」

華琳「桂花、以前に話した妖術師よ。また客将としてここにいる事
になったのよ」

猫耳「そ、そんな…」

相当の男嫌いだな。何か訳があるのか？

千「まあいいか、俺は神谷千。妖術師みたいなものだ」

そう言って試しに手を差し出す。

猫耳「…」

俺から目を背けて黙り込んでいる。意地でも喋らないといった雰囲気だ。

華琳「はあ、桂花。千は信用に値する男よ。真名も預けなさい」

猫耳「で、でも華琳様…！」

千「流石に真名まで預かるのはどうかと思うが？」

それにこれじゃ無理矢理みたいな物だしな。

華琳「私が良いと言ったら良いのよ」

まあ、華琳がそう言うなら俺は何も言わないが。

猫耳「…華琳様が仰られるなら預けるけど…気安く呼ばないでよ！私に荀？、真名は桂花よ」

自己紹介はしてくれたが差し出した手は取ってくれないので仕方なく手を引いた。

許緒「じゃあ僕も！僕の真名は季衣だよ！よろしくね兄ちゃん！」

千「ああ、また暫く客将をする事になったからよろしく頼む」

桂花「フンッ！」

これは打ち解けるのには時間がかかりそうだな。

華琳「貴女達も自己紹介をしてしまいなさい」

俺の後ろにいた楽進達が前に出る。

楽進「私は楽進です。真名は風、皆さんこれからは風とお呼びください」

李典「ウチは李典、真名は真桜や。よろしゅうな」

于禁「沙和は于禁、真名は沙和なの。よろしくお願いしますなの」

桂花「分かったわ。私の事も真名で呼んで良いわ」

俺のときとは違いすんなりと進んでいく。

ここまで男と女で態度に差があると寧ろ清しいな。

華琳「自己紹介も終わった様だし、今日は皆部屋を与えるからそこで休みなさい。明日からは仕事に励んで貰うわ」

風「はいっ！」

真桜「了解や！」

沙和「頑張るなの！」

千「ああ、分かった」

こうして、新しい仲間達との挨拶は終わった。

□□□□□

華琳「警備隊？」

千「ああ、以前から思っていたがこの町は大きな犯罪は無いが小さな犯罪はちらほら見かける事があるからな。風達を町に慣れさせる事を考えて警備隊でも作ったらどうだ？」

朝一番、俺は思った事を華琳に伝えに行くと華琳は考えるように黙り込んだ。

桂花「ちよつとアンタ！華琳様の治めるこの町に文句でもあるの！？」

千「客観的に言っているだけだ。警備隊が出来れば取り締まられる事を危惧して犯罪者も減るだろうからな」

桂花「ぐっ…！」

言い負かされたのがよほど悔しいのか、歯軋りし、拳を握りながらキッと睨みつけてくる。

華琳「千のいう事にも一理あるわね…それじゃあ警備隊の隊長は貴方がやりなさい」

千「俺はずっとここにいる気は無いぞ？」

華琳「貴方が言い出したのだから責任を持つのは貴方なんじゃない

「？」

：口じゃ華琳に勝てないな。

千「分かった。俺が旅立つ日までに警備隊は新しい隊長を決めておく。凧達には俺が伝えておく」

華琳「ええ」

そうして俺は凧達を集め、この事を伝えた。

千「…と言うわけで、お前達是不審者や犯罪者を取り締まる警備隊として町を巡回して貰う事になった」

凧「はい！お任せ下さい隊長！」

真桜「任せときや隊長」

沙和「やってやるなの〜！」

やる気十分だな。この様子なら大丈夫だろう。

そう思い、俺は3人を引き連れて町へ向かった。

□□□□

真桜「ほうほう、このカラクリ部品は…」

沙和「あ、この服可愛いの〜」

…考えが甘かったな。

真桜と沙和の2人は早速サボり始め、凧はと言うと…

凧「不審者…どこだ…？」

殺気を放ちながらきょろきょろと辺りを見渡していて、町民は皆怯えている。

はたから見れば妙な集団に見えるだろうな。

1つ1つ対処していくか。

千「真桜、工作中だ。それは後にしろ」

真桜「えー、ええやん少し位…」

千「カラクリの部品なら俺が持っているから少し分けてやる。だから今は警備に集中してくれ」

真桜「ホンマか！？よーし、やるでー！」

急にやる気になったな。

次は沙和だな。

千「沙和、服なら俺が今度俺が買ってやる、だから今は仕事に集中しろ」

沙和「で、でも…」

千「少しなら俺が奢ってやる」

沙和「さあやるの…!」

露骨に機嫌が良くなったな。

最後は凧か。

千「凧…」

凧「どうしました!? 不審者ですか!? 何処にいますか!?

千「す、少し落ち着け凧。そんなに気を張っていたら周りの町民も恐がって寄って来ないぞ」

凧「し、しかし…」

千「今日は道を覚えるつもりでやってみろ、肩の力を抜け」

凧「は、はい」

すると、真桜と沙和は真面目に仕事をし、凧はリラックスして警備を続けていた。

そして、今度は手分けをし、俺と凧、真桜と沙和で分かれて警備を行う事になった。

だが凧が何故か気まずそうにしている。どうかしたのか?

千「風、どうかしたのか？ 落ち着かないようだが…」

風「…隊長は…根に持っていないのですか？」

は？

千「何をだ？」

風「その…村で黄巾党と間違えて追い返してしまった事を…」

何だ、まだ気にしていたのか。

千「そんな事気にしなくていいんだ。お前は村を守ろうとしてそうしたんだ。褒められる事こそすれ、責められるような事はしていないと思うぞ」

それに、俺も怪しい格好をしていたからな。

風「で、でも…」

まだ気にする風。やれやれ…。

俺は右手の人差し指と中指2本を出して風の額を小突いた。

風「あうっ!？」

千「いい加減にしろ、俺は気にしていないと言っているだろ。その事に負い目を感じているのなら、少しでも働いてくれ」

凧「隊長：分かりました！全力で仕事をさせていただきます！」

そこまでしなくてもいいが…まあいいか。

千「まあ、程ほどにな」

凧「はい！」

所で：後ろにいるあいつ等は何をしているんだ？

□□□□□

千と凧が歩いている少し後ろを、真桜と沙和の2人は物陰に隠れて付いてきていた。

真桜「うう…付けて来たはいいけど複雑な気分や…」

沙和「何だか凧ちゃんの様子が変なの…少し顔を赤いし…あんなに笑った事は滅多にないの…」

真桜「隊長はウチの物やのに…いつもならからかう所やけど…」

嫉妬と仲間をからかう面白みが交じり合って複雑な心境になっている真桜。

沙和「所で真桜ちゃん、どうするなの…？」

真桜「暫くは様子見や。まだ凧が隊長の事をどう思っているかは分からへんでな…」

こうして、また千はフラグの芽を植えていくのでしたとさ…。

第四十二幕 警備隊！（後書き）

んー…風と稟ってどのタイミングで魏に入ったんですかね？

私、原作未プレイなので分かりません。誰か教えてくださいませ…。

ゲーム買うお金も無い貧乏学生なんです…。

次回は千と響が少しだけ出会う予定。

第四十三幕 千VS響（前書き）

サブタイ通りです。

第四十三幕 千VS響

千「事件？」

昼に華琳に呼び出されたと思ったら急に妙な事件があるというのを聞かされた。

千「どんな事件だ？」

華琳「この辺り一帯で商人や旅人が殺される事件が多発しているのよ」

千「それだけなら賊の仕業なんじゃないか？」

華琳「問題なのはその殺され方なのよ」

殺され方だと？

華琳「殺された被害者は生気が抜けたかのように干からびているらしいわ。もしかしたら貴方のような妖術師が関わっているかもしれないの」

成る程な、それでその事件を俺に解決させようと言う訳か。

もしかしたらその妖術師ってのは夜かもしれないな…。

千「了解した。それじゃあ早速行ってくる」

華琳「待ちなさい、念のために風を連れて行きなさい」

：風は強いが、もし夜との戦闘になったら守りきれるかどうか…。

千「いや、もし妖術師との戦闘になったら厄介だ。まずは相手の正体を見極めるだけだから俺1人でいい」

華琳「あの子が足手纏いになるという事？」

少し目を鋭くしながら俺を見る。もしこのまま「そうだ」と言ったら絶対に怒られるな。

千「分かった、それじゃあ今から風を連れて事件現場へ向かう。一番最近被害があった現場はどこだ？」

何かあったら俺が守るか：何とかなるだろう。

華琳「現場はここから南に行けばすぐよ」

千「了解」

そして、俺は風とその部下十数人を連れて現場へ向かう事にした。

□□□□□

千「ここが…」

日が赤くなりかけた頃に、俺達は事件現場に到着した。

確かに辺りには血の痕も無く、戦闘が行われた痕跡はも無かった。

千「見事に何も無いな…」

凧「隊長、どうしますか？」

この辺りは林か…

千「手分けして林の中を搜索してみよう。手がかりがあるかもしれない」

凧「そうですね、皆林の中を搜索するんだ」

部下の兵にそう命じて皆それぞれ林の中へと入って行った。

俺も木の上に飛び乗り、枝から枝へと跳んで移動している。

千「ん？あれは…？」

暫く搜索していると、少し空けた場所に木に寄りかかった兵士がいた。

体調でも悪いのか？

千「おい、お前どうした？」

少し警戒しながら近づいていく。

兵士「…」

だが返事は無い。

千「おい、大丈夫か？」

肩を掴んで揺らすと、兜が取れると、その姿は干からびて骨格が浮き出た顔の兵士だった。

千「これは…！っ！？」

状況を理解すると同時に後ろから殺気を感じる。

ポーチからクナイを取り出して逆手に持ち、後ろを振り向いて構える。

キーンと金属音が響く。

夜の装束を着て、長い茶色の前髪で目元を隠した男が、クナイで刺そうとしたが、それを俺がクナイで受け止めたからだ。

千「お前…夜か…！」

夜の男「暁…！倒…！」

妙な喋り方だな…！

俺はコイツのクナイを弾き飛ばし蹴りを入れようとするがバックステップで回避される。

千「名は？」

構えを解かずに問いかける。

夜の男「響」

千「なら響、この兵士や商人や旅人を殺したのはお前か？」

俺の問いに、響は静かに頷いた。

千「何故こんな事をする？」

響「罔…照準…貴様…」

…商人や旅人を殺したのは俺をおびき出す為か。

千「何人殺した…？」

響「20…？30…？記憶…皆無」

千「…そうか、結局何人俺の為に殺されたかは分からないが…お前が屑だというのはよく分かった…！」

今まで、本気で怒った事はあまり無い。

だが…今、俺は正直キレている…！

千「お前は…殺す…」

禍々しい程のチャクラを全身から放出すると、空気がピリツと音を立てた。

響「！？」

それに恐怖したのか1歩足が下がった。

その隙を見逃さずに素早く懐に入り、チャクラを溜めた拳で腹を殴り飛ばす。

響「ガッ!？」

その一撃で木々を突き破り、吹き飛んでいくが、生憎そこで止まるほど今の俺は甘くない。

足に超高密度チャクラを溜めて地面を蹴る瞬間に開放。飛んでいった響を凌駕するスピードを出す。

一瞬で追いつくと、足を掴んで引き寄せて再びチャクラを溜めた拳で腹を殴り、地面にめり込ませた。

響「グガッ!？」

顔を歪めて地面に叩きつけられる響は、口から血を吐いた。

クナイを逆手に持ち、左胸に狙いを定めて振り下ろす。

千「死ね」

響「っ!」

だが咄嗟に飛びのいてクナイを回避した。

響「ゴホッ…重症…油断…逃走…」

また血を吐きながらも足を下げて逃げようとする。

凧「隊長！どうしましたか！？」

そこへ凧と4人の兵士が現れる。

響「好機…！」

傷ついた体で素早く兵士の後ろに回りこむと、印を結んでから頭を掴んで宙吊りの状態にする。

兵士1「なっ！？は、離せ！」

響「吸遁・生氣吸収の術」

目に見える程のチャクラが、兵士から響へと移っていく。

千「チャクラを吸収…？いや、生命エネルギーをそのまま吸収しているのか！？」

その事に気が付いた俺は響に接近しようとするが、響が頭を掴んでいる兵士は生命エネルギーを抜かれて干からびており、それを吸収した響は傷が少し治っていた。

そして吸収し終えたのか、兵士を俺に投げ捨てて更に離れた。

千「貴様…！」

響「クク…2人…」

印を結び、瞬身の術を発動すると兵士達2人の背後に回りこんで印を結びそれぞれの頭を掴んだ。

俺は投げられた兵士の体を受けて反応が遅れた。

響「吸遁・生氣吸収の術…！」

兵士2「ぐああ…！」

兵士3「か、体が…！」

みるみる内に2人の兵士は干からびていき、カラカラになる頃には響の傷は全て治っていた。

響「他人…生命…美味」

ペロリと舌を出して口元にあった血を舐め取る。

兵士4「貴様！よくも仲間をー！」

残っていた兵士が槍を構えて響に突っ込んでいく。

千「待て！」

俺が制止しても聞かず、兵士はどんどん響に近づいていく。

響「放遁・生氣昇華の術！」

兵士4「何っ！？ぐあああああっ！」

印を結んで口から蒼い波動を吐き出すと、その波動に兵士は飲み込まれて、吹き飛んでいった。

千「今余分に吸い取った生命エネルギーを溜め込んで圧縮して放ったのか…」

響「血継限界…我…吸遁…放遁」

吸収する血継限界と放出する血継限界か…厄介だな。

千「火遁・豪火球の術！」

印を結び大きな炎を吹き出す。

響「吸遁・火遁吸収の術」

印を結んで口を広げると、俺の放った豪火球を飲み込んだ。

千「これも吸収したのか…？」

響「放遁・豪火球の術！」

と思いきや、今度は響が豪火球を放ってきた。

千「水遁・水陣壁！」

豪火球が迫ると、印を結んで口から水を吐き、水の壁を形成して火球から俺と凧を守った。

千「吸遁で吸収した術は放遁で本人も使えるようになるのか」

響「正解……一時撤退……」

どうやら、外傷は全て直ったらしいが体の中はまだ傷ついているらしく、逃走の構えをしていた。

千「今度は逃がさん」

響「ハッ！」

ポーチから取り出した巻物から、風魔手裏剣を2つ取り出すとそれを俺に投げつける。

風魔手裏剣と言うのは、風車のような形をした折りたたみ式の大きな手裏剣だ。

それを軽く飛んでかわすがよく見るとワイヤーが付いているのが分かった。

千「仕込み手裏剣！」

そう気が付いた時には、響はワイヤーを引いており、俺に向けて弾けた手裏剣の刃が飛んで来る。

体を捻り地面に手を付くと、足で飛んで来る刃を捌いた。

風の方にも飛んでいったらしいが、身につけているナックルで叩き落していた。

この隙に響は逃げようとする。

俺は体を捻り、体制が乱れていた為、すぐに追う事は出来なかったが、凧が腕に淡い光を溜めていた。

凧「はあっ！」

そして、バスケットボール程の大きさの光の玉を発射すると、それは響に向かって飛んで行った。

響「なっ…!？」

油断をしていたのか、もしくは凧を甘く見ていたのか、その玉は響に直撃した。

響「ガハッ！」

すると響はまた吐血する。

凧「やりました！隊長！」

千「まだだ！」

凧「えっ…？」

倒したと思って浮かれている凧だが、響は大量のクナイと手裏剣を取り出して凧に向けて投げつけていた。

印は間に合わない。そう判断すると草薙の剣を抜いて凧と響の間に割り込み、手裏剣とクナイを弾いた。

が、少し弾き損ねて腕や足に刺さる。

千「チツ…」

舌打ちをするが、響は今度こそ逃げたように追っても良かったが、尾獣の存在を危惧してそれ以上追う事はしなかった。

何尾かは分からないが大然が一尾を持っていたのなら響も尾獣を持っている可能性が高い。

凧「隊長！大丈夫ですか？」

千「ああ、傷自体は大したことは無い」

刺さっていたクナイと手裏剣を引き抜き、医療忍術で止血する。

千「今回の事件の犯人は奴だな…戻って華琳に報告しよう」

日も既に地平線に沈もうとする頃に、俺達はこの林を離れた。

暁と夜は再び出会う。

そして夕暮れは始まった…。

第四十三幕 千VS響（後書き）

六尾登場はもう少し後ですね。

次回はリクエストにもあった華琳の回にしようと思います。

第四十四幕 覇王と少女の狭間で…（前書き）

リクエスト通りの華琳の回。

第四十四幕 覇王と少女の狭間で…

響との戦いから既に1週間は経ったがこれといって大した動きは無かった。

強いて言うなれば、怪奇事件は収まり、また前のように旅人や商人がこの町に来れるようになったという程度だ。

そして、俺は何時響が襲ってきてもいいように鍛錬の最中だ。

今は、体術の修行だ。

武器を下ろして流れるような動作で次々に突きや蹴りを放っていく。

千「フンッ！ハアッ！」

最後に跳び回し蹴りを繰り出して終わりだ。

そこへ、パチパチと拍手が聞こえる。

千「華琳…」

そう、今俺に拍手をしたのは少し離れた所にいる華琳だ。

華琳「見事な体術ね」

千「まあな…所で、何をしているんだ？」

この時間は債務をしていると思ったんだが…。

華琳「今は休憩よ。気分転換に歩いていたら貴方を見つけて…暫く見させてもらったわ」

千「俺の体術を見てもそう面白いとは思えんがな…」

華琳「あら、そうでもないわよ?」

まあそういう事にしておこう。

千「…華琳、お前最近休んでないだろう?」

華琳「…何の事かしら?」

千「顔に疲労感が見えるぞ。大方前の怪奇事件の後処理に追われてたんだろう?」

華琳「…」

この沈黙は肯定と受け取っていいだろう。

千「少し休んだらどうだ? 桂花や秋蘭もいるし…債務は任せられるだろう? 何なら俺もやる」

華琳「でも…」

千「大丈夫だ、しっかりやる。お前もしっかり休め。お前は君主である前に1人の女なんだからな…」

あんな小さな（口に出したら怒られそうだが）少女が、俺以上に債

務をこなしては、いずれ体を壊してしまうかもしれないからな。

：しかし、待っても返事は来ないので華琳の方を向いてみる。

華琳「：／／」

ほんの少しだけ顔を赤くした華琳は、少し驚いたように俺を見ていた。

千「どうかしたか？」

華琳「い、いえ…何でもないわ…／／」

そう言うときさつさと城の中へ戻っていつてしまった。

まあ休みの件は後で秋蘭や桂花に頼んでみるか…。

□□□□□

視点・華琳

少女…何時からかしら、そう呼ばれなくなったのは…。

以前にも、千は私の事を少女と呼んでくれた…そして、千が去った後にあつた喪失感…。

この感情は何？

華琳「私らしくもない…」

部屋に戻り、債務を続けるが、頭の中は千の事ばかりではかどらない。

この感情…いや、本当は理解している。

自分でも分からないが…いつの間にか、千に恋をしている、と。

千が傍にいと嬉しい。千が遠くにいと寂しい。千に近くにいると欲しい。

これが恋でなくて何だというのか。

でも、この恋はすぐには叶わないでしょうね。

千は、暁という組織を率いており、統一計画とい計画を成し遂げようとしている…。

どんな計画かは分からないけれど、千ほどの男がやり遂げようとしているのなら生半可な計画ではないのは間違いないでしょう…。

でも…

華琳「いいわ、その計画を放棄させてでも、私のモノにしてあげる…」

その為に、私はある考えを浮かべた。

やはり明日の債務は桂花と秋蘭に任せてみましょう…フッフ。

□□□□

視点・千

千「298! 299! 300!」

首切り包丁の素振りを終えて、背に戻して汗を拭う。

千「さて…債務はもう終わったし…鍛錬も終わった…やる事が無くなったな」

しかし秋蘭と桂花が忙しそうだったな…華琳は今日は休んだようだし…俺も手伝いに行くかな。

そう思い、まずは桂花の部屋に行こうとすると厨房から良い臭いが漂ってくる。

千「何だ…? まだ夕飯には早いな…」

少し気になったので、覗いて見る事にして、厨房の扉を開けた。

千「誰かいるのか?」

扉を開けたその先には、華琳が料理をしていた。

華琳「せ、千?」

千「どうした…? 何で料理なんてしているんだ?」

華琳「こ、これは…」

ん？あれは…

千「桃饅じゃないか！なあ、1つくれないか？」

甘い物好きの俺には堪らないな。

華琳「え、ええ。いいわ」

許可を貰い、1つ口に運んでみると…

千「…美味しい」

丁度いい甘みだ…。

華琳「当然よ。私が作っているのだからね」

千「華琳がこんなに料理が上手いとは知らなかったな…でも何で急に料理なんて作ろうと思ったんだ？」

華琳「それは…」

千「…と言うかその残りは一体誰が食べるんだ？」

華琳「これは…」

ん？何慌てているんだ？

千「どうした？」

華琳「あ、貴方の為に作ったのよ…」

小さな声でそう言う俺に桃饅の乗った皿を突き出してくる。

千「俺に…？何故だ？」

華琳「昨日休めと言ってくれたお礼よ」

千「そうか、ならありがたく頂いておく」

そして俺は桃饅を美味しく頂いた。

□
□
□
□
□

視点・華琳

見つかって少し慌てたけれど…何とかなったわね。

でもやっぱり千は餌付けはされないかしら…

別の案も考えないとね。

第四十四幕 覇王と少女の狭間で…（後書き）

まあこんな感じです。

そして次回は再びリクエストにあった千の幼児化をやってみたいと思います！

第四十五幕 小さくなっちゃった…!?!? (前書き)

キャラ崩壊の嵐!

この千の幼児化は呉や蜀でもやる事にします。

第四十五幕 小さくなっちゃった…!?

視点・真桜

ウチは李典！真名は真桜や！

曹操軍の将として働いって、今は警備の為に町を回っとるんや。

それにしても…

真桜「はあ…最近隊長と何も進展してへんなあ…華琳様や春蘭様、秋蘭様もおるし、凧も怪しくなってきた、敵が増えてきたし…」

そう、今のウチの悩みは、一目惚れをした隊長との仲が全く進展していない事や。

恋敵まで多数出現…このままやとただの上司と部下の関係になってまう…！

真桜「あ…何やウチがもっと綺麗に…可愛くなるしかないんかな？」

???「そこのお嬢さん…可愛くなりたいのかい？」

真桜「何や？」

急に声をかけられて振り向くとそこには1人の爺さんが立っとな。

老人「何か悩みがあるのではないかい？お嬢さん」

真桜「…まあ、気がある人に振り向いて貰うにはどうしたらええかな…って考えとったんやけど…」

老人「ならこの薬を使いなさい…きっと今より可愛くなれるはずじゃ…」

そう言って爺さんはウチに液体の入った小さな入れ物を渡してきた。

真桜「コレ…何や？」

めっちゃ胡散臭いけどなあ…。

真桜「なあ爺さん…っておらんし」

いつの間にか爺さんもおらんくなっとなるし…まあ貰えるなら貰ったのか。

その入れ物を手に、ウチは城に戻る事にした。

□□□□□

視点・千

今日は術の修行だ。

千「火遁・炎弾！」

口から小規模の火を吹き、次の印を結ぶ。

千鳥の印を素早く2回結ぶ。

千「右手に千鳥…左手に千鳥…」

螺旋連丸があるなら千鳥の連続技も考えてみた。

千「千鳥対連！」

思い切り地面を蹴って目の前に両手で突きを出す。

バチチチチと雷の音が聞こえて、次第に雷は小さくなっていった。

千「よし、ここまでだな」

術の修行を終えて部屋に戻ろうとする途中、なにやら唸っている真桜を見つけた。

千「どうした？真桜」

真桜「うーん…これどないしようか…」

そう言っている真桜の手の中には1つの小瓶で、中には水のような透明な液体が入っている。

千「何だそれ？」

真桜「これはな…って隊長！？何時の間に！？」

驚いたように俺から離れる。と言うか俺も真桜の反応で驚いた。

千「い、いや、さっきからいたが」

真桜「それなら声かけて欲しかったわあ…」

千「声もかけたぞ？何悩んでるんだ？」

真桜「あー…別に…何でも…」

少しづつ後ろに下がっていく。何か言い辛い事でもあるのか…？

真桜「ホンマ、何でもないから！ほな！」

そのまま猛スピードで走り去って行った。

…結局なんだったんだ？

まあいいか…そう思って俺は自分の部屋に戻る事に…

凧「隊長」

後ろから呼び止められた。

千「ん？凧か、どうした？」

凧は、少し怒っているような顔をしていた。

凧「真桜と沙和を見ませんでしたか？」

千「真桜は今どこかに行ってしまったが…どうかしたのか？」

凧「あの2人：警備の最中にサボってカラクリの部品やら服やらを買ったとの報告が入っていて…」

真桜、沙和、ご愁傷様だ。

凧「私は沙和を探しますので、隊長は真桜を呼んで来てくれませんか？」

千「分かった、今から行ってくる」

そうして、俺は真桜の部屋に向かう事になったのだが…

桂花「あつ、ちょっとアンタ」

今度は何だ？

千「どうした？」

桂花「真桜に頼んであった書類がまだ届かないのよ。出来ているようだったら持ってくるように言っておいて、出来ていないならアンタが手伝ってきなさい」

…真桜、ホントに何やってるんだよ…。

千「分かった、今から真桜の所に行くし…手伝ってくる」

また用事が増えたな…まあ仕方ないか。

□□□□□

視点・真桜

真桜「はぁ…ホンマにどないしよう」

怪しいと言えば怪しいけど…可愛くなれるんなら使ってみたいしな
ゝ。

…こうなったら飲んでみるかな。入れ物には…『飲み物に入れて飲んで下さい…効果は1日です』か。

早速水を用意してその中に薬を入れる。

真桜「…これで！」

そして、それを飲もうとした時！

千「おい、真桜」

真桜「わひゃ！？たたた、隊長！？どないしたん？」

扉の向こうから隊長の声が聞こえた。

千「風が呼んでたぞ、何だか少し怒ってたみたいだし…速く行った方がいい。それと書類が間に合っていないみたいだから手伝いに来たぞ」

なんかしたつけ…？まさか警備の最中にカラクリの部品を買ったのがばれたのかいな！？

それに書類の事すっかり忘れとった！

真桜「あかん！はよ行かんと！あ、隊長！書類の件は部屋で待ってな！」

この後、風にこってりしぼられたのは言うまでもないな。

で、部屋に戻って来て…

真桜「隊長！待たせてスマン！」

千「ああ、気にするな。所で、ここに置いてあった水飲んだからな」

真桜「ああ、水くらい幾らでも………飲んだん？」

という事は…薬も！？

千「ここにあったのをな。修行した後で喉が渴いててな…駄目だったか？」

真桜「い、いやいやいやいや！駄目やないけど…どこか、変わった事あらへん？」

見た目に変化は無いって事はやっぱり変な薬やったとか！？

千「別に…ただの水だったぞ？どうかしたのか？」

真桜「い、いや！何もないならええんや！」

やっぱりただの水だったのかな…？まあ何も無くて良かった事によ！

ま、その後は無事書類も終わって床に付いた。

でもホンマ、あの爺さん何やったんや？

インチキ商人なら金は取るやろし…水なんて何でタダでくれたんやろ？

ま、ええか。

□□□□□

視点・凧

今日は隊長と共に警備に出る日。門の前で待ち合わせだ。

全く、昨日は真桜も沙和も…サボった上に真桜の方は隊長に書類を手伝わせるとは…。

それにしても今日は遅いな…隊長。

凧「寝過ごしたのか？…隊長にもこんな日があるか」

そう思い、隊長を起こしに隊長の部屋に向かう。

凧「隊長、起きて下さい！隊長！」

何度声を出しても起きてこない…まさか具合でも悪いのか!?

凧「隊長! 大丈夫ですか!？」

本当に具合が悪かったら大変だ! 失礼だが部屋に入れてもらおう!

寢台には、布団がこんもりと盛り上がっている。

だが、心なしに隊長より小さいのではないか…?

凧「隊長! 起きて下さい!」

その盛り上がっている所を揺する。やはり少し小さい…?

するともぞもぞと山が動き、中から小さな隊長が出てきた………え?

小さな…隊長?

千(小)「…お姉ちゃん、誰?」

えええー!?

□□□□□

凧「で、どうでしょうか…」

千(小)「…?」

見た目は4、5歳程度だろうか? まあ、これでは仕方がないので、

とりあえず華琳様に報告してみると、いつの間にか魏軍の将が集まっていた。

それより…首を傾げる隊長（小）…か、可愛い！／／／

華琳「そ、そうね…／／こうなったのには何か理由がある筈…皆、心当たりは無いかしら？」

皆少し顔を赤くしながら考える。

最近の隊長は鍛錬をよくしていたな…それで昨日は真桜を呼んでもらって…確か真桜が書類を手伝ってもらって…。

真桜「ま、まさか…！？」

…ん？

今の真桜の声に皆気づき、真桜をジッと見ている。

華琳「真桜、心当たりがあるようね？」

真桜「へっ！？う、ウチは別に何も…！」

凧「真桜…正直に言った方が身のためだぞ…」

皆で真桜に詰め寄っていくが、隊長（小）は遠めで不思議そうに見ているだけだ。

真桜「う…わ、分かりました…」

秋蘭「つまり、千が誤って飲んでしまったその薬入りの水のせいでこうなったと？」

真桜「はい…」

すっかり小さくなった真桜だが…正直に言って………良くやった！

季衣「あはは！今日だけ兄ちゃんじゃなくて弟になるのか！」

小さくなるのは流石に予想外だが、確かに可愛くなっている！

桂花「で、これは何時になったら戻るのよ？」

真桜「入れ物には、効果は1日と…」

ホッ…この隊長も可愛いが、元に戻らなかったらどうしようかと思っただけ…。

春蘭「全く…よく考えずに使うからこうなるのだ」

桂花「それ、アンタにだけは絶対に言われたくない言葉よね」

…いかん、不覚にもそうかもと思ってしまった。

春蘭「なんだと!?!」

桂花「なによ!?!」

ああ、お2人が犬猿の仲なのは知っていたが何も今いがみ合わなくとも…。

千（小）「喧嘩は良くない…」

その間に割って入る隊長（小）。ってこれは少し危ないのでは!?

春蘭「退いている千!」

桂花「アンタは引っ込んでなさい!」

千（小）「喧嘩は良くない…だから…」

私の角度からは見えなかったが恐らく少し涙ぐんだ目で2人を見つめただろう。

春蘭「はうっ!?!／／／」ズキューン!

桂花「ななっ!?!／／／」ズキューン!

…? お2人が急に動かなくなった?

春蘭「華琳様っ! これをお持ち帰りしても良いでしょうか!?!／／／」

春蘭様が隊長（小）を抱きしめて…って何ですか!?

桂花「ななな…何よ…子供とは言え、私が男なんか…／／／」

桂花様も両手を顔に当てて顔を振っているし…。

華琳「…恐るべしね」

季衣「ねえねえ千くん！一緒に遊びに行かない？」

千（小）「…うん！行く！」

今度はパァアと花が咲くような笑顔になった。

今度は私の位置からでも見える…

凧「っ！？／／／」ズキューン！

真桜「うくっ！？／／／」ズキューン！

沙和「はあっ！？／／／」ズキューン！

季衣「うっ！？／／／」ズキューン！

秋蘭「なっ…！？／／／」ズキューン！

華琳「…！？／／／」ズキューン！

い、いかん！は、破壊力がありすぎる！／／／

季衣「じゃ、じゃあ行こうか！／／／」

千（小）「うん！」

そのまま季衣は、隊長（小）を連れて部屋を出て行ってしまった。

華琳「と、とにかく…千は精神年齢も若返っているみたいだし、今日は仕事は部下にやらせなさい。皆で千の世話をするわよ…／＼／」
皆「はいっ！」

□□□□

凧「千くん」

千（小）「あ、凧お姉ちゃん、どうしたの？」

私達の真名も忘れていたようなので、真名を再度教えて世話をしている。

凧「いや、甘い饅頭が手に入ったから…よかったら食べるかな？」

千（小）「うん！」

季衣「ぶー…僕にも頂戴よ！」

せがまれたので季衣様にも渡す。

私が渡した饅頭を笑顔で頬張っていく…か、可愛い！／／／

秋蘭「凧、幸せそうな所悪いが…この千は私が貰う！」

なにっ！？

気を抜いた一瞬で秋蘭様が隊長（小）を抱えて走り去って行った。

千（小）「え？」

凧「ま、待って下さい秋蘭様！」

季衣「ああー！秋蘭様！」

追いかけようとするが既に遙か先…逃がしたか！

真桜「そうは…」

沙和「させないのー！」

秋蘭「なっ…！？」

角から飛び出してきた真桜と沙和が足引っ掛けをしようとする。

秋蘭「甘いっ！」

それを跳んで避ける秋蘭様。

沙和「行かせないのー！」

跳んだ秋蘭様の服の裾を掴んで飛び越えるのを阻止しようとする沙和。

だがその引っ張られた勢いで隊長（小）が放り出されてしまった。

真桜「あかん！」

凧「千くん！」

ああっ！間に合わない！

春蘭「ホッと」

しかしそれを春蘭様が受け止めた。

良かった…怪我は無いようだ…。

春蘭「フッフ…悪いなお前達！千は貰った！」

…しまったあ！

すぐに追いかねければ！

そう思い、固まっていた皆は瞬蘭様を追いかける。

春蘭「追いつけるものなら追いついてみる！」

ビーン！と十字路で足元に縄が引っ張られる。

ガッ！と春蘭様の足がそれに引っ掛かる。

春蘭「へっ？」

そして春蘭様の体が宙に浮く。

春蘭「ギャフン！？」

千（小）「だ、大丈夫？」

あの心配そうな目…ああ…可愛い／＼／

何とか隊長（小）の体は庇ったみたいだが…一体あの仕掛けは…？

そして十字路から出て隊長（小）の体を抱え上げたのは…。

桂花「か、勘違いしないでよ！別にコイツが欲しいんじゃないよ…
アンタ達に任せるのが心配なだけよ！」

…そう言って桂花様は隊長（小）を抱えて走って行ってしまった。

春蘭「…け、桂花あ…！！！」

怒りで顔を真っ赤にし、春蘭様は桂花様を追いかけていった。

凧「私達も急ぐぞ！」

真桜「了解や！」

沙和「取り返すなのゝ」

秋蘭「待て姉者！」

春蘭「悪いが今回は退けんだ秋蘭！」

季衣「桂花様！弟を返してください！」

流石に、軍師である桂花様に、私達はすぐに追いついた。

春蘭「逃がさんぞ桂花！」

桂花「こ、こっち来ないでよ！」

凧「ならたいちよ…千くんを置いていって下さい！」

真桜「ちっこい隊長返しーや！」

桂花「くっ…このままじゃ…キャッ!？」

後もう少しで追いつくという所で桂花様が足を取られて転んでしま
う。

春蘭「うっ!?!急に転ぶなっ！」

その桂花様に躓いて春蘭様、秋蘭様と続いて全員転んでしまう、

凧「痛たた…」

沙和「うう…はっ!そう言えば千ちゃんは何処なの？」

姿が見当たらないので皆重なったままで隊長（小）を探す。

千（小）「きゅううう」

すると重なりの1番下で潰れた隊長（小）が目をグルグル回して気
を失っていた。

凧「せ、千くん!？」

秋蘭「い、いかん…早く退かないと…!」

しかし皆慌てて退こうとするのでかえって手間取っている。

千「むぎゅ!」

あ!もつと押しつぶしてしまった!

華琳「貴方達…」

か、華琳様!?!何時の間にここに…!?

華琳「私は千の世話をしろと言ったのよ…?誰が取り合えと言ったのかしら?」

いかん…華琳様からありえない程の覇気を感じる…!

季衣「華琳様…これは…その…」

真桜「取り合ってたちゅうか…」

華琳「問答無用よ!千は私が預かるわ。各自仕事に戻りなさい!」

全員「は、はいっ!」

その怒声で私達は仕事に向かった。

□□□□

視点・華琳

気絶している千（小）を私の部屋に連れて戻った。

華琳「さて、仕事の続きを…」

千（小）「う、うん…」

気が付いたようね…。

華琳「大丈夫だったかしら？」

千（小）「う、うん…華琳お姉ちゃんありがとう」

少し潤んだ目で怯えた様子でお礼を言ってくる。

う…／／／や、やるわね千…私をここまでうろたえさせるとは…／／

千（小）「華琳お姉ちゃんはこれからお仕事…？」

華琳「え、ええ…／／／そうけど…／／／」

千「僕にも何か手伝える事はない？」

ニコリと笑って首を傾げる。

…はうっ!?!?／／／

華琳「そうね…それじゃあ夜の相手をして貰おうからしら？／／／」

千（小）「夜の相手…？」

華琳「そうよ…私の…」

そこまで言った所で、扉が開いて将の皆が入ってくる。

春蘭「華琳様！夜の相手なら千でなく私がおります！だから千をこちらに！」

桂花「私もいます！」

華琳「あ、貴方達…！？」

突然の出来事に流石の私も驚きを隠せない。

凧「華琳様！こ、子どもにそういう話は早いと思います！」

真桜「そうや！いくら華林様でも今のちっこい隊長は譲れんで！」

そのままギャーギャーと討論を続け、結局落ち着いたのは夜になってからだった。

□□□□□

翌日、千の体は元の体に戻ったけれど…

千「なあ、昨日の記憶が無いんだ…が何かあったのか…？」

華琳「さ、さあ？少し疲れているんじゃない？」

千「そうか…少し鍛錬の量を減らすかな…」

小さかった時の事を覚えていなかったのは幸か不幸か…。

千「所で今日は皆の姿が見えないがどこかに出かけているのか？」

華琳「まあそんな所ね…」

千「そうか、俺もそろそろ部屋に戻って書類の処理をするか…」

ふう、何とか誤魔化したわね…皆を真桜が薬を貰った老人を見つけ出してもう1つ薬を貰おうとしてるなんて言えないわね…。

こうして、魏の混乱の日は終わった。

第四十五幕 小さくなっちゃった…!?(後書き)

はいっ! 本当にスイマセンっした!

反省も後悔もしていますのでどうかお許し下さい!

昔の千はかなり子どもっぽいですね…今とのギャップが…作者も書いててビックリ。

あ、あと薬をくれた老人は本編とはまるで関係ないので今回のような番外編で出る程度です。

お知らせ

久しぶりの更新と思われた方がいるかもしれませんが…しかし申し訳ありませんそうではありません。

実はこの作品の削除を考えております。

詳しいことは活動報告にも書き込んでありますが、一応此処でも書きたいと思います。

本日この作品を自分で読みましたが、恥ずかしい位の内容でした。

この作品を応援して頂いている方々には申し訳ありません。

皆様の意見によっては1度削除しようかと思しますので、意見を貰いたいのです。

もし削除する事があっても、何時か大幅に内容を変更したりメイク作品を投稿する事を考えています。

それでは皆さん、ご意見お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7115o/>

真・恋姫†無双 -暁伝-

2011年8月2日23時04分発行